
月神の姫 太陽の王子

海野 真珠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月神の姫 太陽の王子

【Nコード】

N7959J

【作者名】

海野 真珠

【あらすじ】

戦火に見舞われた祖国を亡国にしないため、敵国へ嫁すことを決めた王女。しかし、妾妃として嫁してきたはずだが、迎えられたのはとても妾妃としての待遇ではなかった。求められているのは、月神の力。すべては、月神の姫を手にするために……。万物の受け皿である月神と、万物の配り手である陽神。決して相容れぬ存在の2人。しかし、それは……。 第十章連載開始

序章

広大なる領地一面が真っ赤に染まる。

国交の要である海にも火の手が上がる。

豊かな資源の基である山々も炎に包まれ、いよいよ陥落が近いことを知る。

実りの季節前に始まった戦に、この時期に開戦した相手国に憤りを覚える。

開戦間近に解放した民たちは、無事逃げおおせただろうか。

民無くして国は成り立たぬ。

解放したその瞬間から、我等王族は国を捨てた。

だからといって、敵国に明け渡す気は毛頭無かった。

「姫さまっ ネフェリアさまっ」

塔の最上階に位置する祈りの間。

そこで最後の祈りを捧げていたわたくしを呼ぶ声。

「シルフィ、何事です」

息を切らして入り口に佇む乳姉妹。

鎧に身を包み剣を持ち、戦いの女神と呼ばれる自慢の姉の姿に、自然と笑みが浮かんだ。

「只今、エシユロンより使者が… すぐに王宮へお戻りをっ」

「エシユロンから…」

戦を仕掛けてきた敵国の名に、遂に最期が近いのだと知った。

「わかりました。すぐに参りましょう。父上様と母上様は御無事か？」

最後までこの国と共に在ることを望んだ父王と母王妃。民のことを気にかけ、逃げることを良しとしなかった。

「王も王妃も既に謁見の間にお入りです。使者がネフェリアさまの御同席を望みましたので、私がお迎えに」

たかが第一王女にすぎないわたくしの同席を望むのは、わたくしが唯一の王位継承者であるからだろう。

母以外の妻を娶らなかった父に、わたくし以外の子供はいない。

塔の長い階段を降りれば、入り口にはシルフィの率いる近衛隊が控えていた。

周りを守られ、王宮までの道に行く。

余程地位のある者が使者として来ているのか、エシユロンの兵たちが無礼をはたらくことは無かった。

「オルフェウス王家第一王女、ネフェリアさま、お入りになられます」

謁見の間の入り口の衛兵が、わたくしを認めて中へと声をかける。

中から扉が開き進むと、中にはおびただしい量の荷と困惑顔の王と王妃、そしてエシユロン国の衣装を着た長身の男の姿。

「ネフェリア…」

王座から、父王がわたくしに声をかける。
その声には覇気がない。

「オルフェウス王家第一王女ネフェリアにございます。お呼びと伺い参りました」

使者の前に立ち、優雅に一礼してみせる。

敗戦国といえど、王女としてのプライドまで棄てるわけにはいい。

「ネフェリアさま、初めてお目にかかります。わたしはエシュロン王家第一王子、シーガル。この度父、エシュロン王の命により使者として参りました」

敗戦国の王族に取るには丁寧すぎる礼を取られ些か困惑するが、差し出された手に自分の手を重ねた。
まるで忠誠を誓う騎士のように接吻を贈られ、わたくしの立場に疑問が生まれた。

敗戦国の王女にする行為ではない。

これではまるで、わたくしの方が立場が上のようなではないか…

促されるままシーガル王子の向に腰を下ろせば、口を開いたのは意外にも母王妃だった。

「ネフェリア、エシュロン王の元へ参ってはくれませんか？」

静かに告げられたその言葉に、拒否権はなかった。

「…詳しいお話を伺っても？」

目の前に座るシーガル王子に言えば、一瞬目をみはる。

当然だろう。戦に敗れた国の王女が敵国の王の元へ下るなど、他国への見せしめのための人質になると言うことを意味する。

顔色一つ変えず承諾するなど有り得ないことだ。

「オルフェウス国の月神の姫を、我がエシュロン王家にお迎えしたい。無事お迎え出来たあかつきには、同盟国としてオルフェウスの復興に尽力いたす準備が出来ております」

淡々と告げられるシーガル王子の言葉。

わたくしがエシュロンに下れば、我がオルフェウス国は亡国では無くなる。

王女として、王族の務めとして、わたくしに選択できる道は一つしかなかった。

第一章 一話／離宮星の宮

オルフェウス国が戦火に包まれて一月余り。
わたくしはエシュロン王の下へ嫁してきた。

我がオルフェウス国より北に位置するエシュロン国は、既に冬支度に入っていた。

あの日、シーガル王子が持ってきたおびただしい量の荷は、わたくしの婚礼道具であった。

全てエシュロン国の物が用意され、オルフェウス国の物は何一つ持たなかった。

装飾品から衣装に至るまで、エシュロンの物で着飾り嫁してきたのだ。

「ネフェリアさま、お疲れでございます。本日はごゆるりとお休み下さいませ」

唯一オルフェウス国から随行してきたシルフィに促され、早々に寝室に籠もる。

後宮の部屋よりも大きく豪華なソレに、思わず溜め息が漏れる。

エシュロン国がわたくしに用意したのは後宮の一室ではなく、星の

宮と呼ばれる離宮であつた。

後宮の半分ほどの広さの建物に、侍女が三人と二人の料理人、下女五人の使用人と、シルフィとで暮らすことになり、この離宮の主として迎えられた。

本宮である王宮から結構な距離があり、裏には雑木林、表には花園と、自然豊かなこの離宮は元々王の別荘として建てられたらしい。

エシュロン国王に嫁すにあたって、提示された条件が二つ。

一つ、オルフェウス国の物は一切エシュロン国に持ち込まないこと。

一つ、オルフェウス国より唯一人の随行者も付けないこと。

一つ目の条件は特に徹底され、迎えに来たエシュロンの一団に付いて来た侍女の監視の下、身支度を整えた。

二つ目の条件は、シルフィが承諾しなかった。

小さい頃から一緒に育った乳姉妹は、唯一人わたくしをエシュロン国へ遣ることを良しとしなかった。

自身の身分さえ交渉の道具として使い、最終的にシーガル王子の裁量でシルフィだけは随行が許された。

一隊を率いて迎えに来たシーガル王子に連れられエシュロン国へ入

ったのが今日の昼過ぎ。

そのままこの離宮に連れられ、待っていた宰相に出迎えられた。

本日、国王陛下は都合により出迎えはおろかお渡りも叶わぬと伝えられ、本宮女官長と後宮女官長、この離宮の使用人の紹介を受けた。一通りの紹介を受け終われば、時間は夕食時に差し掛かり、お開きになったのだが…

どうも釈然としない。

わたくしは、エシュロン国に妾妃として嫁してきている筈だ。

今のエシュロン王ハズパド三世には、

第一王子シーガル、

第一王女セナリス、

第三王子ベアーズ、

第五王女ミュゼを生んだ

正妃ティンカーがその御位におり、

第二王子ソイドを生んだ

妾妃ミト、

第二王女キルギス、

第四王女クオーツを生んだ

妾妃ケニア、

第三王女ツァイス、

第四王子ブライアンを生んだ
妾妃ラパス

をはじめ、八人の妾妃と多数の側妾が後宮に入っている。

王妃以外は皆エシュロン国に滅ぼされた亡国の王族や同盟国の王族
の出で、わたくしと何ら立場は変わらない。
にもかかわらず、わたくしだけが離宮を与えられた。

ふと、シーガル王子の言葉が蘇る。

オルフェウスの月神の姫をエシュロンに迎えたい。

同盟国の一妾妃ではなく、月神の姫として迎えられたならば…。

本宮から離れた離宮。

自然の中に建つ星の宮。

月神の姫。

そういうことだろう。

わたくしとしても他の妾妃方と寵を競うことはしたくない。

エシュロン側の思惑がどうであれ、せつかく整えられた居心地の良
い場所を自ら潰すような愚かな真似はしたくないと結論付け、眠る
ことにした。

第一章 二話／朝の祈り

翌朝。

まだ夜が明け切る前にいつも通り目覚めた。

窓から外を見れば、太陽が登り切る前、まだ月がその姿を隠す前の、両方が存在する神秘的な時間。

わたくしは朝の祈りを捧げるため、夜着の上から厚手のローブを纏い、寝室から出るため扉を開けた。

「姫さま、おはようございます」

内側から開いた扉に目を見開きつつも挨拶をする護衛。

確か、名は…

「おはよう、ビルダー、ボード。星見の間へ参ります」

「お供いたします」

名を呼ばれたことに驚きつつも共を申し出る二人の護衛。

わたくし付きの護衛だと紹介されたのは全部で八人。

三交代で持ち回りで付くらしい。

宮の外には衛兵が常に十人見回っており、滅多な者は近付くことができない。

息苦しさを感じるが、それは仕方ないことだろうと諦める。

前後を二人に挟まれ屋上へ出れば、視界を遮る事ない空間が広がる。

東のテラスに足を向ければ、地平線にやっと太陽が確認出来る程度。視界を上げて真上を見れば、白光の月の姿。

月の女神に祈りを捧げ、太陽の神に祈りを捧げる。

祈るのは、一度は捨ててしまったオルフェウス国の民のこと。そして、このエシユロン国の民のこと。

民なくして国は成り立たぬから、わたくしは国を守るため民を守る。

そのために、わたくしは民のために祈りを捧げる。

恵みをもたらす太陽の神と、安息をもたらす月の女神に…

祈りを終えて振り向けば、そこには静かに膝を折る二人の姿。

わたくしが膝をついていたので、それに習ったのだろう。
行儀の良いその姿に笑みが漏れた。

「付き合わせて悪かったですね… わたくしが早くから起きていて
は皆が働きにくいでしょう。一度、部屋へ戻りましょう」

声をかければ、付き従う二人。

余計なことは喋らず行儀の良いその姿は好感が持てた。

部屋へ戻れば、扉の前にシルフィが待ちかまえていた。

「ネフェリアさま、お祈りですか？」

「ええ。星見の間で朝のお祈りを。ビルダーとボードが共に付いて
くれたので」

だから心配はないと笑えば、苦笑をかえされた。

「シルフィ、ここは二人に任せて部屋へお戻りなさい。わたくした
ちが早くから起きていては、皆が働きにくいでしょう」

先程二人に言ったのと同じセリフでシルフィを下がらせ、自室へ籠もる。

パタパタと、侍女たちの動く音がした。
厨房からは、カンカンと竈のくべる音がする。

こういった生活音は、どこに居ても変わらない。

エシュロン国での初めて迎える朝。

澄んだ空気、優しく吹く風、柔らかく照る光、囁く木々。

他地者のわたくしたちを、しかし自然たちは歓迎していた。

第一章 三話／雪薔薇

朝食も終わり、片付ける侍女たちの邪魔をするのも悪かったので、昼番で交代した護衛のキーツとコアを連れて、シルフィと離宮周辺の散歩へと出かけた。

「姫さま、裏の林はお危のうございます。表の花庭の薔薇が見頃ですので、そちらに行かれては如何でしょう？」

離宮裏の林に足を向けようとすれば、キーツからやんわりと止められた。

確かに、散歩に適しているとはいえないだろう。

「この時期に、薔薇が咲くのですか？」

足を花園に向けながら問えば、コアが指を指しながら言う。

「はい、姫さま。雪薔薇という種類の白い薔薇が見頃です」

コアの指した方へ進めば、そこには見事な白薔薇が咲き誇っていた。

緑色の葉の中に大輪の白薔薇。

通常のそれよりも白く、花弁の枚数が多い。

「見事な白薔薇ですね。とても美しい」

「この雪薔薇は、通常の薔薇よりも香りも少なく、切り薔薇にしても長く楽しめます。摘まれますか？」

キーツの言葉に、緩く首を振る。

「せっかく綺麗に咲く薔薇を、わたくしが摘んでは薔薇に申し訳ない。こうして楽しませてもらえるだけで十分」

摘めばそこで終わってしまう花の命。

わたくしのエゴでこの美しい薔薇を終わらせたくない。

「姫さまは、お優しいのですね」

「そのようなことはありません。摘まぬことがわたくしのエゴかもしれない」

醜く萎れてしまうよりも、美しいうちにその命を終わらせたいのかもしれない。

どちらが良いのか、どちらを選んでも、やはりわたくしのエゴだろう。

薔薇を愛でながら歩を進めれば、ベンチとローテーブルの置かれた空間に出た。

周りを雪薔薇に囲まれた広場のようなそこに、侍女のナビスとアンヌがお茶の用意をしていた。

「姫さま、お茶の用意ができております。ご休憩にされてはいかがですか？」

薦められるまま席に着けば、香り高い茶に見た目にも美味しそうなとりどりのお菓子。

「キーツ、コア。甘い物は嫌いですか？」

「いいえ、姫さま」

「嫌いではありませんが、姫さま？」

突然のわたくしの質問に戸惑いながらも答える二人。

「でしたら、わたくしの話し相手に付き合ってください。アンヌ、ナビス、二人にもお茶の用意を」

普通なら考えられない事を言うわたくしにアンヌもナビスも軽く目をむくが、すぐにお茶の用意に取り掛かる。

立ち尽くす二人に、シルフィが向のベンチを進め、アンヌがお茶を、ナビスがお菓子を用意した。

第一章 四話／お茶と疑問と

わたくしの隣にシルフィ、その向かいにキーツ、わたくしの正面にコアが座る。

「そう畏まらず。せっかく用意してくれたお茶。温かいうちに頂きましょう」

緊張した面持ちで座る二人に微笑みかけ、お茶に口を付ける。

わたくしが口を付けなければ、シルフィも飲むことが出来ない。

ふわりと広がる、芳醇な香り。

「なんと良い香りでしょう。アンヌ、このお茶は薔薇を使っているのかしら？」

「はい、姫さま。本宮の花園でお茶用に育てた薔薇をつかっております」

わたくしの問いに丁寧に答えるアンヌ。

お菓子も一つ摘めば、しっとりとした甘さの焼き菓子がお茶に良く

合う。

「このお菓子もとても美味しい。これは、サキとヨイが作ったのですか？」

「はい、姫さま。姫さまに召し上がって頂こうと、二人がご用意いたしました」

今度はナビスが答える。

「では二人に、ありがとう、とても美味しかったと伝えて下さいね」

につこり笑って言えば、ナビスも嬉しそうに頷いた。

キーツもコアもお茶とお菓子に手を付け、リラックスしたところで声をかける。

「この星の宮は、神官位の方のための離宮だったのですか？」

王の別荘として建てられたと聞いたが、この建て方はどうみても神殿に通じるところがある。

そもそも、普通の宮ならば、屋上に星見の間など造りはしないだろう。

建てられている場所も、本宮の喧騒が聞こえない自然の中。

神官や巫女といった、神に仕える者の居住と言われた方が納得できる。

「いえ、姫さま。この星の宮は、太王太后陛下の別荘として建てられた離宮でございます」

「その陛下は、神官位をお持ちではなかったのですか？」

わたくしの言葉に考え込むキーツ。

まだ若いキーツは、太王太后陛下の知識は無いのかもしれない。

「エイザ陛下は、祭司の御位をお持ちでしたが…」

この中で一番年配のアンヌが言う。

祭司の御位。神殿の祭儀を執り行う、最も神に近い者。

神官が神に仕える者ならば、祭司は神の代理人。

この宮を建てたのが祭司ならば、納得できた。

「なぜ、そう思われたのですか？」

コアが不思議そうに聞いてくる

「この宮は、多くのことを教えてくれるからですよ」

問に答えれば、首を傾げられる。

まあ、理解できるとは思っていないが、そうとしか説明できないのもまた事実。

「吹く風の音に耳を傾け、草木の声を聞き、星の導きを見る。この宮は、その為の宮だということ」

少し説明すれば、解ったのか解らないのか、神妙な顔をされた。

「エイザ陛下も、星の導きのためにこの星の宮をお使いだったと伺っております」

アンヌが言う。

やはり、そのための離宮だったらしい。

「アンヌは、太王太后陛下を見知っているのですか？」

太王太后は、今の王の祖母にあたる。

その方を知っているとは思えないが…

「私の母がエイザ陛下付きの侍女でございましたので、母から聞きました。エイザ陛下が御崩御されるほんの一年にも満たない間だったそうですが、とても素晴らしいお方だったと聞いております」

「そうでしたか。祭司の御位をお持ちで、王后陛下だったのでしたら、本当に素晴らしいお方だったのでしょうか」

懐かしそうに言うアンヌに返せば、笑みを深くして大きく頷いた。

しかし、太王太后の別荘として建てられた離宮に、なぜわたくしが迎えられたのだろうか。

祭司の御位まで持っていた王后の別荘に、他国の一妾妃を主として迎えるものだろうか？

最悪、エシユロン国の神を冒瀆することにもなりかねない。

一つ解決したかと思えばまた生まれた疑問に、深い溜息が漏れそうになった。

第一章 五話／増えた疑問

増えた疑問の解決に早々に見切りをつけ、お茶とお菓子を楽しめば、あまり外にいては体を冷やすと半強制的に宮へ戻された。

宮に戻れば、侍女のメイサが下働きの下女に何やら指示を出していた。

「姫さま、おかえりなさいませ」

わたくしに気づいたメイサと下女は慌てて礼を取る。

「そのままが良い。仕事の邪魔をしましたか？」

ならば悪かったと言えば、下女達は一層畏まった。

「滅相もございません、姫さま。本宮より姫さまへと毛皮が届きましたので、ローブを仕立てるようにと指示をしたところにございます」

そう言つて手にしていた毛皮を見せるメイサ。

「まあ、届いたんですね。では早速仕立てを頼みましたよ」

その毛皮に反応したのはアンヌだった。

アンヌの指示を受け、メイサと下女達は下がっていく。

「失礼致しました、姫さま」

わたくしをソファアへと促しながらアンヌが謝る。
コアとキーツはそれぞれドアと窓際に立っている。

「良い。あの毛皮は、アンヌの指示だったのですか？」

「はい、姫さま。ビルダーとボードから姫さまが早朝より星見の間
でお祈りを捧げていらつしやると聞いたもので、厚手のロープを
思いまして。シルフィさまにお聞きしたところ、姫さまは朝夕の
祈りを欠かさずなされるとのこと。お風邪を召されては大変です」

そう言って笑むアンヌ。

良くできた侍女だと感心する。

ビルダーとボードから聞いたのなら、朝食後のことだろう。

それからシルフィに確認し、毛皮の手配をしたのなら、まだ数刻だ。

「ありがとう、アンヌ」

にっこり笑ってお礼を言えば、

「もったいないお言葉ですわ。私は姫さまの侍女ですもの」

と笑顔で返された。

「仕上がりまでに2日かかりますので、その間はストールもお使い下さいませ」

お部屋にご用意しておきます、と言っアンヌにお礼を言い、下がる姿を見送る。

「行き届いた侍女でございますね」

感心したようにシルフィが漏らす。

「ほんとうに。この離宮に仕える者達は、皆よくできてるわね」

侍女にしろ料理人にしろ、心配りの出来る者が揃っている。

もちろん、昨日入ったばかりなので詳しくは解らないが、人の本質は早々に変わるものではない。

皆、仕えることを苦にすることなく仕えてくれている。

他国で不自由を感じないのは皆のおかげだろう。

「姫さま、そろそろ昼食のお時間でございますが、こちらで召し上がられますか？」

「いいえ、ナビス。食堂でいただくわ。用意ができたなら呼んでください」

「かしこまりました」

行儀良く一礼して出て行くナビス。

昼食までの一時をシルフィとの雑談ですごした。

第二章 一話／きっかけ

エシユロン国に嫁してきて5日。

与えられた離宮から出ることなく穏やかにすぎていった。

国王はじめ誰の来客もなく、いよいよわたくしの立場が解らなくなつた。

皆は相変わらずわたくしに仕え、何の不自由もない。

妾妃として嫁してきたにも係わらず、国王のお渡りすら無い今の現状はもはや理解すら出来なくなっている。

望んで嫁してきたわけではなく、人質として迎えられたわたくしを抱く必要はないということか。

必要なのは月神の姫がエシユロン国に迎えられたということで、その実はどうでも良いのだろう。

「ネフェリアさま、いかがなさいました？」

つらつらと考え事をしていたわたくしを隣に控えていたシルフィが覗き込む。

「なんでもないわ。毛糸が無くなってしまったの。アンヌに言っ
貰ってきてちょうだい」

「はい、ネフエリアさま」

シルフィに心配をかけるわけにはいかない。

ただでさえあの乳姉はわたくしを常に心配している。

「姫さま、何を作られているのですか？」

お茶を持ってきたナビスが言う。

「特に何と言うわけではないのよ。そうね、クッションカバーに
もしようかしら？」

する事のない時間を、ただ過ごすのがもったいなくアンヌに用意し
てもらった毛糸で編み物を始めたが、特に目的があったわけではな
い。色々な種類のモチーフを大量に作っているので、まだ何にでも

なる。

「まあ、可愛らしいモチーフですね。クッションカバーならとても映えますわ」

手にしていたモチーフを見てナビスが言う。

真剣に見つめられているが…

「ナビス？　どうかしましたか？」

「失礼致しました、姫さま。見たことのないモチーフでしたので…」

恥じらうように顔を下げるナビス。

「ナビスも編み物を？」

「はい、姫さま。私の生まれた地方はもつと北に位置していて、寒さが厳しく、女は皆家族のために毛糸で編み物をいたしました。」

だから見たことのないモチーフに興味を引かれたのだと、懐かしそうに顔を綻ばせて言うナビス。

「そうでしたか。ではナビス、シルフィが新しい毛糸を持ってきたら、一緒にこのモチーフを作りましょうか」

ニコリと笑って言えば、ナビスはとんでもないと頭を振る。

「わたくしなら構わないわ。昔は良くシルフィとしたもの。それともナビスの仕事の邪魔かしら？」

仕事の邪魔はしてはいけないと言えば、益々困った顔をされる。

「ナビス、せつかくの姫さまのお心。有り難くお受け下さい」

声に振り向けば、毛糸を片手にシルフィと共に穏やかに笑うアンヌの姿。

「はいっ」

アンヌの許可を得て、嬉しそうに頷くナビス。

毛糸を受け取り、アンヌとメイサも交えて暫しの編み物教室となった。

第二章 二話／お客様

侍女三人とシルフィの五人で編み物に勤しみ、気づけば大型の籠いっぱいのモチーフが出来ていた。

時間も午後のお茶の時刻に差し掛かり、アンヌとメイサが慌てて用意に駆けていった。

「姫さま、ありがとうございます。大変たのしゅうございました」

本当に嬉しそうに礼を述べるナビスに、こちらも嬉しくなる。

「わたくしも楽しかったわ。ナビスの故郷では、モチーフで何を作るのですか？」

宮全部のクッションカバーにしても余るであろうモチーフの使い道を考えようと聞けば、ナビスも意図が解ったのか苦笑する。

「耳当てや首巻き、腰飾りや背当てなどにいたします。下着と上着の間の防寒や飾りストールなども作ります」

「腰飾り？」

聞き慣れない単語に聞き返せば、ナビスは自分の腰に巻いている三角形の布を差す。

「これです。今は布ですが、もう少し寒くなれば毛糸や毛皮になります。縛る部分を長くしてリボンにしたり、姫さまのように装飾石で飾ったりと、色々な形があります」

言われて自分の衣装を確認すれば、色違いの三角形のレースが両側から巻かれ、ブローチで留められている。日によって異なっていたが、それほど気にしていなかった。

「では、余ったモチーフでわたくしも自分の腰飾りを作りましょう」
「それがよろしゅうございますわ」

お茶の為に片付けながら言えば、ちょうどアンヌとメイサが戻ってくる。

「ネフェリアさま、お天気がようございます。テラスでお召しになるのは如何ですか？」

シルフィが膝掛けを手に誘うままテラスへと出れば、凜とした空気の流れがわたくしを招いた。

「ボード、ニック、一緒にお茶にしましょう」

「「ありがとうございます、姫さま」

護衛の二人に声をかければ、二人とも行儀良く席に着く。

初めに花園でキーツとコアとお茶を共にしてから、1日三回のお茶は護衛と一緒にしている。

わたくしとのお茶を護衛達が楽しみにしているとアンヌから聞き、サキとヨイに頼んでお菓子を多めに作って貰うようにした。

「あら…?」

風がそよぎ語りかける。

「ネフェリアさま、如何なさいました?」

空気の乱れに庭園へ意識を向ければ、

「きゃああっ」

「無礼者っ」

聞こえてきた悲鳴と高い声。

「何事だっ」

「姫さま中へ」

すぐさま庭園へ駆け出そうとするボードとニックをやりわりと押し留める。

「アンヌ、メイサ、小さなお客様がお二人いらっしゃたわ。お茶とお菓子の用意を。ナビス、膝掛けを二枚持ってきてちょうだい。ボード、ニック、シルフィ、お客様のお迎えに参りましょう」

につこり笑って指示を出し、あっけに取られている侍女を置いて、前後をボードとニックに守られ庭園へと降りた。

第二章 三話／小さな王女

庭園の中心までこれば、そこには困り顔の衛兵に囲まれた二人の幼い少女の姿。

年少の少女は姉に抱きつき必死で涙を堪えていた。

「クォーツ王女?!」

「ミューゼ王女!!」

ボードとニツクの出現に、衛兵達からは安堵の溜息が漏れる。

この小さな少女たちは、第四王女クォーツ姫と、末の王女ミューゼ姫らしい。

「ボード、王女様方のお付きの方々に連絡を」

衛兵達を持ち場に返していたボードに次の指示を与え、状況についていけない王女様方の前に膝を折る。

「王女様方、初めまして。ネフェリアと申します」

目線を合わせて微笑めば、王女としての礼を返される。

「初めましてネフェリアさま。第四王女クォーツです」

「ミュゼです」

さすがは帝国の王女様だと感心する。

「クォーツ王女、ミュゼ王女、お二人だけでこちらへ？ お怪我な
どなされませんでしたか？」

本宮よりだいぶ距離のあるこの離宮まで、この幼い王女二人だけで
辿り着いた事実に関心するが、見たところ擦り傷一つ無いようで安
心する。

「大丈夫です」

「けがもおはなもないの」

「お花？」

神妙に頷く王女達に、ゆつくりと問い返せば、ミュゼ王女は堪えき

れなくなつた涙を流した。

「おねえさまに、あげるお花」

そんなミュゼ王女を抱きしめながらクォーツ王女がぽつりと漏らす。

「此方へは、お花を摘みにいらしたのですか？」

だったら、摘んでいけばよいと言えば、二人の顔が輝いた。

「いいの？」

「ええ。せっかくいらつしやったのですもの。でもその前に、一緒にお茶をいかがですか？　甘いお菓子のご用意もありますよ」

本宮からここまで、大冒険をしてきた二人はさぞ疲れていることだろう。

お菓子に反応する二人の手を取る。

「シルフィ、アン又たちに茶席を花庭へ移すように伝えて」

そのまま花摘みのできる場所へ茶席の移動を指示し、ゆっくり歩き出す。

「こちらへは、どの花を摘みにいらっしゃったのですか？」

「雪薔薇を… 本宮の花園長が、この離宮の雪薔薇が一番美しいと言っていたから」

「しろい、おっきいのがいいねって」

だから、病弱で滅多に外へ出ない姉に見せてあげたかったのだと王女方は言う。

クオーツ王女の姉姫、第二王女キルギス姫は生まれた頃から病弱で、自室のベッドの上で一日の大半を過ごしているらしい。
そんな姉姫のために、外の風を運ぶのがこの幼い王女方の日課だという。

姉想いのこの幼い王女方は、その優しさで風に迎えられたのだろう。
阻むことなく迎える風に誘われ、茶席へと進んでいった。

ベンチへ着けば、既にお茶の用意が出来ていた。

シルフィから聞いていたアンヌたちは、王女方の登場にも驚かず丁寧に出迎えた。

王女たちをベンチに座らせ、膝掛けを掛ければ、可愛らしくお礼を言われた。

高貴な者はかしづかれて当然とお礼の言えない者が多いが、この小さな王女方はちゃんと賤られていて安心した。

アンヌがお茶の用意をし、ナビスとメイサがそれぞれ王女方の、シルフィがわたくしの給仕につく。

甘いお菓子とお茶に上機嫌な王女たちと他愛もない話をしながらお茶を楽しみ、本来の目的である雪薔薇摘みに席を立った。

アンヌたちが用意していた籠を手に、王女たちは元気に駆けていく。

ハサミを手にナビスとメイサが追いかけて、わたくしとシルフィが後から歩いてゆく。

第二章 四話／お迎え

良い薔薇を選んでのは切ってもらい、自分たちの持つ籠に入れていく様子は楽しそうだ。

「ネフェリアさま、こんなに摘んでしまつて良いのですか？」

自分の持つ籠が一杯になつたのを見てクォーツ王女がこちらを伺う。

「もちろんですわ、クォーツ王女。この薔薇で姉上様の御気分が少しでも華やけば、この薔薇たちも喜びましょう」

「おねえさま、よろこぶ？」

「ええ、ミュゼ王女。王女様方が手づから摘まれた薔薇ですもの。姉上様もさぞお喜びになれましょう」

見上げてくるミュゼ王女の前で膝を折りその頭を撫でれば、くすぐったそうに笑顔を見せてくれる。

「お迎えがみえたようですね」

風の知らせに王女たちを見れば、不思議な顔をされる。

「ネフェリアさま、何も聞こえませんか」

「どーして、わかるの？」

素直に疑問を返す二人にっこり笑う。

「「あっ」」

首を傾げていた二人が、かすかに人の声を拾ったのか驚きの声を上げた。

迎えるために立ち上がれば、タイミング良くボードに連れられたお付きの者達が姿を現す。

「シーガルお兄様っ」

「おにいさまっ」

侍女や護衛達と混じって現れた長兄に、王女たちは嬉しそうに声をかける。

「クォーツ、ミュゼ、探したぞ。こんな遠くまで二人だけで来ては危ないだろう？ お付きの者達に黙って出歩いてはいけないといつも言っているだろう」

本当に自分たちを心配している兄の言葉に王女たちは萎れていく。

「ごめんなさい、シーガルお兄様」

「ごめんなさい、おにいさまっ」

二人からの詫びを受け入れ、シーガル王子は王女たちを抱きしめた。

「何事もなく良かった」

本当に心配していたのだろう。王子の心からの安堵が伝わってくる。

「ネフェリアさま、妹たちがご迷惑をおかけいたしました」

「いいえ、シーガル王子。王女様方とお茶も、薔薇摘みも大変た

のしゅうございました。クォーツ王女、ミュゼ王女、よろしければ、また一緒にさせていただきます」

視線を王女たちに合わせて微笑めば、二人とも嬉しそうに頷いてくれた。

「またあしたも、きていい？」

「ミュゼ!？」

可愛らしいミュゼ王女のお伺いと、シーガル王子の驚きの声に笑いが漏れる。

「ええ、ミュゼ王女。お待ちしておりますわ」

わたくしとの返事にミュゼ王女は喜び、シーガル王子は戸惑いを隠せないでいる。

「ネフェリアさま、ご迷惑では？」

喜んでクォーツ王女と明日の予定を立てるミュゼ王女に聞こえない

ように声を落として王子が尋ねる。

「いいえ、シーガル王子。王女様方のご都合さえよろしければ、わたくしはいつでも」

可愛らしい王女様方ならいつでも歓迎だと言えば、王子は苦笑する。

王子にしてみれば、一妾妃の所に可愛い妹たちが通うのは歓迎できないのかもしれない。

しかし、そんな大人の都合が幼い王女方に理解できるはずもなく、上機嫌で戻っていく妹たちの後を追うように王子も戻っていった。

第三章 一話ノプレゼント

穏やかな昼下がり。

昼食も終わり居間で編み棒を動かしていると、風が来客を告げた。草木も歓迎するかのように囁き、迎えるために花庭側のテラス窓を大きく開いた。

「ネフェリアさまーっ」

「ネフェリアさまっ」

元気な声と共に幼い王女方が駆けてくる。

初めて薔薇摘みをしてから、クォーツ王女とミュゼ王女は毎日のように遊びに来ている。

あの日のシーガル王子との約束通り、護衛と共に駆けてくる。

「いらっしやいませ、王女様方。とてもお寒うございましたでしょう?。」

元気良く飛び込んでくる二人の冷たい体を抱き留め、部屋の中に招き入れる。

ソファーへと促し、膝掛けを掛ければ、タイミング良く侍女たちがお茶の用意を始める。

「可愛いクッション」

「かわいいー」

幼い王女方に合わせて作った小振りのクッションを手に、二人はきやつきやと喜ぶ。

「お気に召していただけましたか？」

「はいっ このカバー、王宮では見たことないです」
「かわいいーの」

赤や黄色で編まれたモチーフのカバーがお気に召したらしい二人は、しげしげとクッションを見つめている。

「わたくしたちが編みましたの。まだ沢山ありますから、宜しければお持ちください」

「いいの？」

「よろしいのですか？」

「勿論ですわ。王女様方のために作ったものですもの。姉姫様にもよければお持ちください」

王女方の顔が喜色に染まる。

「プレゼント用にお包み致します」

メイサが淡い色の布を持ってこれば、二人はどれが良いかを選ぶためにソファアーの上のクッション全てを手元に引いた。

「新しい物がこちらにございます。こちらからお選びください」

ナビスが籠を差し出せば、真剣に吟味する二人。

「おねえさまにはこれっ」

「ネフェリアさま、おねえさまにこれを頂いてもよろしいですか？」

二人が姉姪に選んだのは、淡いとりどりの色の毛糸で、大小の花のモチーフでつくった物だった。

真剣に姉姪のために選ぶ二人の姿に、とても好感がもてた。

「もちろんですわ。ではメイサ、可愛く包んで差し上げてね」

クオーツ王女からクツションを受け取って、メイサは笑顔で頷いた。

「ネフェリアさま、ミュゼにこれをください」

「クオーツにはこれを」

それぞれ気に入った物を手に行儀良くお願いをする二人は、とても可愛い。

「では、それもメイサに包んでもらいましょう」

わたくしの言葉に、二人はメイサにクツションを差し出す。

「お預かりいたします」

微笑んで受け取ったメイサを確認し、王女方は用意されたお茶に手

を伸ばした。

温かいお茶と甘いお菓子、他愛もない会話にご機嫌な王女たちは、色々なことをお喋りしていく。

王宮や後宮と離れているわたくしには、すべてが新鮮で楽しかった。

「おねえさまが、ハープを誉めて下さいました」

「ミュゼもじょうずって」

最近、体調の良い姉姫にハープを習っているらしい王女方は、その成果を報告してくれる。

第二王女キルギス姫は素晴らしいハープ奏者らしく、体調の良いときなどは宴で披露するほどらしい。

その姉姫にハープを習い、今度の宴では共に演奏する約束をしているという。

「ネフェリアさま、もっと上手になったら、聴いて下さいね」

「ミュゼもっ」

「ええ、王女さま。楽しみにしておりますね」

体調の良いときだけの指導のため、毎日とはいかないが、それでも姉姫と共に過ごす時間をこの幼い王女たちは楽しみにしている。

姉姫もその時間を大切にしているようで、最近の王女たちは常に楽

しそうだ。

ひとしきりお喋りをすれば、そろそろ王女たちの帰る時間に差し掛かる。

日の沈むのが早くなってきているので、あまり遅くなってはいくら護衛が一緒でも危ない。

王女たちもちゃんとそれを解っているのか、自ら腰を上げる。

「ネフェリアさま、ごちそうさまでした」

「ごちそうさまでした」

「いいえ、王女さま。メイサ、王女さま方にクッションを」

「はい、こちらに。王女さま、王宮までお持ちいたしましょうか？
いくら小振りとはいえ、包まれた3つのクッションを持つのは大変
だろうとメイサが申し出るが、王女方は首を振った。

自分たちで運んで姉姫に渡したいと言う。

「ではメイサ、籠を」

軽い籠にクッションを積めて渡せば、二人で仲良く提げて帰路についた。

第三章 二話／お菓子

きっかけは、食事に出てきたドライフルーツだった。

「シルフィ、久しぶりにケーキでも作ろうかしら？」

毎日する幼い王女たちのお茶。甘いお菓子が喜ばれるだろう、と思ったのだ。

「よろしゅうございますわね。王女さま方も喜ばれますわ」

わたくしの考えを正しく理解したシルフィが用意のために席を立つと、側に控えているメイサとナビスが不思議そうに問いかけてきた。

「姫さま、ケーキとは何ですか？」

「さあ、これでいいわ。後は焼き上がるまで少し待っていて」

あの後、ケーキ講座を始めるよりは実際に作った方が早いだろうと、侍女三人とシルフィ、サキとヨイを交えてのお料理教室となった。

やはりサキとヨイもケーキを知らず、材料や道具、その手順まで一から教えることになった。

見ているだけではわからないから、と実際に同じように作り始めたため、竈の中には三つのケーキが並んでいる。

「パンよりも時間がかからないのですね」

サキが作り方を反芻しながらメモに書き記していく。

「そうね。生地作りも焼き時間も短いし、パンよりも柔らかい出来上がりになるわ」

「どんな風になるのでしょうか！ 楽しみです」

ナビスが目をキラキラさせて本当に待ち遠しそうに言う。

「では、焼き上がるまでにお茶の用意を済ませてしましましょう」

「はい、姫さま」

「姫さま、居間にご用意でよろしいですか？」

「そうね… お天気もいいから温室にしましょうか」

先日、冬でも楽しめるようにと庭師が温室に数種類の花を植えていた。

それがそろそろ見頃だろう。

アンヌが茶器や茶葉の用意を始める。

サキとヨイは器具の片付け、ナビスとメイサは温室のセッティングへと向かう。

「アンヌ、王女さま方の前でケーキを切り分けるから、ナイフと小皿とフォークもお願いね」

「はい、姫さま。この位の小皿でよろしゅうございますか？」

「ええ、それでいいわ。きっと、姉姫さまにもお持ちになるだろうから、バスケットの用意もね」

自分たちが楽しんだだけ姉姫にも楽しんでもらいたいと、王女たちは姉姫へのお土産を忘れない。

美味しかったお菓子は必ず一つつつ残し、姉姫へのお土産にする。

決してこちらに要求するのではないそのいじらしい姿に、自然とこちらから姉姫のお土産を用意するようになった。

「姫さま、この位の焼き加減でよろしいですか？」

サキが竈からケーキを取り出す。

焼き色が綺麗に付き、甘い匂いが鼻孔をくすぐる。

「良さそうね。串を刺して生地が着かなかつたら出来ているわ」

慎重に串を刺すサキとヨイ。

「姫さま、着きません！ 出来ました！！」

嬉しそうに言う二人に笑う。

料理人として、新たな料理を修得することは何よりの喜びになるらしい。

「では、あら熱をとつたら切り分けて完成ね」

「姫さまのケーキはこのままお持ちすればよろしいですか？」

「ええ、お茶と一緒にお願いね、アンヌ」

用意が整い、後は王女たちの到着を待つだけとなった。

第三章 三話／予期せぬお客様

「ごめんなさい、突然お邪魔してしまつて」

幼い王女たちの手をひいて柔和な微笑みで佇むのは、エシユロン国王妃、ティンカー様だった。

「おいしいっ」

「おいしー！」

「本当に美味しいわね。ケーキといったかしら？」

温室の茶席でケーキを頬張る二人の王女。

それを嬉しそうに眺めながら自身もフォークを動かすティンカー王妃。

いつもより少し早い時間に風が知らせた来客は、王女たちだけではなかった。

「オルフェウス国では、こんなに美味しいお菓子があるんですね」

「お口に合つてよろしゅうございました。オルフェウスでは一般的

「なおよつとして親しまれております」

王女たちの手をひき、数人の護衛のみで現れた王妃と共にお茶をするというこの状況に、わたくし以上に困惑しているのは侍女とシルフィだった。

嫁してきてより国王陛下のお渡りすらなく、正式な目見えすらしていないわたくしは、本来ならば王妃陛下の来訪を受ける立場ではない。

まして、一緒に茶席を囲むなどあり得ないことなのだが…

侍女たちも状況が飲み込めず、困惑気味に給仕している。

「王女たちが毎日楽しそうに出て行くものだから、羨ましくて。今日は一緒に付いてきてしまったの」

「王女様方が楽しいと思ってくださっているなら嬉しゅうございます。わたくしも毎日楽しみにしております」

アン又たちにあれこれと真剣に質問する王女たちを見ながら言えば、王妃は殊の外嬉しそうにわたくしを見返した。

「我が王女たちと仲ようしてくださってお礼の言葉ありません。

どうです？　ここでの生活は慣れたかしら？」

「はい。この離宮に仕える者達は皆よく仕えてくれておりますので、憂い無く過ごしております。それに、こうして王女様方も訪ねて下さいますので、日々楽しく過ぎてまいります」

慣れたかと問われれば、ここでの生活には慣れた。

元々オルフェウスとエシュロンでは大きな習慣の違いはないため、生活が大きく変わったということは無い。

疑問からくる違和感はあるが、それを今言ったところで解決はしないだろう。

「そうですか、ならば良かった。月神の姫には申し訳ないことをしたと思うておりました」

じつとこちらを見つめる王妃は、その次の言葉を飲み込んだ。

まだわたくしに言う時期ではないということだろう。

「月神の姫には色々とお話したいこともあります。また、伺っても？」

飲み込んだであろう言葉とは違う台詞を言い、こちらを窺う王妃。

空気の濃度が変わる。

聞かなければいけないと、風が知らせる。

「勿論でございます、王妃陛下。何時でもお越し下さい」

礼節以上の態度で返せば、お互いの含むところが見えやすくなる。

しかし、それ以上の探り合いは叶わなかった。

「ネフェリアさま、今度はクォーツにも作り方を教えてください」
「ミュゼにもっ」

無邪気な王女たちの声が空気を変えた。

「ええ、王女様方。いつでもおっしゃってください」

わたくしの了承に華やぐ幼い王女たちの顔にこちらも自然と笑みが
浮かぶ。

「おねえさまにつくってあげるのっ」

「ネフェリアさまにいただくお菓子はおいしいうて」

だから、自分たちが作りたいのだと言う幼い方の頼みを、どうして断れようか。

「今日はもうお作りすることが出来ませんので、代わりにこちらをお持ち下さい」

そう言つてテーブルの上のケーキを指せば、アンヌが準備してあつたバスケットを用意する。

「お切りいたしますね」

メイサがナイフを出せば、物言いたげなクォーツ王女の視線に気づいた。

「メイサ、そのままに。クォーツ王女、このままお包み致しますので、姉姫様にお切り分けくださいますか？」

まだ半分残っているケーキ。

幼い王女たち三人が食べるには十分な量だった。

「はいっ」

「ミュゼもてつだうっ」

嬉しそうに返事をする王女たちは、本当に可愛い。

「では、クォーツ、ミュゼ。キルギスの所へ行きましょうか」

早く姉姫に渡したくてうずうずしている王女たちを見送り、この日のお茶の時間は過ぎていった。

第三章 四話／懸念事項と贈り物

お客様を見送った後、宮へと戻り先程のやり取りを反芻する。

明らかにおかしかった王妃陛下の態度。

普通ならば、いくらわたくしが王女たちと仲が良くても、わざわざ訪ねてはこないはずだ。

まして、茶席を共にするなど…

王妃陛下の本来の目的は何だったのか。

あの時、なんと続くはずだったのか。

「ネフェリアさま、そうお考え召されますな」

つらつらと考え込んでいたわたくしに、隣に立つシルフィが声をかける。

どうやらこの乳姉妹は、わたくしの考えていることなどお見通しのようだ。

「今更でございましょう」

ぽつりと漏らされた一言。

そう“今更”だ。

この国へ嫁してきた時点で、既に今更なのだ。

「そうね…」

変わらずに風はわたくしに知らせる。

変わらずに草木はわたくしに語りかける。

変わらずに星はわたくしを導く。

変わらずにわたくしは自然の加護を受けている。

わたくしは“月神の姫”で在り続けている。

それだけで良い。

月神とは…

「何事でしょう?。」

玄関が騒がしくなって思考の波から抜け出した。

宮の周りを囲んでいるであろう衛兵の声と、侍女の声。

何やら騒がしい。

「見て参ります」

シルフィが動こうとすれば、それは扉の前に立つニックに止められた。

出て行ったニックの音を拾えば、どうやら来客らしい。

「今日は千客万来ね」

宮の周りには衛兵が囲んでいるため、滅多な者は近づけない。そのため、宮の入り口まで通されたのならば、この国の者、それも周りの様子からそれなりの立場の者だろう。

それがわかっているのでシルフィも落ち着いている。

「少々騒がしすぎますね……」

侍女が知らせにくる気配もニツクが戻ってくる気配もない。
一向に静かにならない。

と、パタパタと軽い足音が聞こえてきた。

「姫さま、失礼致します」

「ナビス、どうしたのです？」

籠に盛られたりんごを手に、疲れた表情で入ってきたナビスに問う。

「お騒がせして申し訳ございません。只今、王宮より使いが参り、
これを……」

そう言つて、籠盛りの林檎と一通の手紙を渡された。

差出人は、クォーツ王女とミュゼ王女、そして、第二王女キルギス
王女の名。

「まあ… ナッツやドライフルーツ、林檎や無花果。今度、一緒に作るケーキの材料だそうよ。沢山王宮から届いたのね」

手紙には、キルギス王女からとてもおいしかったというお礼と、クオーツ、ミューゼ両王女からは今度は色々な味の物を作りたいというお願い、好きな食材と一緒に届けさせるとなっていた。

騒がしかったのは、本当に沢山の食材が届いたからだろう。

「はい… 王女さまと、王妃さまの御名で沢山のナッツやフルーツが今この宮へ… 厨房に入りきらないとサキとヨイが申しておりますが…」

如何致しましょう？ と本当に困ったように言われ、苦笑する。

「厨房横の食堂に入れてしまえば良いわ。明日にでも王女さま方が来られるでしょうから、テーブルの上に並べておいてちょうだい。あと、すぐにお礼のお手紙を書くから、レターセットを」

指示に慌ただしく退室するナビス。

「姫さま、手伝ってまいります」

「ええ、お願いね」

男手があった方が良さだろうとドジャーの申し出を受ければ、入れ替わりにニックがレターセット片手に入ってきた。

「今のままでは、全ての食材がテーブルに並べられませんので椅子などを退かしたいのですが、宿舎から交代の者達を呼んできても宜しいでしょうか？」

ナビスに頼まれたのであろうレターセットを受け取り、男手が要るというニツクに諾を返す。

走って出て行くニツクを見送り、シルフィと笑う。

「慌ただしいことでございますね」

「本当に。でも、あのテーブルに乗り切らないとは、一体どれだけの量なのでしょうね」

10人が一度に食事できる大きさのテーブルの筈だったが…

「一体、どれだけのケーキを作られるのでしょうか？」

王妃陛下を巻き込んで、姉姫とあれこれ用意したのであろう幼き王女たちの姿を想像し、シルフィと笑う。

それでも、それだけ楽しみにしてくれているのなら嬉しいことだ。

「できた。シルフィ、悪いのだけれどこれを渡してきてくれるかしら?。」

書き上がった手紙をシルフィに渡せば、不思議そうな顔をされる。

「どうしたの?。」

「いえ、王女さま方だけでよろしいのですか?。」

手紙は王女たちからだったが、食材には王妃の名も入っていたので、そのことをシルフィは言っているのだろう。

「ええ、王妃陛下にわたくしからお礼するのもおかしいでしょう? あくまで王妃さまは王女たちのスポンサーですもの」

そう返せば、納得したのか手紙を手に部屋を出て行く。

そう。あれは、王女たちからの手紙の返事であって、食材のお礼ではない。第一、わたくしが直接王妃陛下に手紙を出せば、表舞台に出ることになってしまう。

それは、まだ避けたい。

わいわいとまだ賑やかな部屋の外。
いつの間にか、先程の懸念事は頭から消えていた。

第三章 五話／三人の王女たち

一際大きいケーキが焼き上がれば、釜の前を陣取っていた三人の王女たちから歓声が上がった。

オレンジの香りが広がり、最後のケーキも成功であることを告げていた。

「ネフェリアさまっ 出来ましたっ」

「おっきいのっ できた！」

「美味しそうです」

危ないからとサキとヨイにやんわりと止められ、遠巻きに見ていた王女たちが寄ってくる。

喜びに興奮したその姿は、年相応に可愛い。

「本当に良い焼き上がりですね。とても美味しそうです」

腰に抱きついてきたミュゼ王女の頭を撫でれば、反対側からクォーツ王女も抱きついてくる。

クォーツ王女の頭も撫でて、正面に立つ第二王女のキルギス王女に話しかけた。

「キルギス王女、お身体は大丈夫ですか？ お辛くありませんか？」

朝食後のお茶の時間に、この王女たちはやってきた。

キルギス王女に朝の挨拶と共にこの星の宮に行くことを告げれば、体調の良かったキルギス王女は同行を望んだという。

お花やお菓子のお礼と、一緒にケーキを作りたいから、と。

もともと病弱で王宮の外にさえ出ないキルギス王女が、離れたこの星の宮に行くというのだから、満面の笑顔と全身で嬉しいと伝える王女たちとは反対に、側仕えの者達は青くなっていた。

乳母をはじめ、侍医までも引き連れてやってきたのだ。

流石に側仕えの者達は控えの間に入っているが、心配しているだろう。

一区切りもついたら、一度報告に行かせた方が良さだろうと声をかければ、

「ありがとうございます、ネフェリアさま。大丈夫です」

うつすらと頬を染めて笑顔で返された言葉に嘘は無さそうだった。

大慌てで朝食を取りこの宮へやってきた三人の王女たちは、昨日届いた食材からケーキのトッピングを大はしゃぎで選んだ。

護衛や侍女たちが苦勞して並べた食堂一杯の食材を籠やお皿片手に駆け回る姿は年相応で可愛らしく、苦勞したかいがあったと皆顔を綻ばせていた。

食材選びが終わればいつもより少し早い昼食をとり、待ちきれない幼い方々を連れて厨房へ。

下準備を終わらせていたサキとヨイ、侍女たちとシルフィ、果てや護衛のゾイドとジルまで巻き込んでケーキ製作を楽しんだ。

「さあ王女様方、居間へ参りましょう」

いつまでも厨房に居ては片付けの邪魔になるだろうと移動を促せば、アンヌが王女たちに目配せして先に出て行った。

殊の外ゆっくりと歩く王女たちに合わせて居間へ行けば、用意されていた三台のハープ。

ハープに駆けてゆく王女たちに促されるままソファーに腰掛ければ、

「ネフェリアさま、いつも私たちにお心を配っていただきありがとうございます。まだまだ拙い演奏ですが、日頃の感謝を込めて弾きます」

キルギス王女の言葉にクォーツ王女もミュゼ王女も優雅に一礼して、音を紡ぐ。

どこまでも優しい音色に、空気が弾ける。
心のこもった音に、光が踊る。

光の祝福を受けて、澄んだ音色に包まれた今は、空気の加護を受けていた。

第四章 一話／神仕えの王子

エシユロン国に初雪の降った翌日。

朝の祈りより戻ったわたくしを待っていたのは、神官の服装に身を包んだ年若い男だった。

朝の祈りで風が知らせたように、ただ静かに待つその姿は水の守護を得ていた。

「早朝よりお伺いいたしました無礼をお許し下さい。わたしはエシユロン国第二王子、ソイドと申します」

居間のソファに腰掛けていたソイド王子がわたくしを認めて丁寧に礼をとった。

唯一人の供も連れずに来たであろうソイド王子は、第二王子の身分でありながら王位継承権を自ら放棄し、神殿へ入っていた。

水の守護を持ち、先見などの力も得ているという。

この星の宮とは王宮を挟んで反対側の水の神殿を与えられ、最高位の神官として神に仕えている。

そんなソイド王子の来訪に心当たりなどまるでなかった。

「ご丁寧に恐れ入ります。ネフェリアと申します。どうぞよしなに」

相変わらず妾妃にとるには丁寧すぎる礼に内心溜息をつきつつ、こちらも礼を返せば、ソイド王子の纏う空気に変化が生じた。

どこか安心したようなそれに不思議に思う。

「水たちがネフェリアさまにお礼申し上げますと。例年通りの初雪はネフェリアさまの祈りの恵みだと。わたしも水の守護を受ける身。御礼申し上げます」

「お礼などと恐れ多いことです。わたくしの祈りなど微力程度もございせん」

ゆつくりと頭を垂れるソイド王子に慌てて声をかければ、苦笑で返されて困惑する。

「それでも、水たちはネフェリアさまに感謝申し上げます」

促しソファに腰掛ければ、タイミング良くアンヌがお茶を持ってきた。

余計なおしゃべりはせずに退室するアンヌを見送り、改めてソイド王子に向き合う。

「ソイド王子、わたくしが祈るのは民のため。民の安寧と繁栄のため」

「存じております。神のためでも王家のためでもないからこそ、自然はネフェリアさまの祈りを聞く。わたしには、許されない…」

「ソイド王子…」

唐突に理解する。

王族だからこそ王家のために祈らなければならない。
神官だからこそ、神のために祈らなければならない。

そんな『祈り』をしなければならない苦悩。

だから、わたくしを認めて安堵した…

「妹たちが、毎日ネフェリアさまの話を聞かせてくれます。あの、病弱で外に出ることすら出来なかったキルギスも嬉しそうに毎日、日に日に元気になってゆくキルギスから、ネフェリアさまと同じ自然の加護を感じられ…」

自分がどれほど祈ってもキルギス王女の様態は改善しなかったと言うソイド王子。

自身の受ける水の守護だけでは悪化させないのがやっとだったという。

だからこそ、最近のキルギス王女の回復を奇跡だと思ったと。

月神であるわたくしの祈りは、特定の何かに作用するわけではない。月が万物の均衡を担うように、その加護を得るわたくしは万物の受け皿である。

だからこそ、自然はわたくしを受け入れ、導いてくれる。

その導きによって民を守り、安寧と繁栄を祈るのが月神の姫であるわたくしの役目。

「ネフェリアさま、よろしければ我が水の神殿へお越しください。水たちも歓迎いたしましょう」

自らが最高神官を務める水の神殿へ、一妾妃を招くというソイド王子。

わたくしの立場上、本来ならば受け入れるべき招待ではないが、何故か出向けと風が導く。

「ソイド王子のお邪魔でなければ、夕刻の祈りにお伺いしても宜しいですか？」

「ありがとうございます、ネフェリアさま。お待ちいたしております」

丁寧に頭を下げるソイド王子を見送れば、太陽は完全にその姿を表していた。

第四章 二話／水の神殿

「では、水の神殿は元々エイザ陛下の神殿だったのですか？」

「はい、ネフェリアさま。エイザ陛下は、この星の宮と同じく水の神殿も建てられました。朝は水の神殿で祈られ、夜は星の宮で過ごされていました」

朝食後のお茶の時間。

今朝のソイド王子の来訪を受け、気になっていたことをアンヌに問いかけた。

ソイド王子は妾妃腹であるがその身に水の守護を受け、幼少の頃より神に仕えているという。

エイザ陛下崩御後、誰の管理下にも置かれていなかった水の神殿はソイド王子が正式に王位継承権を放棄した時に、最高神官の位と共に下された。

今では先見の力も得て、政の助言とともに神事の一切を取り仕切っているという。

そんなソイド王子の神殿に、一妾妃でしかないわたくしを招いて何の問題もないのだろうかと疑問がわく。

「確か、東の大神殿もエイザ陛下が建てられたのではなかったでしたか？」

一緒に茶席を囲んでいたビルダーが疑問を投げかける。

「ええ。東の大神殿、太陽の神殿もエイザ陛下が建てられました。昼は王宮で執務を執られたり、大神殿で祭事を仕切られたりなさっていたそうです」

「じゃあ、エイザ陛下は毎日敷地内を一周されてたんですね」

アンヌの答えに驚きを表したのは、茶席に着くコアだった。

「そうなのですか？」

「はい、ネフエリアさま。王宮を中心に、西に大門、東に大神殿、南に水の神殿、北にこの星の宮となっています」

お茶請けに用意されていたクッキーを使い説明をするコア。

大門から王宮までに、衛兵達の官舎や、侍女達の宿舎、その他来賓館や食糧庫などが配置され、神殿の周りには花園や樹木園、果樹園などがあり、中庭や池、林などもあるので中心部の王宮からであっても東西南北の主要建物は確認できないという。

そんな広大な敷地内をエイザ陛下は毎日一周していたという。コアが驚くのも無理はない。

太王太后エイザ陛下…

わたくしの疑問は必ずこの方が関係している。

偶然であるはずがないが、どこからもまだ答えは出ていない。

考えるだけ、無駄であらう。

「ネフェリアさま、水の神殿へ行かれるのでしたら、東の大神殿にも寄られては如何ですか？」

「大神殿へ？」

「はい。この宮からですと、西側を通るより東側を通る方が近いですし、途中のリユカの池には供物用のリユカがごいます」

水の神殿には、供物としてリユカという水花が捧げられる。そのリユカを大神殿と水の神殿の間にある池で栽培しているというのだ。

「そうね、ではそのように」

わたくしの答えに微笑んで退出するメイサは、今から手配に走るだろう。

いくらソイド王子に招かれたとはいえ、供物も無しで神殿へ入るなど出来ない。

わたくしが指示するより早く動く侍女たちには感謝せねばならないだろう。

「御夕食はお戻りになられてからで宜しいですか？」

「ええ。午後のお茶の後出ますから、そのように」

パタパタと忙しく動く侍女たちを眺めながら、護衛とのお茶の時

間は過ぎていった。

第四章 三話／水の神殿 2

「ネフェリアさまーっ」

「ネフェリアさま」

「ネフェリアさまっ 早く早くー」

わたくしの前を元気に駆けてゆく三人の王女たち。

日の傾きかけた今は、初雪の加減もあり相当冷えてきているが王女たちは元氣一杯だった。

キルギス王女さえも妹姫たちと駆けてゆく。

昼食後、いつものように遊びに来た王女たちは、何故か水の神殿への参拝を知っていた。

同行を望んだ王女たちに断る理由も無かったので、早めにお茶を切り上げ今はリュカの池へ向かっている。

王女たち付の護衛たちは一足先にリュカの池へ向かっているため、ここにはわたくしとシルフィ、護衛のドジャーとジル、ナビスとメイサの馴染みの面子しか居ない。

「王女さまがた、そんなに駆けては危ないですよ」

はしやぎながら先に行く王女たちに声をかけるが、その足は止まら

ない。

安全な敷地内といえ、付き従うドジャーは大変だ。

メイサもナビスも心配そうに、しかし笑いながら見ている。

「ジル、リュカの池から水の神殿までは遠いのですか？」

「いえ、ネフェリアさま。池の中橋を通ればすぐです」

日の傾きを気にして問えば、正しく理解したであろうジルが答える。ずっと与えられた離宮でのみ過ごしてきたので、いくら王宮の敷地内とはいえここまで遠くに来るのは初めてだった。

自然の中の王宮。

木々や草花、水と風。光もたっぷりとそのすぐであろうこの空間は、自然の恩恵を最大限に受けている。

月神のわたくしでさえ、ここの恩恵は素晴らしいと感じる。

リュカの池に着けば、既に供物用の籠に生けられたリュカが用意しており、王女たちが受け取っていた。

わたくしの分をナビスが受け取り、出迎えに来ていた神殿の下女を先頭に水の神殿へ向かう。

「ソイドにいさまが、ネフェリアさまと一緒においでって」

「まあ、そうでございましたか」

「ネフェリアさまと一緒に祈りしなさいって」

「感謝を捧げる祈りだからと言われました」

両隣に並ぶ王女方が、今朝のソイド王子とのやり取りを教えてくれる。

遊びたい盛りの王女たちを感謝の祈りに出させるために、わたくしの名を出したらしい。

いくら王族とはいえ、ソイド王子以外は自然の守護を受けていない。そのため、日々の祈りを習慣づけたいのだろう。

私利私欲のためではない祈りは、必ず聞き届けられるのだから。

第四章 三話／水の神殿2（後書き）

おかしいな・・・
進まなかった・・・

第四章 四話／月神の祈り

水の神殿へ着けば、最高神官であるソイド王子自らが出迎えてくれた。

付いてきた護衛と女官は、ここから先には入れない。

「本日は参拝のお許しをいただきありがとうございます。エシユロンの神々への礼を知らぬわたくしですが、お許しいただきたく存じます」

「月神の姫君が我が神殿にお越し下さったことが奇跡。どうか祈りを捧げてください」

他国の神殿への参拝は神への冒瀆に繋がりが嫌われるのが通常である。しかし、エシユロンの最高神官であるソイド王子は歓迎の意を表した。

月神の加護を受けるわたくしは、どの国をも拒絶しない。

祭殿に進めば、そこには濃厚な水の守護の気配。
水たちが踊り、池から流れ込んでいるだけの水を、聖水に変えていた。

「水の守護により、これは聖水となっているのですね。清めの水よりも各段に守護されているので、病氣平癒や赤子の加護に飲むと良いでしょう」

せつかくある聖水を、ソイド王子たちは清めの水としてしか使っていなかった。

使えばよいと水が言う。

我らの守護はいらぬのかと水が怒る。

月神の為だと水が笑った。

「聖水だったのですね。知らぬとはいえ、せつかくの守護を無駄に……」

「水たちはこれからも聖水を作ると言っています。どうか、この守護を皆に分けていただきたい」

祭壇の溜^{ため}に流れ込んだ聖水に手を浸し、その手をキルギス王女の額に、クオーツ王女の額に、ミュゼ王女の額にと順に触れさせてゆく。

「世界を潤す水の加護が王女さまがたに届きますように」

心を込めて祈れば、水たちが弾け飛んだ。

王女たちに降り注ぐ、水の加護。

わたくしの周りを踊る水たち。

わたくしにとつては当然のこの光景も、ソイド王子たちにとつては奇跡に映ったらしい。

ソイド王子はじめ、神官たちから伏して取られる、最上級の礼。

王女たちから向けられる、羨望の眼差し。

チラリと横を見れば、苦笑するシルフィの顔が目に入った。
オルフェウスでは毎日行っていた行為だったため、深く考えることなくしてしまったが…

「どうか顔をお上げください。この神殿の方々が、わたくしなどに
そのように礼をとってはなりません」
他国の者に神官が礼などとはいけない。
自国の神が、その国の神より下だと態度で表したことになる。

「万物の受け皿であり自然の加護を受けられる月神の姫に礼をとる
のは当然のこと。自然の寵愛を妹たちに分けていただいたこと、重
ねて御礼申し上げます」

形式ばった口上に、しかし心からのお礼に、それ以上言葉を重ねる
のをやめた。

「ソイド王子はじめ、神官の方々の日々の祈りはこの神殿の守護者
たる水たちにきちんと届いております。どうかこれからも続けてい
ただきたい」

今、望まれているのは月神としての言葉。
自分たちの祈りが、守護者たちに届いているかの確認。

ならば、月神のわたくしは答えねばならない。

「さあ、王女さまがた。わたくしとソイド王子と一緒に、水の守護者様にお祈り致しましょう」

「寵愛を分けていただいたこと、心を込めて御礼申し上げるんだよ」

王女たちを挟んで左右に立ち、祭壇に向かって祈りを捧げる。わたくしたちの後ろには、無心で祈る神官たち。

この神殿の神官たちは、良くできている。私利私欲など欠片も持たず、ただ神のためにのみ祈る姿は好ましい。

パシャパじゃと跳ねる水たちに、変わらぬ守護を約束された。

第五章 一話／嵐の前の…

連日降り続ける雪に、王女たちの鬱憤が溜まっていた。

雪深いエシュロン国は初雪から一週間降り続け、王宮内を要塞へと変えていた。

屈強な兵たちですら外出もままならず、幼い王女たちは本宮に閉じこめられている。

自身の立ち位置を正しく理解している王女たちだが、幼さ故の無鉄砲さは致し方ないだろう。

外に出る衛兵や侍女たちを捕まえては手紙を託し、隙あらば外に出ようとする王女たちに側仕えの者達はてんでこ舞いだ。

「ネフェリアさま、王女さまがたからお手紙です」

「ありがとう、ジル」

今日も伝書鳩と化している護衛から手紙を受け取り、読むために封を切る。

王女方付きの護衛から託された手紙を、交代時にわたくし付きの護衛に託すのだ。

そのため、早くても半日の時間がかかる。

幼い方々は、その時間が待ちきれず護衛や侍女の手を煩わせている

らしい。

「まあ、キルギス王女がお風邪を召されたんですって」

中を確認すれば、手紙は二通。

クオーツ王女とミュゼ王女からで、内容は姉妹キルギス王女が風邪をひいてしまつて心配だ、食欲がないので何か良い物は無いだろうかと切々と書き綴つてあつた。

「それはご心配でしょう。ネフェリアさま、何かお作りしては？」

シルフィをはじめ、アンヌやジルたちも心配そうだ。

「そうね…。暖かい、栄養価の高い物が良いわね。何が良いかしら」

最近体調も良く妹姪たちと駆け回っていたキルギス王女。

姉妹と一緒に遊べるのが嬉しくてしかたなかったあの若い王女たちは、心を痛めていることだろう。

「アンヌ、王宮では、王女方はご病気になると何を召し上がってるの？」

「その程度にもよりますが、基本は飲み物になります。牛乳やお茶、後は薬湯です。良くなれば少しずつ食べ物を。特にこれといった物はございません」

「ですね。ウチは母が牛乳でパンを煮てくれましたね」

「まあ。では、基本的に食事はしないの？」

アンヌとドジャーの言葉に驚けば、この国ではこれが普通だと言われる。

「では、わたくしが余計なことをしない方が良いわね」

病気のときは固形物は食べないという文化の中育ってきたキルギス王女は、わたくしが何を作っても体が受け付けないだろう。そう思ったのだが…

「ネフェリアさま、しかし何か召し上がらないとせったくの体力も落ちてしましましょう。食欲が無いのではなくて、お口に合わないのでは？」

「そうね…。確か、キルギス王女は牛乳がお嫌いだったわね」

シルフィの言葉に思い返してみれば、好き嫌いの激しかったキルギス王女は、特に牛乳が苦手だった。

先ほどのアンヌの話では、その牛乳が一般的な病人食らしかったので、口に出来ないのも道理だろう。

「お見舞に、口当たりの良いものでもご用意しましょうか。アンヌたちも手伝ってね」

「さあ、これで良いわ。こっちは、本宮でお出しする前に温めてもらってね」

出来上がった物を籠に詰めてニックに渡し、お使いに行くナビスに説明する。

「牛乳と卵でこんなに美味しい物が出来るとは知りませんでした」

試食をしながらヨイが言う。

「冷たくすればもっと美味しいわ。口当たりも良いし、キルギス王女が少しでも召し上がってくだされば良いのだけれど」

食欲の無いキルギス王女に、栄養価が高く口当たりの良い物をと考え、プリンを作った。

牛乳と卵で栄養価は高いし、冷たく柔らかい食感は口当たりが良く、甘い物は幼い方に好まれるだろうと思ったのだ。

「こちらの飲み物も体がポカポカいたします」

サキが口にするのはレモネード。

柑橘系を好むキルギス王女に、ビタミンを補い体を暖めるために作った飲み物。

砂糖の代わりに蜂蜜を加えれば、滋養もつく。

やはりどちらも知らなかった料理人の二人と侍女たちとで大量に出来たこれらを、ニツクとナビスに本宮まで届けてもらうことにした。ニツクの持つ籠には10個のプリンと王女たちへの手紙が入っており、ナビスはレモネードの入った瓶を抱えている。

「ではネフェリアさま、行って参ります」

「ええ。よろしくね」

二人を送り出し、まだまだ大量にあるプリンを眺める。

「ジル、官舎に戻るときに皆の分持って行ってくれるかしら？」
護衛たちは皆、甘い物は好きだったはずだ。

「ありがとうございます、ネフェリアさま。今、一個いただいても良いですか？」

特に甘い物に目がないジルはそんなことを言う。

「じゃあ、ちょっと早いけどお茶にしましょうか」

やった、と喜ぶジルにみんなから笑いがもれる。

「では、すぐにご用意致します。居間でよろしいですか？」
「ここで良いわ。サキ、ヨイ、一緒にお茶にしましょう」

後片付けを始めた二人に声をかけ、厨房で少し早いお茶を楽しんだ。

第五章 二話／嵐、到来（前書き）

お気に入り登録、100件突破！！
ありがとうございます！！

第五章 二話／嵐、到来

バタバタと大きな音をたてて顔色を悪くしたナビスが戻ってきたのは、戻るまでもう少しかかるだろうと居間に移動した矢先の出来事だった。

「ネフェリアさまっ ネフェリアさま」

「なんですか、ナビス。騒々しい」

慌てて駆け込んできたナビスをアンヌが咎めるが、ナビスは見向きもせずになくしのもとへ勢いそのままに近づいてくる。

「ネフェリアさま、陛下が、国王陛下がお渡りになれます！！！！」

ナビスの爆弾発言でパニックに陥ったのは、侍女たちだった。右に左に大慌てでわたくしの衣装を選び、席を整え出迎える準備をする。

忙しい三人に代わって、わたくしの着替えを手伝うシルフィと自室へ戻った。

「今更、ですね」

「ええ。風たちが告げる、面白いことはこれかしらね」

今朝の祈りで、風たちが告げた。

今日は面白いことが起きると。

絶対に受けなければならないと。

警告ではなく、楽しそうに告げられた。

火は言う。何があっても守ってみせると。

危険は寄せぬと宣言する。

水は笑う。とても嬉しいと笑いだす。

ほんの少しの間、雪を止ませてあげると囁いた。

一体何が起こるのか。

——今更、何が起きても驚きはしないが。

「シルフィ、貴女も着替えて同席を。ああ、帯剣は禁止よ」

常に帯剣している乳姉妹は、軽く眉間にシワを寄せる。

しかし、今回は許すわけにはいかない。

「先触れもきているもの。帯剣して出迎えてはあらぬ検索をよびましょう」

あくまで、この国の王妃なのだから。

正装とまではいえないが、普段着よりも着飾り居間に降りれば、戻ってきたニックとジル、そしてなぜか隊長のカイザスの姿。

「カイザス隊長？　いかがなさいましたか？」

「ネフェリアさま、シルフィ殿。お邪魔しています。ニックに、呼ばれたものですから・・・」

シルフィの問いに答える、困惑気味のカイザス。

呼んできたニツクに目を向ければ、こちらも困惑顔。

「陛下の侍従に、隊長も呼ぶようにと言付かったのです」

だから、詳しくは判らないと言う。

「私も、侍従の方に一時間後位にこちらへ渡られると言付かっただけなのです」

その先触れに動転して、詳しく聞かずにこっちへ戻ってきたというナビス。

「おみえになれば判ることだから、気にしないでいいわ。一時間なら、あと少しですもの」

相変わらず、風は楽し事だと言う。

相変わらず、火は守ってやると言う。

相変わらず、水は嬉しいと笑う。

詳細を語らない自然たち。それは、わたくしにとって何の問題も無いということ。

だから、心配はいらない。

「あら。おみえになったようね」

ふわりとそよ風の知らせに、アンヌが出迎える為に玄関へ向かう。程なくして聞こえる人の声。

——お一人じゃ、ない・・・？

聞き洩れる声は、三人。

侍従や護衛たちは喋らないので、陛下が後二人、主賓を伴ってきたということ。

今更、妾妃としての努めを求められるわけではないと思ってはいたが、同伴者が居るといいうのもおかしい。

だんだんと大きくなってくる声に、向かえるために移動する。
軽いノックの後に開かれる扉。

「ようこそおいでくださいました、陛下」

「オルフェウスの月神の姫。許されい」

礼を取ったわたくしの目前に突きつけられる剣の切先。
認識した瞬間、炎が上がった。

わたくしを守るように、炎に包み込まれる。

突きつけられた剣の切先が、溶解するほどの、高温。

——それでも、わたくしは熱くない。

「さすがは月神の姫・・・そして、姫の騎士」

さして驚いた風でもなく言われる。

見れば、シルフィが陛下に剣を向けていた。

——帯剣はしていなかったはずなのに・・・

「シルフィ、控えなさい。陛下、我が乳姉妹^{あね}の無礼をお許しください」

「よい。最初^{最初}に無礼をはたらいたのはワシじゃ。それよりも月神の姫。その炎を治めてくれるか？」

切先の溶けた剣を控えていた侍従に渡し、軽く両手を上げる陛下。
これ以上、何もしないという意思表示に、こちらも従う。

「吾を守りし火の守護たちよ。ありがとう。どうか御身を静めて欲しい」

ゆっくりと炎に語りかければ、炎は解け、いくつかの小さな火の塊

になる。

傷はないかと語りかける火。

楽しかったと言う風。

くすくすと笑う水に、火は消された。

「自然の守護とは素晴らしいな。これが月神の力か」

勧められるままテーブルに着いた陛下が、自然たちの一連の行動に感嘆する。

普通とは違う、わたくしの日常の光景。

「それよりも、カイザス。隊長の貴方がそのように簡単に剣を取れるのは問題ではなくて？」

陛下の右隣に腰を下ろした、高位であろう女性が口を開く。

美しい金髪を短くした、活発そうな印象の美しい女^{かた}。

「まったくです。兵が剣を奪われてなんとします。いくら相手が戦いの女神だとて、情けない」

もう一人、左隣は宰相。

陛下は、この二人を伴って現れた。

お二人の言葉に、シルフィが突きつけた剣はカイザスの物だったと知った。

既に剣はカイザスの手に戻っているが、後でカイザスにも詫言しなければならぬだろう。

「セナリスも宰相もよさぬか。 ああ、セナリスは挨拶がまだだったか」

「ええ、陛下。ご挨拶もせずいきなりでしたから。 ネフェリア様、初めまして。エシロン王家第一王女セナリスと申します。先ほどの父王^{おとう}の無礼、お許しくださいませ」

「ご丁寧に恐れ入ります。 ネフェリアにございます。 どうかよしな

に」

優雅に礼をとられされた挨拶に、こちらも礼をかえす。
セナリス第一王女は王妃陛下の生んだ、シーガル王子とミュゼ王女の同腹の兄妹だ。

——そんな方が、なぜ・・・？

「まずは、姫に礼を。キルギスが姫からの見舞いを喜んでいた。食欲の無かったあの子が、美味しそうに物を食べる姿はワシをはじめ皆を安堵させた。礼を言う」

「恐れ多いことでございます。キルギス王女がお召し上がりいただけたならよろしゅうございました。わたくしごときが出すぎた真似をと思っておりますので」

まさか、陛下から礼を言われるとは思わなかった。

シルフィ以外誰も驚いていないことから、気さくにお言葉をくだされる貴人^{かた}なのだを知る。

「ほんとうに、クォーツやミュゼと美味しそうに食べていて安心しました。最近は元気になったと聞いていたけど、あそこまでとは思いませんでした。これも、ネフェリア様のおかげとか」

元気になってよかった、と言うセナリス王女。

本当に妹姫のことを心配していたらしい。

王家の兄妹にしては珍しいほど仲の良い王女達。普通は、異母兄妹とは険悪になる。それが、王妃腹と妾妃腹なら尚更だ。

取り留めの無い会話をしていれば、風が新たな来訪を知らせた。

「アンヌ、お客様がお見えのようです。お出迎えを」

「はい、ネフェリアさま」

アンヌが出て行けば、こちらを凝視する視線とぶつかる。

「陛下？ 如何なさいましたか？」

「いや・・・ ミュゼが言っていたが、姫はそんなことまで知ることができるのかと」

「風たちの気まぐれですが・・・ ソイド王子の先見と何らかわりません」

風が知らせるのは、気まぐれ。

水が知らせるのは、断片。

自然たちは、自身が見てきたものを気まぐれに、断片的に語るだけ。問えば答えるが、問わなければ答えない。

万物の受け皿であるわたくしもそれは変わらない。

「ソイドが、最近の水たちがよく語りかけてくれる、と言っていたわ」

それもわたくしの力か、と問われれば、答えは否だ。

「ソイド王子の守護はだんだん強くなってきております。ですから、知り得ることも増えるのでしょう」

「それも、月神の姫のおかげだとソイドは言っていました」

違う方向からの声に振り向けば、そこには王妃陛下の姿。

「王妃陛下・・・」

宰相が席を譲り、自らは陛下の後ろに立つ。

「ネフェリア様、少々よろしいですか？」

改まったセナリス王女の態度と緊張した宰相の表情。

風たちの喜ぶ楽しいことが、これなのだと知った。

第五章 二話／嵐、到来（後書き）

お気に入り登録してくださっている皆様に感謝を。
ありがとうございます。

第五章 三話／嵐、直撃

「まずはこちらをご覧ください」

茶席の軽々しさとは正反対の雰囲気の中、セナリス王女の言葉に、宰相によって差し出された一枚の紙。

それは、祖国オルフェウスの国紋印とエシュロンの国紋印の押された、正式な国家証。

「婚姻による血族同盟・・・？」

書いてある文字を読めば・・・

—?!—

「シーガル王子？」

オルフェウス国第一王女のわたくしと、エシュロン国第一王子のシーガル王太子の婚姻の書だった。

「本来ならば、それはネフェリア様が嫁していらした時に交わされるべきものでした」

そう前置きしてから、セナリス王女は話し出した。

「オルフェウス国王に、ネフェリア様をエシュロン国王太子妃にお願い出しました。しかし、ただ一人の王位継承者であるネフェリア様を、他国の次期王の妃に出すことはできない、と承諾が頂けず、では、現国王の妾妃に、となったのです」

父王は、母王妃以外の妃を持たなかった。

臣下には、側妃を後宮を、と勧める声がいまだに後をたたないが、父王は頑として聞き入れることはなかった。

それだけ母王妃を愛しているし、何よりわたくしが月神として生まれた。

母王妃が王子を産めば問題ないのだが、第一子のわたくしが月神として生まれた為に第二子は望めなくなつた。

代々オルフェウス国には月神が誕生するが、それは決して世襲ではなく、王家の血の濃い娘の中から、当代に1人だけ月神が誕生する。万物の受け皿である月神は必ず女でなければならず、それは何故かオルフェウス王家の血にのみ現れる。

時を同じくして2人の月神は存在しないため、必ずその身分が王女とは限らないが、王家の血の濃いところからのみ誕生する。

先代の月神は、父王の従姉だったと聞いている。

先代が崩御されたと同時に、わたくしが当代として誕生したそうだ。

「わたくしに子が出来ず、陛下が身罷られたら、わたくしはオルフェウスに帰る。

わたくしに子が出来れば、その子をオルフェウスにおくる。

そう、公約されたと聞いております」

オルフェウス王家の直系はわたくししかない。

先代の月神に子はなく、父王に兄弟はなく、姉妹も他国へ嫁いでいる。

血を辿れば王家の血を持つ者も出てくるだろうが、それはもはや直系ではない。

わたくしがエシュロンへ嫁してきたことで、父王はまた側妃だ後宮だと言われているだろうが、父にその気が無いのはこの条件でしる。

「はい。ネフェリア様にエシュロンに入っていたくのに、オルフェウス国王から提示された条件がそれでした。ですので、国交の書にもそのように」

その時取り交わした国交の書も一緒に並べられた。

「そして、次の条件がこれですか？

シーガル王子はわたくし以外の妃を娶らない。

わたくしの産む第一子は男女問わず時期オルフェウスの国王とする。子が成人する前にオルフェウス国王が身罷った場合、わたくしを中継ぎの王となりオルフェウスを治めることとする。

ここまでして、わたくしをシーガル王子の妃にと望まれるのは何故です？ このまま、陛下の妾妃ではいけない理由をお伺いしても？」

普通であれば考えられない条件の数々。その条件を飲んでまで、わたくしをシーガル王子の妃にと望まれる理由がわからない。

一度は陛下の妾妃でよいと了承しながら、もう一度国交の書を交わしなおしてまでわたくしをシーガル王子の妃に据えなければならぬ理由が知りたい。

「・・・我が兄、シーガルが、太陽の子であるからです・・・」

一瞬の逡巡の後もたらされたセナリス王女の言葉に、今まで静かだった風たちが一気に舞い上がった。

あーあ、言っちゃった。知らないよ。月神に言っちゃった。しーらない。

くるくると舞う風たちは、ひどく楽しげで。

踊る風たちに、これが言っていた楽しいことなのだと知った。

太陽の子。陽神。

月神と対を成す、陽神。

月神が女でなければならぬように、陽神は男でなければならぬ。月神が万物に語りかけてその恩恵を頂くのは逆に、陽神は強制的命令によって万物を使役する。

月神が自然に寵愛されるのとは逆に、陽神は嫌われる。

「シーガル王子が陽神？ 有り得ませんわ。太陽の子は、陽神は、かの神国の御血筋にしか現れぬはず。そして、かの神国は既に絶えて久しい・・・ まさか・・・」

今は亡き、神国。月神がオルフェウス王家の血筋にしか現れぬように、陽神も神国王家の血筋にしか現れない。
しかし、その血も既に100年も昔に絶えているはずだ。
その証拠に、陽神の存在も今は既に忘れられている。

——だが、もしも。もし、かの御血筋がどこかに残っていたら？

ずっと見えなかった疑問の輪郭が、見えてくる。

「太皇太后、エイザ陛下・・・？」

その名を口に出した瞬間、機嫌良く踊り舞っていた風たちが、ピタリと静かになった。

——これが、答え・・・

第五章 四話／嵐の被害

「エイザ陛下は、神国最後の生き残りだった。生まれた時からその身に力を持ち、誰に教わることなくその力を使っていたと聞く。エイザ陛下が男であつたのなら、間違いなく陽神であつたであろう。それほどまでに、お力を持っていた。そして、それを上手く制していらした」

月神が生まれながらにしてその力を理解しているように、陽神もそうだと聞く。

陛下が懐かしむように語る、陛下の祖母君のあたるエイザ陛下。この星の宮を作り、大神殿を作り、水の神殿をも造られた方。その方が、かの神国最後の御血筋だったという。

100年も前に亡国になった、今ではもう神話になってしまった、オルフェウスの片割れともいえる、かの神国。

その血がこのエシュロンにあり、月神の半身ともいえる陽神がこのエシュロンにいる――！

しかし……

「月神に同父同母の兄妹が存在しないように、陽神にも存在しないはず。シーガル王子には御弟妹がいらっしやる。信じられないことばかりなのです」

陽神の存在をわたくしが感知できないのも有り得ないし、だいたい過去3度程直接会っているが、シーガル王子からは何の力も感じなかった。わけがわからない。

「純をおって話そう。少し、長くなるがな」

そう前置きをして、陛下は話し出した。初めから、今までのことを。

「わしとティンカーは、従兄妹にあたる。エイザ陛下を祖母に持つ、最も近い血族になるだろう。我がエシユロンは、元々血筋に重きを置く王家ではなくてな。ティンカーを王妃に娶ったのは、わしの一存だった。だから、陽神を、かの神国の血を、と考えたわけではない」

オルフェウス王家は、月神という特殊性からその血の純潔を大切にしてきた。

王家直系の血は外に出すことはせず、国内においた。

王家にとって大切なのはその血である、というのは特に珍しいものではないと思うが、このエシユロンは違うらしい。

「かの神国の話は聞いていた。陽神の存在も知っていた。しかし、だからといってわしとティンカーの子がそうだとは考えなかった。必ず存在する月神とは違い、陽神は存在しないことが普通だと、先代の陽神はすでに150年も前だったと聞いていたから、考えもしなかった」

必ず1人存在する月神とすでに神話になつたいる陽神。

わたくしは、オルフェウス王家は月神だから陽神の存在とその役割を知っていた。

月神が万物の受け皿であるのなら、陽神は万物の配り手。

自然と言う加護を受ける月神とは違い、陽神は強制的に力を使役する。

陽神によって増幅された力は、諸刃の力。使役中に力にのまれれば、その力だけが爆発する。陽神はもちろん、その周辺をも破壊する。

強すぎる力は、世界を破滅へと導く。それほどまでに、自然の力とは強大で恐ろしいのだ。

しかし、他の人々はその存在が実在することすら知らないだろう。それは、かの神国が亡くなったことも深く関係している。

「はじめは、気づかなかった。火の加護を頂いているんだと思っていた。

しかし、シーガルが物心つく頃には、違うと知った。水の加護を頂くソイドとは、あまりに違っていた。古い神官から陽神だと聞かされた時は、喜びよりも絶望した。エシユロンには、陽神の力を制御する術を知る者は既になかった。制御できぬなら、せめて暴走させないようと、シーガルには精神の鍛錬を積ませた。あらゆる武術と知識で、物事に動じない広い見識をもたせた。決して激することなく、常に冷静であれ、と育てた。幸い、水の守護をいただくソイドが側にいたから、大事にならず隠し続けることができた。しかし・
・・」

不自然に、言葉を切る陛下。
自身を落ち着かせるためか、既に冷めてしまっているお茶に手をつける。

「シーガルは、その力を御することができません。望まぬ時は良いのですが、少しでも望んでしまえば、力が暴走してしまう。今はソイドが捧げる祈りで守護されておりますが、それももう・・・」

王妃が悲しげに言うその言葉を理解するのは容易い。
陽神は自然の力を使役するが、その属性から最も火がその力を発揮する。

その力を、水の加護で抑えているという。

そして、その水の加護を濃く受けている水の神殿と、ソイド王子の存在。

一体、エイザ陛下はどこまで先見されていたのか……。

「ソイド王子の祈りだけでは、もう抑えきれなくなつた？ それほどまでに、シーガル王子の、陽神の力が強くなつた？」

わたくしが、月神が近くに居るのに、陽神が力を制御できなくなるなど考えられない。

本来、月神が存在するだけで陽神はその力を安定させる。物理的距離は関係なく、その恩恵はあるはずなのだ。そのうえ、今は同じ国、同じ敷地内にわたくしは居るのだ。

「シーガルの力が強くなつたのかは定かではないが、シーガルの力が暴走するようになったのは事実。それだけ、シーガルの望みが大きいのだろう」

「望み……？」

「ネフェリア様は、去年のバーニカルド国の建国祭を覚えておいでですか？」

「セナリスー！」

口を挟む形で発言したセナリス王女を嗜める陛下。

しかし、セナリス王女は視線だけで陛下を黙らせた。

「はい。父の名代として出席いたしました、それが？」

「そこに、兄も出席しておりました。本来ならば外交官を務める私

が出席する予定だったのですが、どうしても帰国が間に合わず、兄が父の名代として赴きました。

その時、ネフェリア様を拝見し、一目で惹かれたそうです。美しい銀の髪、澄んだ碧の瞳、透き通るような白い肌。黒い御衣装で佇むネフェリア様に、目を奪われ、その瞬間に恋に落ちたと。

バーニカルドの国王夫妻と親しげな様子から、ネフェリア様をバーニカルド国王の縁の方だと思い紹介していただこうとして、オルフエウス国唯一の王位継承者にして月神の姫君であられることを知ったそうです。月神の姫は代々御国から出ることは無いと有名でしたし、何より唯一の王位継承者であるネフェリア様が他国に嫁ぐことなど出来るはずも無いとバーニカルドの国王夫妻に言われたと教えてくれました。

いくら望んでも手に入れられる方ではないと、一度は諦めたのです。しかし、帰国するまで一度もお話しすることができず、帰国してすぐネフェリア様の婚姻が間近であると知りました」

セナリス王女に言われて思い返すバーニカルド国の建国祭。

あの場に、陽神が居るとは気づかなかった。自然たちも教えはしなかった。真実シーガル王子が陽神であるなら、月神が気づかぬほど、わたくしシーガル王子はその力を抑えていた、ということ。

にわかには、信じられない。

「わたくしの婚姻の話は、ごく内輪のみで進めていたはず。どこでお知りになったのかお伺いしても？」

それよりも、と気になったことを聞く。

「ネフェリア様のお相手、ウルスリプンカ国第二王子は、ソイドの既知なのです。水の守護をいただくソイドと、風の守護をいただく

第二王子は、同じ位に立つ神官として交流がありました」

わたくしの夫となるはずだったウルスリブンカ国第二王子は、父王の異母姉を母に持ち、風の守護をいただく、オルフェウスの血を濃く引く方だ。

ソイド王子と同じように神官として自国の守護を担っておられるが、他国へ出ることの許されなかったわたくしの夫となることを受け入れ、御国を出ると言ってくださった、優しい第二王子。

エシュロンが攻め込んでくる時も、わたくしの身を案じる祈りが届いてきた。そんな方を夫に迎えられるわたくしは幸せだと思っていた。

「ソイドからその話を聞いた兄は、気持ちを抑えることが出来ませんでした。

エシュロン王家第一王子として正式にネフェリア様に婚姻の申し込みをしました。が承諾がいただけず、たとえ兄が王位継承権を破棄してもネフェリア様を得ることは出来ない、荒ぶる気持ちを抑えられぬままオルフェウス国へ戦を仕掛けました。攻め落とし、国が無くなればネフェリア様を妻に迎えることができると、激情のまま攻め入りました。

おろかな行為をしたと気づいたのは、王城へ入る際に目にしたネフェリア様のお姿でした。塔の最上階で一心に祈られるネフェリア様。事前に逃げたであろう民と、無駄な抵抗は一切なかったオルフェウスの兵。やっと冷静になった時には、自身のおろかな行為に音を背けなくなつたと。しかし、すでに後には引けなくなっていました」

そこまで話して、目を伏せるセナリス王女。
過ぎ去りし日の、真実。

「わたくしをシーガル王子の妻に望まれるのは、シーガル王子がわたくしを望んでいるから、以外にございますでしょうか？ 陛下の数の妾妃の1人ではなく、王太子殿下の唯一の妃として、ゆくはエシロン国王ただ1人の王妃として、ネフェリア^{わたくし}ではなく、月神をこのエシロンに留めておきたい何かが。そのために、わざわざ宰相殿までいらした。いいえ、陛下と王妃様まで、と考えるべきですか？」

当事者であるシーガル王子が同席していない理由もそこだろう。

「シーガル王子と直接お話をさせていただきたく存じます。今日は、これ以上お話しては下さらないご様子。わたくしも、これ以上は聞きません。」

しかしこれは、いくら正式な国交の書があろうとこのまま承諾するには色々と問題がありますので、強引に事を運ばれることのないようにお願いいたします」

太陽の王子と呼ばれるかの神国の方の記録はオルフェウスにも残っていない。

陽神の存在は、かの神国とオルフェウスの長い歴史で交わされた数々の国交の書と、歴代の月神の記録、そして、自然が伝える言葉のみで語られてきた。

——風は、シーガル王子が陽神だと認めた。

セナリス王女の言葉に、楽しそうに舞っていた風。

それでも、何かが釈然としない。

月神^{わたくし}が、感知できなかったから・・・？

それだけではない、何か。

——わたくしの、オルフェウスの記録に誤りがある？

もう一度、シーガル王子に会えばわかるだろう。

「シーガルは今、大神殿に監禁^{かんきん}しておる。出すわけにはいかぬゆえ、
姫が足を運んでやって欲しい。セナリスを、案内につけよう」

承諾は、肯定。

あとは、直接シーガル王子に確かめろ、ということ。

席を立つ両陛下と後に続く王女と宰相を見送り、この場はお開きな
った。

第五章 四話／嵐の被害（後書き）

あ、あれ・・・？

何か、話が進んでないような・・・

色々途中だ・・・

第五章 五話／嵐の後の・・・（前書き）

短い・・・

でも、どうしても入れたかったです。

第五章 五話／嵐の後の・・・

カイザスも陛下たちについて退出し、部屋には馴染みの者達だけが残った。

出されていた茶器が片付けられ、新しいものが用意される。

ふう、と深いため息が漏れる。

色々と、頭の中が整理されていない。

何から考えるべきなのかすらわからない。

いつもは語りかける風も、沈黙を守っている。

「ジル、悪いのだけれど、窓を開けてくれるかしら。 メイサ、ス
ープ皿に、水を汲んできてくれるかしら」
窓の横に立つジルと、扉の横に立つメイサにそれぞれ頼んで、わた
くしは暖炉へ移動する。

ジルがあけた窓から、風が入り込む。
冬の、凜とした風が部屋を吹き抜ける。

「ネフェリアさま、お水です」

「ありがとう、メイサ。こちらへ」

受け取った水に左手を浸し、願う。

風が、舞い上がる。

火が、燃え上がる。

左手を暖炉に向かって振れば、飛んだ飛沫が蒸発して水蒸気になる。
それを、風が固定する。

現れたのは、蜃気楼。

揺れるそこに映し出されるのは、懐かしい、オルフェウスの光景。戦火に見舞われた国土は、復旧してきている。

焼かれた山は、その豊かさを取り戻しつつある。

逃がした民たちは、戻ってきていた。

民達の顔に、憂いが無くて安心した。

もう一度手を振れば、今度はこのエシユロンの風景。

雪に覆われた、この国土。

所々見られる、荒野。

豊かな山と、痩せた土地。

自然の恩恵が届かない、大地。

豊かに潤う、人々の居住地。

差のありすぎる、広大な国土。

自然たちは何も語りかけはしない。

今見ているのは・・・。

まごうことなき、現状。

一層強い風が吹き、蜃気楼を四散させた。

自然たちの気まぐれは、ここまでらしい。

振り返れば、呆然と立ち尽くす者達。

わたくしにとっては普通のことだが、ここの者達は違ったのだと反省する。

「驚かせてしまいましたね。ごめんなさい、寒かったですでしょう？」

「ジル、窓を閉めてくれる？」

わたくしの声に正気に返り、慌てて動き出す。

寄って来たメイサに水をかえし、ソファに腰掛ける。

纏まらない思考の解決の糸口を見つけるために見てみたが、余計に混乱する結果となった。

豊かな国土を取り戻しつつある、オルフェウス。

その代わりのように荒野が増えていくエシユロン。

おとなしく、シーガル王子との会談を待つ他ないようだ。

「ネフェリアさま、お食事のご用意整いました」

ナビスが呼びにきたことで、思考の波から抜け出す。

心配そうな顔の、侍女たち。

——わたくしが、こんな顔をさせてはいけないわね・・・

「ありがとうございます、ナビス。食堂へいきましようか」

「そういえば、何で隊長は呼ばれたんですかね」

食堂へ向かう途中、思い出したようにニックが言う。

確か、侍従に呼ぶようにと言われたと言っていた。

「私が帯剣していた時の保険でしょう。仮に私が帯剣していれば、あの時陛下がご無事だったという保障はないので」

宰相殿あたりの指示じゃないですか？と言うシルフィ。

「シルフィ・・・」

まだ、帯剣の許可を出さなかったことを怒っているらしい。

「保険？」

「そう、保険です。仮に私が帯剣していれば、あの一瞬で陛下の剣を叩き落すことは充分可能だった。そうなったとき、私の剣を止める者が必要になる。それが、カイザス隊長だったのでしょう」

「シルフィさま、抜くの早そうですね。隊長軽くのしちゃうし。こんど、稽古つけてくださいよ」

そんなシルフィを気にする様子もなく、からからと笑って言うニツク。

国王が刃を向けられたというのに、その向けた相手を咎めるどころか、気にもしていない様子に苦笑を禁じ得ない。

「でも、よく寸止めできましたね。俺なら、勢いで突いてます」
怖いことを、サラリと言うシル。

「あの時、陛下に殺気はなかった。わかっていたからこそ、私も寸前で止めることができたのです。」

もし、陛下に微かにでも殺気があり、宰相殿がカイザス隊長を視線で止めなければ、無事ではなかったのは私の方でしょう」

淡々と返されるシルフィの言葉に、驚いたのはニツクだった。

「シルフィさま、陛下に殺気が無いとわかっていながら、剣を向けたんですか？」

「私のあれは反射です。殺気があるうがなかるうが、ネフェリアさまに刃が向けられれば身体が反応するんですよ」

ほええと感心するニツク。

「宰相様が、隊長を止めた？」

「ええ。あの場で動けたのは、私とカイザス隊長だけだった。」

ネフェリアさまの護衛の任に就く貴方達は、いくらネフェリアさまに危険が迫ろうとも、陛下相手のあの場で剣を抜くことは出来なかった。

でも、カイザス隊長と私は違う。

隊長はあの場で唯一ネフエリアさまに剣を向けることの出来る帯剣者で、私はあの場で唯一陛下に剣を向けることの出来る立場の人間だった。だから、カイザス隊長は私への保険に呼ばれたのでしよう。

でも、私が帯剣していなかったため、カイザス隊長は私に剣を向ける必要もネフエリアさまに剣を向ける必要もなくなった。だから、宰相殿はカイザス隊長の行動を視線で止めた」

「その一瞬でシルフィさまは隊長の剣を抜いて陛下に突きつけた、と」

「まさか、私がカイザス隊長の剣を陛下に突きつけるとは思わなかったでしょうね」

「隊長、なさけない・・・」

ポツリと呟かれたニツクの言葉に、噴出すシル。

「やっぱり、シルフィさま、稽古つけてください」

「そうそう、隊長から一本取りたい」

「私も腕がなまってましたから、嬉しいです。いつでも言って下さい」

なんなら2人同時でもいいですよ、とにっこりと笑うシルフィに、シルとニツクはその顔を引き攣らせた。

第五章 五話／嵐の後の・・・（後書き）

次話から第6章になります。

やっと、あの方の登場。

解決したいな、色々・・・。

第六章 一話／大神殿へ（前書き）

また増えた・・・。

第六章 一話／大神殿へ

衝撃のあの日から数日後、久しぶりに雪が止んだ。

朝の祈りで星見の間へ行けば、自然たちが常にないほど騒いでいた。光たちは何うように周りを照らし、風たちは面白がって髪を乱す。水も火も活発に動き、わたくしの周りを取り囲む。

囁かれる言葉はどれもわたくしの身を案じていた。

そんな中で来客の先触れがやってきたのは、朝食後すぐのことだった。

「お初にお目にかかります、第三王子のベアーズと申します。

近衛騎士の任に就いておりますので、帯剣のご無礼お許し下さい。本日は姉、セナリスの遣いで参りました」

騎士服に身を包んだ、シーガル王子とよく似た顔立ちのベアーズ王子は、王妃腹の第三子である。

文学よりも武芸に秀で、本を読むことよりも剣を交えることを好むというベアーズ王子は、その実力で近衛騎士の任に就いているという。

「はじめてお目もじ致します。ネフェリアにございます。

騎士ならば帯剣は当然のこと。お気になさいませんように」

王族の礼ではなく騎士の礼を取るベアーズ王子に、こちらも略式の礼を取る。

優しい雰囲気のソイド王子とは真逆の、陛下に良く似た雰囲気のベアーズ王子。

王子というよりは、やはり騎士の方がしっくりくる。

しかし、やはり帝国の王子。

その存在感は正に王族のそれで、立ち振る舞いも騎士にしては上品すぎる。

「セナリスが、ネフェリア様に是非お越し頂きたい所があると申しえておりました。ネフェリア様のご都合さえ宜しければご案内致しますが如何でございましょう」

「先だって書状にてお話は頂いております。ベアーズ王子のお手間ではなければよろしくお願いいたします」

あの日、セナリス王女から手紙が届いた。

父である陛下の行いの詫びと、何の説明もしないまま強行に事を進めようとしたことの詫び。

そして、シーガル王子との対面の場を設けることの約束。

雪の様子を見て、となっていたそれに、異議はなかった。

わたくしの答えに、控えていたアン又たちが外出の用意を始める。

毛皮のローブを着込んで外に出れば、そこに護衛の姿は無かった。わたくし付きの護衛も置いてきたことから、何人が待っていると思っただが……。

いくら王宮内といっても、ソイド王子といいベアーズ王子といい、一国の王子が一人歩きとは感心しない。

「大神殿へは限られた者しか立ち入ることは出来ません。今立ち入ることが出来るのは、国王と王妃、セナリスとソイドのみです」だから供も置いてきた、と言われる。

「では、シルフィも中には？」

共に付いて来た時には何も言われなかったが、そうならばシルフィも中には付いて来れない事になる。

「いえ、シルフィ様はご一緒にお入り下さるようにとセナリスより言付かっております。」

王族の、極限られた者しか入ることの許されない神殿内部へ、わたくしだけでなくシルフィまでもを迎えるという。

なぜ、と問おうとしたわたくしの言葉は、思い出したように口を開いたベアーズ王子によって発せられることは無かった。

「すっかり元気になったキルギスが、またネフェリア様の元に伺いたい。ミュゼもクオーツも、雪を理由に王宮に軟禁で、側仕えたちは大変だとか」

今朝も、外に出るなら連れて行けとまとわりつかれて大変だったと

笑う。

近衛騎士であるベアーズ王子は、他の騎士たちと官舎で寝起きしているという。

そのため、容易に会うことの叶わない兄妹たちへの毎朝の挨拶は欠かさないらしい。

もつとも、王位継承権は放棄していないので、公式の地位は第二位の王位継承者であるが。

「王女様方から、毎日お手紙を頂きます。キルギス王女がお元気になられて良かったですわ」

プリンとレモネードを贈った翌日には、キルギス王女が回復に向かっているとクォーツ王女とミュゼ王女から手紙をもらった。

何もいらない、と言っていたキルギス王女がプリンを美味しい、と食べるのを見て、とても安心した、と手紙にはあった。

キルギス王女が二人にもプリンをくれたので、一緒に食べれて嬉しかったと報告してくれた。

更に翌日には元気になったとキルギス王女本人から手紙をもらった。レモネードを飲んでから身体が温くなり、とてもよく眠れた、と喜んでくれた。

プリンならば嫌いな牛乳も美味しいからと、今度一緒に作りたい、となっていた。

クォーツ王女もミュゼ王女も大層プリンがお気に召したようで、今度星の宮に行ったときに、一緒に作って欲しい、と可愛らしいお願いが綴ってあった。

王宮の料理人もやはりプリンを知らず、風邪をひいたキルギス王女

が食べた魔法の料理を教えて欲しいとサキやヨイの元に押し掛けてきたらしい。

キルギス王女と一緒に作ることにしているからと事情を話丁寧に断りしたが、それでも諦めきれないという。

キルギス王女にお教えした後でレシピを送ることで一応の納得は得たらしい。

「キルギスに、レモネードを頂きました。不思議な飲み物ですね。

さっぱりとして飲みやすく身体が芯から温まり、不思議と疲れが取れました。あれも、ネフェリアさまの魔法のお茶、だとか」

くすりと笑うベアーズ王子。

「魔法、ですか？」

「はい。王宮内では、ネフェリアさまがお作りになる物はそう呼ばれています。

ケーキというおやつも、プリンも、レモネードも。

偏食のクォーツやミュゼが美味しいと食し、食の細かったキルギスがネフェリアさまのお作りになったものなら残さない。私を含め、王宮の者にとっては正に魔法、なのです」

あれだけ美味しければ、それも納得だとベアーズ王子は笑う。

そんな風に言われているとは、知らなかった。

わたくしにとつては、皆馴染みの物ばかりだ。

「余計なことをいたしましたか？」

王宮にも王女方のことを考えている料理人がいる。

その者たちのことを考えれば、わたくしのしたことは決して褒められることではないだろう。

「ネフェリアさまさえよろしければ、これからも妹達に作っていた

だきたい」

そんなわたくしの問いを、ベアーズ王子はお願いという形で否定した。

「料理人たちも、妹達が厨房に遊びに来るようになったと喜んでいきます。好みの味や、食材などの話もしていくとか。

料理に興味を持って、自らの好みの主張もする。あの子達にとっても料理人にとってもいい傾向ですので、ネフェリアさまはお気になさいませんように」

そう言われれば、わたくしも気が楽になる。

そんな話をしながら進めば、いつの間にか大神殿が見えてきた。

先日、供物用のリユカを採るために訪れたが、正面から大神殿を見るのは初めてだった。

水の守護を色濃く得ていた水の神殿とは異なり、大神殿は何の守護も得ていなかった。

そう、大神殿であるのに。

ぞわり、とする違和感。

「申し訳ございません、ネフェリアさま。ここより先はシルフィ様とお進みください」

大神殿の正面入り口。

重厚な扉の前で告げられた一言に、驚く。

「ベアーズ王子は？」

「私も立ち入ることは許されておりません。こちらでお待ちいたしております」

「いよいよ訳が解らない。」

「なぜシルフィが入りベアーズ王子が残るのか？」

「今、大神殿にはシーガルが監禁されております。それ故に私は入ることを許されておりません。詳しくは、セナリスにお聞き下さい」

「自分の口からはそれ以上伝えることを許されていない、と告げられれば、それ以上は聞くことが出来ない。」

仕方ない、と扉に向き合えば、タイミングよく内側から開いた。

「ネフェリアさま、お待ちしておりました」

セナリス王女によって迎えられ、大神殿へと歩を進めた。

第六章 一話／大神殿へ（後書き）

あ、あと二人！！

それで出揃うかな？？

第六章 二話／動き出す・・・（前書き）

お気に入り登録200件突破しました！！
本当にありがとうございます！

第六章 二話／動き出す・・・

「わざわざのご足労申し訳ございません。今、この大神殿には限られた者しか立ち入ることができませんので、ネフェリア様にはご不便おかけいたします」

中へ案内するため前に立つセナリス王女が申し訳なさげに言う。

セナリス王女やベアーズ王子の言うように、神殿内部には人の気配がなかった。

大神殿に一步入れば、入る前に感じた違和感がまた襲う。

ぞわりと背を撫でられるような不快感。

ここには、あらゆる自然の加護が存在しなかった。

月神であるわたくしにとって、自然の加護は当然の物。
それが一切感じられないこの空間は、気持ちの悪いものだった。

「ここは、特殊な何かが施されているのですね・・・ まったく自然の守護が感じられません」

わたくしの言葉に、セナリス王女は苦笑する。

「特別、というわけではないのです。ソイドいわく、シーガルがここへ移ってから守護者様たちの気配が無くなったと」

「そうですか・・・」

水の神殿同様、最高神官の位にあるソイド王子がこの大神殿の管理も任されているという。

にもかかわらず、この場所には水の守護すら微塵も感じられない。
どこにでも吹くはずの風も、ここでは一切その守護を感じることは
できない。

そこまで、シーガル王子は自然に嫌われている存在だということか。

やはり…？

長い廊下を歩けば、祭壇のある広い空間に出た。

そこだけが光溢れた広い空間。

奉られているのは、かの神国の最高神。

そこに佇む長身の男の姿を認めて、自然と歩みが止まった。

光を従えて佇む、溢れんばかりの光の守護を得たその姿に目が離せ
なくなる。

有り得ない光景が目の前に広がっていた。

ガラス張りになっている、高く取られた天井から降り注ぐ太陽の光。
自然の最たるその光を纏うその姿は、まさに陽神。

その光の守護を当然のように従える姿に、呼吸すら難しくなる。

ここには、自然の守護が感じられなかったのに！

「ネフェリアさま？」

セナリス王女の声がどこか遠く聞こえた。

「ネフェリアさま、如何なさいました？」

シルフィのどこか心配そうな声も遠い。

「お待ちしておりました、月神の姫ネフェリアさま」

光を纏ったシーガル王子のその声だけが、鮮明に耳に届いた。

「どこからお話すればよろしいでしょうか……。いえ、その前に私はネフェリアさまに謝らなければならないことばかりですね。数々のご無礼をお許してください」

最高神の前で、光の守護を得たシーガル王子は、そう言ってわたくしに頭を垂れた。

「……。その数々を、伺いに参りました。わたくしが知っているのは、過ぎし日のオルフェウスで、御使者としてお会いしたあの時より今までのみ。

しかし、本当の始まりはそこではないと伺いました。全てお話頂きたいのです」

そう。わたくしが知っているのは、あの日から今日までの表面的な

事のみ。

わたくしの主観と与えられた情報のみなのだ。

しかし、わたくしに与えられた情報は微々たる物だと判明した。

あの日より前にシーガル王子と会っていたことも知らなければ、初めはわたくしを望まれていたことも知らなかった。

わたくしのことにもかかわらず、わたくしの知らないところで過ぎていっていることが多すぎる。

これでは、何が良いのか判断できない。

「長い話になります。ここではなく、もう少し落ち着いてお話出来る場所へ移動しましょう」

そう言って背を向けたシーガル王子に付いて、更に奥へと進んでいった。

第六章 二話／動き出す・・・（後書き）

活動報告にてお礼小話掲載。
よろしければご覧ください。

拍手小話も展開中。
ポチッとお願ひします。

第六章 三話／語られる・・・（前書き）

12月5日、加筆修正

第六章 三話／語られる・・・

案内されたのは、王族が使う控えの間だった。

ソファとローテーブルしかない広い部屋。

そのソファにシルフィと並んで座り、テーブルを挟んでわたくしの正面にシーガル王子、シルフィの正面にセナリス王女が腰掛けた。

「我国には、陽神がどのようなものか知る者は既に無く、エイザ陛下がかの神国より持参された書に記されている事以外の知識がないのです。」

ですから、わたしが真実陽神と呼ばれる存在であるかはわかりません」

そう言っ出されたのは、古びた書。

何の装飾も無いそれには見覚えがあった。

「記録の書・・・」

祖国、オルフェウスに伝わる『月神の書』と呼ばれる記録書。

そこには、代々の月神の事が事細かに記されている。

それと、全く同じ様相のそれ。

「これは、エイザ陛下が持参された『陽神の書』です。代々の陽神のことが、かの神国王家の手によって記されています。」

月神の存在も、ネフェリア様の3代前のお方までの記録がございました」

「拝見しても？」

差し出された書を手に取って聞けば、頷かれる。
本来ならば、かの神国王族の目にしか触れる事の無いであろうそれを、丁寧の開いた。

やはり、オルフェウスの月神の書と同じように綴られているそれを読み進めていく。

当然のことだが、神国視点で書かれているそれは、オルフェウスに伝わっているものと所々で差異がある。

「かの神国が亡国となったのは・・・」

読み進めていき、見えてきた事実には愕然とした。

「強すぎる力は、諸刃の剣・・・」

ポツリと漏らされたシーガル王子の言葉。

理解することは容易い。いや、事実が見えてしまった今、理解せざるを得ない。

「だから、陽神は必ず存在するものではない・・・」

自然の加護を得ている月神と、自然から嫌われている陽神。

自然の受け皿である月神と、自然の使役者である陽神。

必ず存在し、均衡を保つ月神と、存在しないことで均衡を保つ陽神。その意味に、気づくべきだったのだ。

半身であるというのに、決して交わらなかったその意味に！！
その存在を感知できるというその理由に！！

これで、すべての合点がいった。

わたくしが、シーガル王子を、陽神を感知できなかったそのワケ。先日、自然が見せたあの情景。

そして、わたくしをこのエシュロンに留めておきたい本当の理由。

馬鹿げている、と一蹴できるものではない。

これ以上、均衡を崩すわけにはいかないのだから。

書を閉じ、シーガル王子に返す。

「詳しく、お伺いしてもよろしいですか？」

「はい。始めから、全てを」

ゆっくりと語りだすシーガル王子の言葉に、耳を傾ける。

セナリス王女は、何かに耐えるようにその顔を下げる。

「エイザ陛下は、かの神国の最後の王族でいらした。栄華を極めたお国を、その書にもあるように、エイザ陛下はご自身の手で終焉に導かれた。

・・・本当は、エイザ陛下ご自身もかの神国と運命を共にされるおつもりだったそうです。

しかし、時の情勢がそれを許さなかった。

広範囲で死病が蔓延し、自然のバランスが崩れた。国がいくつも

亡国となった。

この時、自然の加護を頂く者が少なく、月神の姫だけでは崩れたバランスを立て直しす事ができなかった。

滅び行く国々を、ただ見ているのはエイザ陛下には出来なかった。陽神と同じ力をお持ちだったエイザ陛下は、時の月神の姫に秘密裏に連絡を取り、強制的に建て直しを図った」

その月神が、わたくしの4代前の月姫。

自然の暴走を止める事が出来なかったその記録は、オルフェウスの月神の書にも記されていた。

万物の受け皿である月神ですら全てを受け止めきれず、世界を恐慌に晒してしまったことが切々と綴ってあった。

しかし、そこには、エイザ陛下の事は一切記されてはいなかった。

——いや、記せるはずが、なかったのか・・・

「かの神国は既にその機能をなくし、欠片の守護も得られなくなっていた。

そのため、新たに守護を頂く地が必要だった。出来れば、月神の姫のおわすオルフェウスに近い、自然豊かな地が。

そこでエイザ陛下が選ばれたのが、このエシュロンでした。

その当時のエシュロンは山々に囲まれた自然深い小国でした。エイザ陛下がそのお力を使うには丁度良かったのです。

幸い、王太子がまだ妃を迎えてはいなかったので、エイザ陛下は王太子妃として迎えられました。

そして、エイザ陛下は月神の姫とそのお力でもって治められた。死病は落ち着き、穢れた地は聖水によって清められた。亡国とな

った国々はエシュロンの領地となり、エシュロンは帝国と呼ばれる国土を得ました。

月神の姫は、この時のご無理がたたり身罷られたと。

すぐに次代の月神の姫が誕生されましたが、安定し始めた自然のバランスを崩すことを恐れ、エイザ陛下は水の神殿を建てられました。

専任の神官を置き、水の守護を頂く祈りを捧げさせました。

ご自身はこの大神殿を建てられ、祭司としてあらゆる祭事を執り行い、また自然に頂く恩恵に感謝されていました。

この大神殿にかの神国の最高神を奉たのは、エイザ陛下ご自身の力を御すためだったそうです。

エイザ陛下が崩御されるまで、何事も無く穏やかに過ぎていきました」

わたくしに与えられた星の宮も、エイザ陛下が自然の加護を得るための場として使っていたという。

コアから聞いた、建物の位置関係が思い出された。

『王宮を中心に、西に大門、東に大神殿、南に水の神殿、北にこの星の宮』

うまく、できている。

祖国オルフェウスから見て、このエシュロンは北側。

このエシュロンから見て、かの神国も北側にあった。

月神の祈りは、南の水の神殿で受けられ北の星の宮に向かい、かの神国からの力は、星の宮で受けられ水の神殿へ向かう。

強すぎるエイザ陛下の力を御すためのだけの配置。

——そう、かの神国が亡国となったのは、エイザ陛下の力の暴走が原因だったのだから。

『エイザ陛下は、神国最後の生き残りだった。生まれた時からその身に力を持ち、誰に教わることなくその力を使っていたと聞く。エイザ陛下が男であったのなら、間違いな

く陽神であつたであらう。それほどまでに、お力を持っていた。そして、それを上手く制していらした』

先日の陛下のお言葉が蘇る。

上手く、制していらしたわけではない。

暴走させ、御国を亡国へと導き、死病を蔓延させ、恐慌へと陥らせたのは、エイザ陛下のその力。

強すぎる力は、諸刃の剣。

使い方を間違えれば、自身をも破滅へと導く。

陽神のそれは、世界を巻き込む災い。

だから、陽神は存在しないことが普通なのだ。

だから、陽神は存在しないことでその均衡を保つのだ。

だから、月神は陽神の存在を感知できるのだ。
決して、その均衡を崩さないために。

エイザ陛下は、かの神国最後の生き残り。

オルフェウスよりも頑なに血族婚を繰り返したかの神国王家は、その濃すぎる血で子孫を残すことが出来なくなつた。

その濃すぎる血によつて、本来王子にしか現れぬはずの陽神の力を、女であるエイザ陛下が得た。

古来より、月が女の象徴であるように、太陽は男の象徴とされてきた。

繁栄と栄華は男がもたらし、安寧と安らぎは女がもたらすとされるためだ。

だから、月神は女、陽神は男と決まっていた。

その決まりを無視する形で陽神の力を得たエイザ陛下は、その力を暴走させた。

強すぎるその力で、かの神国を亡国とした。

月神が抑えきれぬほどの力を暴走させ、世界を破滅へと導いた。

異質な存在であるエイザ陛下を、自然たちは見放したのだ。

第六章 四話／知られざる真実

「わたしの父母ともに、エイザ陛下の孫にあたる、というのはご存知ですか？」

「はい、先日陛下に伺いました。この国で、最もエイザ陛下の血を濃く引いているのは王妃陛下のお子様方だと・・・」

苦悩にみちた陛下のお言葉が思い出された。

自身の子が、第一王子として生まれたシーガル王子が陽神だと知った時、絶望したという陛下のお言葉。

未知なる存在、未知なる力への恐怖ではない。
知っていたからこそその絶望。

エイザ陛下がかの神国を亡国としたように、シーガル王子もこのエシュロンを亡国とするかもしれない。

「いくらかの神国王家の血が流れているからといって、純潔には程遠い自身の子に出現するとは思っていなかったそうです。

ですが、産まれたわたしは普通ではなかった。
生まれたその瞬間、明かりの火が柱となり燃え上がり、我が身を包んだそうです。

産声を上げれば火の塊が舞い踊り、泣き止めば収まる。
決して火はわたしを傷つけなかったことから、火の守護を頂いているのだと思ったそうです。

わたしが泣けばどこからか火の玉が現れ、不快を示せば暖炉の火

が爆発する。

日に日に激しくなっていくそれに、乳母はわたしを泣かさぬように世話することでしたしか回避できなかった。

翌年、セナリスが生まれ、わたしのそれは落ち着きました。

更に半年後にはソイドが生まれ、水の守護様がその恩恵をソイドに下さいました。

それこそが、真に守護を頂く者の証。

わたしとの違いに、わたしが火の守護を頂いているわけではないと気づいたそうです。

それでも、その時はまだわたしが何者かわからなかった」

自然の守護を頂く者は少なくない。

その恩恵が他の者より多く、寵愛される者は確かに存在する。

ソイド王子は水に守護され、ウルスリブンカ国第二王子は風に守護されていた。

「ソイドの誕生に、この大神殿を当時任されていた老神官が思い出したのです。

その昔、エイザ陛下が語られた陽神のことを。かの神国男子にのみ現れる、凶神のことを。

わたしが、そうではないか、と。

真実を確かめる術を持たず、仮に真実陽神だったとしてもその力を制御する術を持たない父たちは、わたしを厳しく育てました。

エイザ陛下のように、暴走させることのないように、常に冷静で

あることを求められました。

そのかいあってか、杞憂していた事態に陥ることなく過ごしてきました。

しかし・・・」

自嘲気味に笑ったシーガル王子は、言葉を切った。

「昨年のバーニカルド国の建国祭。帰国が間に合わなかったセナリスの代わりに、わたしが国王の名代として赴きました。

そこで、バーニカルド国王と談笑されるネフェリアさまをお見かけしました。

美しい銀の髪、澄んだ碧の瞳、透き通るような白い肌。黒い御衣装で佇むネフェリアさまに一瞬で心奪われたのです。

ご紹介をお願い出ましたが、他国へ嫁ぐことの許されぬ御身であるから紹介は出来ぬと一蹴され、オルフェウス国第一王女にして唯一の王位継承者であると。そして、当代の月神の姫だと教えられました。

決して交わることの無いお立場の方だと、一度は諦めたのです。それでも、一度、たった一度でも、直接お言葉を交わしたかった。しかし、とうとうその機会に恵まれること無く帰国したわたしに、ソイドがネフェリアさまの婚姻が間近であることを知らせたのです」

先日、セナリス王女から聞いた過ぎし日の出来事。

わたくしには、まったく覚えの無いこと。

黒の衣装は、月神の正装。

白の服に身を包むオルフェウスの神官たちと同じデザインの黒の衣装。

オルフェウスの第一王女としてではなく、月神の姫として出席した建国祭だった。

「許せなかった。誰のものにもならないなら、とネフェリアさまを諦めたわたしは、ネフェリアさまが他の男の妻になる事が許せなかった。」

婚姻するのなら、その相手がわたしでもいいはずだ、という勝手な思いで正式に婚姻の申し込みをしました。

しかし承諾はいただけず、どうしようもない想いに心が乱れました」

ふと、目を伏せるシーガル王子の仕草に言い知れない何かを感じた。感じる違和感に、それでも口を挟むことは出来なかった。

「愚かにも、ネフェリアさまがわたしの元に嫁いでくだらないのは、オルフェウス国があるからだと思ったのです。お国が無くなれば、ネフェリアさまが手に入ると。」

冷静な部分ではあり得ぬ事と理解はしていましたが、止めることは出来なかった。

出兵を反対する者達を振り切る形で単身オルフェウス国に向かいました。

・・・この時ほど、陽神の力と呼ばれるものに感謝したことはありませんでした。たった一本の火矢で、山を焼き尽くすことができたのですから。所々で上がる火の手は、全て単身わたしが起こしたもの。

エシユロンより兵達が追いついたときには、もはや取り返しのつかないところまできていました。

父は、その状況に侵略者の責を負うことを決めました。

内々にオルフェウス国王と書状を交わし、ネフェリアさまをエシユロンにお迎えする段取りを整え、正式にわたしを使者として立てました。

交わされた内容は不満でした。私の妻ではなく、父の妻としてお迎えしなければならぬのですから。それでも、ネフェリアさまが我国にいらして下さるだけで良いと納得したのです。

わたしの身勝手な行動がどれだけ愚かだったのか気付いたのは、使者としてオルフェウス国の王城に入ったときでした。

塔の最上階で祈りを捧げるネフェリアさまのお姿を拝見し、恋焦がれていた貴女のお姿を垣間見れた喜びより、自責と後悔の念が襲いました」

静かに語るシーガル王子の言葉を、今まで黙って聞いていたシルフィが遮った。

「一国の王子として、王族として恥ずべきでしょう。ネフェリアさまは、オルフェウスの王族の方々は民や私たち臣下に仰いました。逃げよ、と。戦火に巻き込むわけにはゆかぬと。回避出来なんだ我等の責に、付き合う必要は無いと。隣国にはそのように約定を交わしてあるゆえ、隣国へと渡れと。」

「ご自身たちは逃げることをせず、最後まで見届けるお覚悟でありながらそう仰いました。」

それが正しき王族の姿。それが正しき統治者の在り方。そんな方

々だからこそ、私たちの誰一人逃げることはしなかった。民を逃がし戻った私たちに、今度は抵抗するな、と。無駄な血は流すなどの言葉。

そのような方々に、あなたはっ!!」

「シルフィ、おやめなさい・・・」

無駄な抵抗はするな、と兵たちには伝えてあった。

投降し、捕虜になつても死ぬな、と伝えてあった。

民を守るのが王族の務めであるから、民である臣下たちが王族を守る必要は無い、と。

勝てる見込みの無い戦に、大切な者たちを向かわせることは出来なかった。

——しかし、それはわたくしたちの勝手な願い。民を守るための兵たちに、王族を守るための兵たちに、願ってはならなかったこと。

「シルフィ殿の仰ることは最もです。王族のすることではない。王族が戦を仕掛けるのは、自国の民達を守るときだけ。自身の欲だけで仕掛けたわたしは、愚か以外の何者でもない」

「違います!! 止められなかった私たちの責任です。私もソイドも知っていたのに!!」

ヒステリックに叫ぶセナリス王女。

王族の責ではなく、妹としての責。

「どちらも過ぎた事。今更でございます。どなたをも責めるようなことはいたしません」

そう、今更だ。

大切なのは、これからの事。

事実を把握して、これからの事を考えなければならないのだ。

第六章 五話／明かされた真実（前書き）

お待たせいたしました。

第六章 五話／明かされた真実

口を噤んだ二人に、シーガル王子は続ける。

「当初取り交わされた書状では、ネフェリアさまをわたしの妻に、エシュロン国王太子妃にお迎えするという内容で進めていました。侵略の責は負いましたが、事実はわたしがネフェリアさまに恋焦がれて犯した愚行。オルフェウス国王に包み隠さず事実をお伝えいたしました。しかし、どうやってもそれは出来ぬと。」

オルフェウス国がたとえ亡国となろうとも、わたしの妻にだけは出来ぬと言われました」

その顔に苦笑を浮かばせ言うシーガル王子。

わたくしの知らない所で交わされていた書状。

そこに記されていた、ということは、既にあの時、父王はあの戦の真実をご存知だった、ということ。

「・・・シーガル王子が陽神であると、かの神国の血を引いていると、そこまで父王に？」

「はい、すべて、包み隠さず。エイザ陛下のことも、わたしのことも、全て」

やはり、全てをご存知だった父王。

それでも、了承しなかったのは、出来なかったから。

シーガル王子の妻にだけは、とは、やはりそういう意味だろう。

——知っていたからこそ、了承はできなかった、か

「このエシュロンに嫁すにあたり、条件が提示されました。それは、

父王からの要望だったのではございませんか？」

ただ1人の供も連れず、単身この国に嫁すること。
ただ一つの物もこの国に持ち込まないこと。

これが、エシユロン側の要望ではなく、オルフェウス側の要望だったとしたら。

ただ1人、わたくしを嫁がせることの意味。

その、重大さ。

———　　そういう、こと・・・

事は、シーガル王子の恋情だけで終わる問題ではなくなっている。

シーガル王子の起こしたことは、単なる切欠にすぎない。

遅かれ早かれ、事態はこうなっていただろう。

これは、必然。

起るべくして、起こった事柄。

「ネフェリアさまの仰るとおり、条件はオルフェウス国王より提示されたものです。理由をわたしは知りませんが、こちらからの条件として約

定にも記されています」

「その約定・・・　いえ、オルフェウスとのやりとりは、陛下が？」

「はい、父と宰相が。オルフェウス国は、国王陛下の御名の横に、王妃陛下の御名も」

———　　知らなかったのは、わたくしだけ、ということか・・・

「わたくしをこのエシユロンに嫁がせたのは、わたくしが月神であるから。エイザ陛下の頃より少しずつ狂い始めた守護は、シーガル

王子のご誕生で一氣に加速したのでしょう。

水の守護を頂くソイド王子の存在により何とか維持されている様子ですが、この広大な国土には、その守護が届かず、荒れはじめている所が多々ある。

だから、わたくしが、月神が必要だった。万物の受け皿たる月神の力に頼るしか、その存在に縋るしか国土を安定させる術が無い。

事実、ソイド王子の守護は安定してきています。風たちも、草木たちも、戻り始めている。これは、わたくしの存在如何ではなく、今までが不自然すぎただけ・・・」

先日見た、自然たちが気まぐれに見せたあの光景が思い出される。

自然の加護が届かない、あの荒地。

広大な国土に広がりつつある、荒野。

自然に見放された土地は、作物も育たず、人々は飢えていく。

恵みの雨さえ降らず、かれていく。

ここまで見放されたエシユロンを救う術は、もはや無い。

——そう、かつてのエイザ陛下のように、強制的に立て直すしか・・・

「シーガル王子、どこまでが貴方のご意思ですか？ わたくしを求めて下さるそのお心、どこまでが貴方のお心ですか？」

自国の綻びを、衰退を知らぬはずが無い。

知っているなら、それを止める術を考えるだろう。

恋情だけで動くには、危険すぎるあの行為。

下手をすれば、自国の滅亡にもなりかねない。

あの行動の裏に浅からぬ思惑があつたと言われた方が納得がいく。

「ネフェリアさま？ 仰られている意味が・・・」

当惑顔のシーガル王子。

しかし、何も知らない、とは考えられない。

「シーガル王子は、ネフェリアではなく、月神をお求めなのでございましょう？ おそらくは、エシユロンの衰退を止めるために。見放された自然の加護を戻すために。」

シーガル王子は、使者としてオルフェウスでお会いしたとき、ハツキリと仰った。『オルフェウスの月神の姫を我がエシユロンにお迎えしたい』と。

そして、迎えられたのは後宮ではなく、星の宮と呼ばれる、祭司エイザ陛下が建てられた離宮。一妾妃としてではなく、月神としての待遇でございましょう？

シーガル王子は、一体何をお望みなのですか？」

シーガル王子1人の考えではないだろう。

父王と書状を交わしていたのは、陛下と宰相だと言っていた。

国の未来のため、王太子の恋心を利用した？

そうだとすると、それを当事者のシーガル王子が知らないとは考えられない。

「違う・・・ わたしは、ネフェリアさまが月神だから望んだのではないっ 恋焦がれて我が手にしたいと望んだのは、貴女が貴女であつたから、ネフェリアさまを妻に求めたのは、そのお姿に一目で恋に落ちたからです！！」

政治的意図はなく、ただの恋心だったというシーガル王子。
それを信じることなど、もはやできはしない。

「では、交渉には一切関わっていない、と？ オルフェウスとの間に交わされた条約に、シーガル王子の意図は入っていない、と？」

「シーガルは本当に何も知らぬ。全ては、ワシの一存」

「陛下……」

後方からした声に振り向けば、陛下の姿。

「父上……」

「オルフェウス国王は、かの神国の血を事の外恐れておられた。陽神の血を、月神の血と混ぜることは出来ないと仰せだった。だから、その血を持つ、その力を継ぐシーガルの妻には出来ぬと。」

しかし、加護のなくなった土地の悲惨さも知っておられた。だから、条件付で姫をエシュロンにお迎えできた」

セナリス王女に譲られた席に座り、ゆつくりと語られる陛下。

「条件、ですか？」

「さよう。わが国からの条件として提示された、二つの事柄。

一つ、オルフェウス国の物は一切エシュロン国に持ち込まないこと。
と。

一つ、オルフェウス国より唯一人の随行者も付けないこと。

これは、オルフェウス国王の出された条件」

そのことの確認は、先程シーガル王子にもとつた。
わたくしの憶測が正しければ・・・

「オルフェウス国王は、万一のことを考え、姫の騎士を残しておきたかった。

月神と成り得た、その血をオルフェウスから出すわけにはいかぬ、と考えていた」

——やはり・・・

危惧したのは、月神の存在。

オルフェウスには、王家に連なる血が少ない。
直系はわたくしだけ。

次に濃い血を持つのは、両親共に王家の傍系であるシルフィ。
先代の月神がもう少し早く亡くなっていれば、当代はシルフィだったであろう。

「それでも、こうしてシルフィは同行を許されました。シーガル王子の裁量でと思っておりましたが、それも陛下のお指図ですか？」

ただ1人、わたくしだけをオルフェウスに送ることを許さなかったシルフィ。

自身の身分さえ交渉の道具として使い、最終的にシーガル王子の裁量でシルフィだけは随行が許された。

そう、王家に連なる血だという、その身分さえ・・・！！

「まさか・・・わたくしだけではなく、陛下はシルフィまでもを道具にしようとお考えだったのか?！」

「そうではない。月神になり得たシルフィ殿を望んだのは、少しでも多くの加護を頂こうとしたワシの浅ましさ。決して、その身を犠牲にと望んだのではない。信じてくれぬか」

真剣に言葉を紡がれる陛下に、嘘は見受けられない。

「父上は、一体何をお考えだったのですか？」

パチパチと空気のはぜる音に視線を上げれば、シーガル王子の周りに光が集まっていた。
濃度の変わる、空気。
小さく爆ぜるのは、炎。

—— いけない！！

咄嗟にシーガル王子の手を握った。

その手を引き寄せ、願う。
心からの祈りは、必ず聞き届けられる。

「守護たちよ。御身を使役するのは陽神に非ず。御身に願うのは月神。聞き届けて欲しい」

ゆっくりと願う、祈り。

揺らめく空気と、小さな炎。

自然たちの、戸惑い。

・・・戸惑い？

それでも、一瞬後には四散した。

「ネフェリアさま・・・」

呆然と呼ばれる名前に、視線を合わせる。

「シーガル王子は、真実陽神なのでしょう。太陽の子と呼ばれる存在なのでしょう。自然たちはそう認めています」

触れて知った真実。

かの『神国』の純血の御血筋ではないため、力が安定していない。自然に見放されたエイザ陛下の御血筋だから、制約が適用されていない。

同父母の弟妹が居るのも、そのせいだと思っていた。
わたくし月神が感知できなかったのも、その力を制御できないのも、全ては異質なるエイザ陛下の血のため。

そう、思っていた。

しかし、そこに隠されていた。
それに誤魔化されていた。

シーガル王子は、自然の守護を頂いていないわけではない。

「シーガル王子は、光の守護を頂いていらっしやいます。太陽から降り注ぐ、光の守護を」

「どういう・・・？」

どこか遠い、陛下のお声。

「ネフェリアさま・・・」

縋るような、シーガル王子のお声。

笑うしかない、真実。

真実は、すぐそこにあったというのに。

「自然の守護には、『光』と『闇』は存在しないのです。光は『太陽』を指し、闇は『月』を指す。」

『陽神』と『月神』からも知られるように、太陽と月は『神』なのです。『神』が特定の人間を『守護』することは無い。その守護を頂く者がいれば、それは『神』の代理人。

『地上の神』となりましょう」

「ネフェリアさまは、地上の『神』・・・」

「ええ。安寧をもたらす『闇』の守護と『月』の加護を頂く『万物の受け皿』である『月神』は、まさに地上の『神』といえるでしょう。」

しかし、それだけでは『世界』は成立しない。『万物』を『配る』者が居なければならない。

『配られる』から『受ける』ことができるのですから」

そんな、当然のことすら忘れていた。

「かの『神国』・・・純血を頑なに守り続けていたのは、そのため。『神』を『外』に出さないため」

そう、こんな近くに真実はあったのだ。いつの間にか、忘れられていた。

「異質なのは、シーガル王子の存在ではない。『陽神』が存在しない、この世界だったのです」

存在しないことで、均衡を保っているわけではない。
強制的に使役しているわけではない。

バランスが崩れているのは、陽神が不在だったから。
陽神の力が、均衡を崩すわけではない。

飽和状態になるだけなのだ。

それを、月神が受ければ均衡は崩れない。

エイザ陛下が神国を亡国としたのは、稀もない事実。

エイザ陛下が、自然から見放されていたのも事実。

しかし、それはエイザ陛下が『女』であつたから。

「国土に荒野が広がっているのは、万物が飽和状態になっているためでしょう。多すぎる栄養は毒になる」

今までの常識が、根底から覆されることになる。

『月神』の存在意義まで覆される。

しかし、認めなければならない。

半身であるというのに決して交わらなかったのは、相反するその力を恐れたためではない。

対極の存在であるから危惧されていたのではない。

『神国』の狂信的な信仰が招いた惨劇。

『純血』という妄信が生んだ悲劇。

結果、エイザ陛下という『異質』な存在が生まれた。

しかし、エイザ陛下はそのことを理解していらした。

だからこそ、シーガル王子という『正統な陽神』が誕生した。
妄信的な『神国』のしがらみの無い『陽神』が。

第六章 五話／明かされた真実（後書き）

平成23年2月26日

一部内容改訂。

混乱を招き申し訳ございません。

第六章 六話／歪まされた真実（前書き）

前話修正から1週間・・・

お待たせして申し訳ございません。

第六章 六話／歪まされた真実

シーガル王子に触れて知った真実は、これまで語り継がれ信じられてきたものとはまったく違うものだった。

それは、かの神国が頑なに守り、隠してきたもの。

陽神はもちろん、月神の存在意義さえ覆されるもの。

「ネフェリアさま・・・」

心配そうなシルフィの声。

この乳姉妹は、いつも私だけを心配してくれる。

「月神の姫、説明してくれぬか？」

陛下の声に視線を上げれば、困惑顔の陛下とセナリス王女。

シーガル王子は落ち着いたようだ。

「シーガルは、やはり陽神なのか？」

「はい。シーガル王子こそ、真に陽神なのでございます。永きに渡り、陽神の存在はかの神国によって真の姿を歪めさせられておりました」

自然に嫌われ、強制的に使役するとされてきた陽神。

しかし、それは間違いだった。

「陽神は、必ず存在するものではないと、いつからか語り継がれておりました。しかし、それこそが間違いだったのです」

太陽の子である陽神。

月の子である月神。

対極に位置しながら、対である筈の存在。

「月神が絶えることなく存在するのです。同じ『地上の神』である陽神が存在しない事がおかしいのです」

そう、対である存在なのだから。

「本来、陽神とは、自然の力を配る存在。荒野には潤す水の加護を配り、大地を覆う植物の加護を配る。

そして、その地に許容量以上に配られた加護を受けるのが本来の月神の役目なのです」

多すぎる加護は毒になる。

荒野に際限なく水の加護を送れば、そこは植物すら育たぬ沼になる。風の加護が多すぎれば、そこは荒野に荒れ果てる。

それらを調整し、過剰な加護を受けるのが、月神の役目。

「150年もの間、配り手である陽神が不在だった。だからこそ、エイザ陛下の御世、あの大恐慌が起きた」

「エイザ陛下の存在が、あれを引き起こしたわけではない、と？」

わたくしも、最初はそう思っていた。

あの記録の書にも、エイザ陛下の手記にもそう記されていた。

しかし、真実は違った。

「直接的な切欠はエイザ陛下でしょう。女的身でありながら陽神の力を得ていたエイザ陛下は、異質な存在として自然たちから見放されていた。時の月神が受けきらなかったのも道理。本来の陽神の力とは異なるそれは、月神にとって本来の受けるべき力ではなかったのです」

だから、溢れた。

だから、氾濫した。

混沌に巻き込まれた世界は、取り返しの付かないところまで来ていた。

「結果的に、時の月神がエイザ陛下を認識し、強制的に建て直しをはかった。異質なるその力を受けたことにより、時の月神は身罷った」

負荷がかかりすぎたのだろう。

荒れ狂う自然たちのその加護を、身を挺して受けた月神。

いくら万物の受け皿とはいえ、一切の負荷がかからないことは無いのだ。

「……では、やはりネフェリアさまは我が妻にはなれないのですか？」

陽神である自身を受け入れることは、月神であるわたくしを危険に晒すのか、と言うシーガル王子。

「陽神と月神が交わらなかったのは、かの神国の妄信によるもの」
シーガル王子の問いには直接答えず、歪められた歴史を紐解く。

「かの神国は、頑なに純血を守ってきました。それは、生まれる神を外に出さないため。

最高神を太陽神とする狂信的な信仰によって、生まれる陽神は、地上の神は神国王家のみ相応しいとされたのでしょ」

覚えのある感覚だった。

かの神国ほど妄信的ではないが、祖国オルフェウスでも同じような

考えを持つ者たちがいる。

オルフェウス王家の血にのみ月神が誕生するのは、オルフェウス王家が月の神に愛された存在であるからだ、と。

神に愛され、地上の神が誕生する血を、一滴たりとも外に出すべきではない、と。

「しかし、何代にもわたり血族婚を繰り返せば、その血は不浄を招き、子孫の繁栄は望めなくなる。

事実、150年もの間、陽神は誕生しなかった。陽神が誕生しなければ、かの神国の体面は保てない」

栄華を極めたかの神国。

他国との姻戚関係を結ぶことなく、神の血であることだけを武器に繁栄を極めた。

不可侵の領域。

絶対の聖地。

自らを神国と名乗り、どこからの侵略をも受けなかったかの御国。

「次代の陽神fが誕生しなかった神国は、体面を取り繕う必要があった。そこで、陽神の存在の史実を変えた。

いわく、安定した世界に陽神は必要ではない、と。この世界に真実陽神が必要になったとき、地上の神は再び光臨する、と」

歪められた真実。

この時から、陽神の存在意義が隠され、月神の存在意義が変化した。

「それでも、神国は求め続けた。より濃い神の血を。そう妄信的に求めた結果、エイザ陛下と言う異質な存在が誕生した。

本来であれば男にしか現れぬ陽神の力。それを女の身でありながら引き継いだエイザ陛下。自然たちが見放したのも無理からぬこと」

祖国オルフェウスは、他国の血を定期的に入れていた。それは純粹に国交問題だったのかもしれない。

しかし、結果として神国と同じ道は歩んでいない。

「陽神や月神に、同父母の兄弟姉妹が存在しないのも血の不浄のせいでしょう」

これは、祖国オルフェウスにもいえた。

月神の同父母の兄弟姉妹は存在しない。

いつの頃からか常識となっていた事柄だが、ソレも濃すぎる血のせいだろう。

他国の血を入れていたといっても、それも極限られた国同士の姻戚に過ぎない。

「陽神と月神が永き歴史の中で交わらなかったのは、そういった事情から。」

相反する力を恐れる必要も、対極に位置する存在だからと危惧する必要も無いのです」

月神と陽神。

互いの血を混ぜても、何ら問題は無い。

「では・・・」

「はい、父王が危惧したような事態にはならないでしょう」

あくまで、互いは半身であるのだから。

第六章 六話／歪まされた真実（後書き）

あと、どれぐらい拾わなければならぬのか・・・。
頑張ります。

第六章 七話／新たなる・・・（前書き）

これで、拾い忘れは無い！！
・・・・・・・・はず。

あつたら、こそつと教えて下さい。

第六章 七話／新たななる・・・

変わらずこの場所に自然の加護は存在しないが、その理由を知ってしまったので、先程までの不快感は無くなっている。

シーガル王子は、これほどまでに自然に愛されている。

「ネフェリアさま、シーガル王子が真に陽神であるのなら、どうしても今までネフェリアさまが感知できなかったのでしょうか？」

今までの話を整理し終えたのであろう時間をかけたシルフィの、もつともな問い。

「それも、いつしか歪められていたのでしょうね。

月神が陽神を感じることが出来たのは、必ずそこに存在していたから。陽神が、世界に加護を配る、その力を感じることが出来たらでしょう。

その存在を感知していたのではなく、その力を自然たちが知らせることによって、この身に受けることによって感じていたのでしょう」

だから、その力を封じられていたシーガル王子の、陽神の存在をわたくしは知ることにはなかった。

長きにわたり、陽神は不在だった。

その力も、忘れられていた。

だから、わからなかった。

——そして・・・

「伝えられていた陽神の力とは、強制的に自然たちを使役する、というもの。そもその根本が違ったのだから、知りえることなど出来なかった」

これが一番の理由だろう。

強制的に使役すれば、やはりどこかに無理が生じる。

それであるなら、すぐにわかっただろう。

しかし、先程シーガル王子が無意識に火を使役したとき、そこは一切の強制も無理も無かった。

ただ、火たちが自ら集まり、シーガル王子を媒介に、その守護を増幅させた。

だからこそ、知り得た事実。

鎮火を願ったわたくしに、火たちが戸惑いを見せたのはそのため。

「では・・・シーガルが、その力を制御できぬのは何故だ？

本来、陽神は月神と同じく、生まれながらにしてその力を自らのものとし、使えるのではないのか？」

苦渋に満ちた陛下の顔。

先程のことも、陛下の目には力の暴走と映ったのかもしれない。

「シーガル王子は、そのお力を制御できぬのではございません。ただ、その御育ちにより、方法をご存知無いですだけ。

本来であれば、陽神は月神と同じく必ず存在するもの。時を同じくして2人存在はしないため、先代からそれを直接教えられるという事はございませんが、綿々と引き継がれていたならば、周囲がそれを教えることが出来ます。

それは、神官であつたり、王族であつたり、または記録の書のよきな書物であつたりと様々ですが、直接その存在を見知っている者から伝えられることなのです」

けて、シーガル王子が異端なのではない。
知っているか、知らないか、ただ、それだけの事。

「わたくしも、物心付いたときには、自分が月神だと、この身は万物の受け皿だと理解し、力の向け方を理解しておりました。

しかし、それは、わたくしの周りがわたくしにそう接し、そう育てたから。

乳母は赤子のわたくしを抱き神殿に通い、母は祈りの塔にわたくしと籠り、父は守護ある者たちを集め、わたくしの加護を安定させた。

そうして育ったからこそ、わたくしは自分が月神であるということに何の疑問も持たずに過ごしてこれたのでしょ

う」
物心ついたときには、既に自然の加護はわたくしにとって当然のものであった。

祈りは身近にあり、自然たちの声は日常だった。

それに何の疑問ももたなかったのは、周りがそれを当然だと認め、わたくしをそう育てたから。

「シーガル王子の御傍には、陽神を正しく知る者が居なかった。それに加え、伝えられていた陽神は真の姿ではなく、歪められていたもの。エイザ陛下も、異質なるお力しかもっておられなかった。

そのような環境で御育ちになったのです、知らぬのは当然」

そのうえ、ソイド王子の水の守護によって抑えられていた。
すこし望んだだけで、力が大きくなる過ぎるのも道理。

「シーガル王子は、ちゃんと自然たちに愛されております。正しく知れば、何の問題もございません」

自然に語りかけること。

自然の言葉を聴くこと。

自然に祈ること。

たぶん、それらをシーガル王子は知らない。

その加護を頂くことがどれほど簡単で、どれほど危険か、シーガル王子は知らない。

知らなければいけない。

その身に頂く陽神の力がどのようなものか、その恩恵がどれほどのものか、知らなければならぬ。

そして、正しく使わなければならない。

———この世界に真実陽神が必要になったとき、地上の神は再び光臨する———

かの神国が対面を保つために発表したそれも、間違いではなかったのかもしれない、と思えてくる。

「ネフェリアさまが、教えてくださいますか……？」

「わたくしで、お力になれるのなら」

知らぬのなら、教える者が必要だろう。

制御できないのなら、抑える者が必要だろう。

個人の感情を優先する時ではない。

早くしなければ、大地の廃退が進んでいる。

今であれば、シーガル王子が真の陽神の御役目を果たしてくだされば、まだ、間に合う。

荒野を、廃退の進んだ大地を、豊かな大地に、自然の加護を頂く大地に返すことが出来る。

このまま放っておけば、エイザ陛下の御世の二の舞だろう。

そんなことに、してはならない。

そんなことには、させない。

「陽神とは本来、自然の加護を配る者。特別なことは何も必要ないのです。ただ、自然たちの言葉に耳を傾けて、自然たちに祈って、そして、願うだけで良いのです」

この大神殿に自然たちの加護がないのは、自然たちがシーガル王子のことを愛しているから。

陽神のその性質から、惨事を招く危険があるから、自然たちは自ら近づかないようにしているだけ。

「陛下、シーガル王子の監禁をお解きください。

月神の責任において、陽神の力の安定と、大地の自然の加護を御約束いたします」

わたくしは、月神なのだから。

第六章 七話／新たなる・・・（後書き）

これにて、第六章終了。

次回から第七章です。

やっと、あの幼い方々が・・・！！

第七章 一話／雪遊び（前書き）

お待たせいたしました。
第七章開始です。

第七章 一話／雪遊び

一面の雪化粧の中、澄んだ声が響く。

キラキラと楽しげな声と、その声の主を見守る大人たち。

雪に覆われた星の宮の中庭は、それでも日差しのおかげで暖かだった。

「ネフェリアさまー！！」

かけられた声に、手を振ることこたえる。

その柔らかな手を傷めないように、とはめられた皮の手袋。

足が凍えぬように、と履かされた皮のブーツ。

裾の長い衣装をはためかせて走り回る幼い王女たちは、今日も元気に護衛たちを振り回している。

「……できた！！」

嬉しげな声に目を向ければ、ジルとコアが大きな雪玉の上に、それよりも一回り小さな雪玉を乗せたところだった。

「まあ、王女さま方。大きな雪だるまが出来ましたね」

自分たちの背丈より大きなそれに、満足気の幼い方々。

体調のもどったキルギス王女も一緒に、外に出られなかった分も取り戻すかのように駆け回っている。

「ネフェリアさま、レモネードが欲しいです！」

「ほしいです!!」

テラスのテーブルについていたわたくしの所に、駆け回って喉が渴いたのであろう王女たちが可愛らしくおねだりに来る。

用意させたレモネードは王女たちからのリクエストで、そろそろ飲み頃に冷めているはずだ。

中庭からこちらに向かって手を差し出し、こちらには上がってこようとしないう王女たちに、苦笑を禁じえない。

“はしたない”と咎める乳母もいないここは、王女たちが年相応の振る舞いが出来る唯一の場所かもしれない。
そう思えば、これぐらいのことはとっいつい甘やかしてしまう。

「それではカップを落としてしましましょう。
メイサ、王女さま方の手袋を。ナビス、カップにレモネードを」

言えば、素直に両手をメイサに向ける王女たち。
しっかりと結ばれた手袋は、自分たちでは外せない。

ミュゼ王女から外した手袋。

しかし、ミュゼ王女も、外し終えたクォーツ王女も、キルギス王女が外し終えるまでカップを受け取ろうとしない。

大好きな姉姫と一緒に、との無意識の行動が、とても好ましい。

「はい、ベアーズ兄さま」

「はい、ジル」

「コアも！」

始めに受け取ったカップを、ここまで連れてきた第三王子と、一緒

に遊んでいた護衛二人に先に渡す王女たち。
王族にありがちな傲慢さの欠片もないその行動に、思わず笑みがこぼれる。

「ありがとう、キルギス」

「ありがとうございます、クォーツ王女」

「ミュゼ王女、ありがとうございます」

手渡された三人がきちんと感謝を伝えれば、幼い方々は花が綻ぶように笑った。

自分たちもカップを受け取り飲み干せば、また、元気に駆けていく。

「王女さまがたー！！ 手袋してくださいー！！」

手袋もせずに駆け出した王女たちを、メイサが慌てて追いかける。それを、ジルとコアも追いかける。

中庭いっぱいを使った追いかけっこに、ベアーズ王子と、顔を見合わせて笑った。

いつものように朝の挨拶に訪れた王宮で、キルギス王女の部屋に集まっていた王女たちに、今日は雪も止んで天気もいいから、星の宮に連れて行け、と王女たちにねだられたというベアーズ王子。

我慢の限界にきていたらしい王女たちを宥めるのを早々に諦め、何の先触れも無く朝食後にやってきたのだ。

「ネフェリアさまに、あれほど懐いているとは思いませんでした。ご迷惑ではございませんでしたか？」

風の知らせを受けて出迎えたわたくしを、王女たちは駆ける勢いそのままに抱きついてきた。

いくら幼い方々とはいえ、3人いつきに抱き付かれては受け止めきれず、後ろにいたシルフィが支えてくれなければ尻餅をついていた。

「あれほど喜んでいただけで、嬉しいことです。」

わたくしはいつでも歓迎いたしますが、王女さま方の御勉強などに支障はございませんか？」

特に何事も縛りの無いわたくしは、いつも時間を持て余しているため何ら問題はない。

しかし、王女たちは大国の王族として多くの事を学ばなければならぬだろう。

その時間を邪魔しては、教師たちに申し訳が無い。

「大丈夫です。もともとこの時期はそれほど多くの教師を雇っておりません。それに、妹たちも心得ていて、勉強はきちんとこなしております」

最近、きちんと勉強しなければ外出禁止、と脅しているというベアーズ王子。

いつもより真剣に取り組むようになったので、教師たちも側仕えたことも喜んでいるという。

「ネフェリアさまが褒めてくださった、と特に礼儀作法は真剣に。あのお転婆たちが、今では先生に褒められるほどです」

元気にメイサと追いかけてこをする王女たちを見て、苦笑するベアーズ王子。

メイサ1人では追いかकेきれず、ジルとコアも混ざっている。

「まあ、あれでは追いかけてではなく、鬼ごっこですね」

キャラキャラと楽しげに逃げ回る王女たちと、真剣に追いかける三人の大人。

くるくると駆け回る幼い方々に、大人たちは四苦八苦だ。

「そうそう・・・ソイドが、今日の午後の祈りに、よろしければご一緒にいただきたい、と。」

なにやら、ご相談があるとか」

中庭に視線を向けたまま、思い出したように言うベアーズ王子。

何の気負いも無く言われたこれが、ベアーズ王子が今日ここにきた本当の目的だろう。

「御伺いいたします。王女さま方も、ご一緒に？」

相談事があるなら、一緒に御連れしない方が良いと思ったのだが・・・。

「ネフェリアさまのお邪魔でなければ、一緒にお連れください」と言われてしまう。

わたしもご一緒させてくださいね、とまで言われた。

祈りを捧げることはけして悪いことではないため、断る理由はないのだが・・・

何となく残る、違和感。

その正体は、わからないけれど。

沈黙を守る守護たちに、気にするのをやめた。

第七章 二話／幼いお客様

「では、午後のお茶の後に水の神殿へ」

ベアーズ王子に了承を伝えれば、控えていたアンヌが一礼して退出する。

これから、食事とお茶の時間の調整、王女たちの同行の連絡などの手配に走るのだろう。

「ネフェリアさま、今日は、わたしもこのままこちらにお邪魔していてもよろしいですか？」

今日は非番なのです、と言うベアーズ王子。

言われてみれば今日の王子の装いは、騎士服ではなく、王族の簡易衣装だった。

「もちろんですわ。ベアーズ王子が一緒に知れば、王女さま方もお喜びになりましょう」

遊び相手に飢えている王女たち。

兄王子が一日一緒だと知れば、さぞ喜ぶことだろう。

——喜ぶのは、王女たちだけではないわね。

中庭を見れば、やっと捕まえたのであろう王女たちに手袋をはめているメイサ。

捕まえたのであろうジルとコアは、目に見えてグッタリとしている。王女たちの相手は体力勝負。

いくら鍛えられた護衛たちといえど、勝手が違うのだろつ。

ベアーズ王子も一緒に王女たちの相手をするとなれば、負担が減ると喜ぶのは護衛たちだ。

雪玉を作つて投げ出した王女たちを眺めていれば、何の前触れもなく、ふわりとそよぐ風。

気まぐれな風たちは、わたくしの周りをくるくるまわり、語りかけてくる。

「まあ・・・」

風たちの言葉に思わず笑えば、ベアーズ王子の不思議そうな顔。

「ナビス、サキとヨイに昼食を2人分追加するようにお願いしてきてくれるかしら？ ついでに、レモネードも温めておいて」

「今日の昼食はにぎやかになりそうですね」

正しく理解しているシルフィが言えば、心得ているナビスもすぐに退出する。

「ベアーズ王子、かくれんぼが御上手なお客様のお迎えに参りましたよう」

席を立てば、まだ不思議そうながらも、手を取り、リードしてくれるベアーズ王子。

3段ほどの階段を下りれば、気づいた王女たちが駆け寄ってくる。

「ネフェリアさま、お散歩ですか？」

「ベアーズにいさまと、おでかけですか？」

「ミュゼもいきます!!」

あつと言う間に抱きつかれて、身動きが出来なくなってしまう。
やっと解放された護衛とメイサは、肩で息をしていた。
王女たちの頭を撫でながら、メイサに指示を出す。

「メイサ、テラスを片付けて、居間を暖めておいてくれるかしら。
それと、王女さま方の着替えを5人分の用意もお願いね」

「5人分、ですか？」

「ええ。小さなお客様をお二人、今からお迎えにいつてくるわ」

「はい、ネフエリアさま」

クスリと笑えば、合点がいったのか、すぐにテラスに戻るメイサ。

「さて、王女さま方。これから、ベアーズ王子とお客様のお迎えに
参りますの。

でも、そのお客様は、恥ずかしくて隠れていらっしゃるご様子。
お探ししてお迎えするのを、お手伝いくださいますか？」

王女たちと目線を合わせて、こっそりと内緒話をするように言えば、
幼い方々は目を爛々と輝かせる。

「かくれんぼ？」

「ええ、ミュゼ王女。かくれんぼをしてらっしゃいますわ」

「見つけないきゃ」

「ええ、クォーツ王女。お探ししないと、お迎えできませんの」

「お手伝いします！」

「ありがとうございます、キルギス王女」

まだまだ遊び足りなかった王女たちは、楽しげに引き受けてくれる。

「ネフェリアさま、危険では・・・？」

「大丈夫ですわ、ベアーズ王子。とても可愛らしいお客様ですもの」

心配気なベアーズ王子にニコリと笑いかけ、もう一度王女たちに向き直る。

「あのあたりの、茂みにお隠れだと思うのです。そーっと、驚かさなないようにしてくださいませ」

中庭の奥、温室に通じる小道の茂みあたりを指す。

場所を示せば、幼い方たちに、そーっと、は到底無理な話で、目的のが所に向かって一目散に駆けていく。

「あ、こら。待ちなさい！」

その後を慌てて追うベアーズ王子と、ジルとコア。

「あらあら」

「まあまあ」

残ったシルフィと笑いながら歩き出せば・・・

「「「みーつけた！！」」」

「「「あ？！」」」

「「「「ツアイス（ねえさま）！！　ブライアン（にいさま）！！」」」」

幼い方たちの喚起の声と、大人たちの驚愕の声。

ベアーズ王子に茂みから引つ張り出されたのは、第三王女のツアイス姫と、第四王子のブライアン王子だった。

「2人とも、どうしてここに・・・それに、護衛たちはどうした？」

ベアーズ王子の言葉に、思わず笑ってしまう。

本当に、この方たちは護衛を置き去りにするのが得意だ。

「ベアーズ王子、とりあえずは中に。皆様、そのような格好ではお風邪を召されてしまいますわ」

御説教に入ろうとしたベアーズ王子をやんわりと止め、新たな幼いお客様の前で膝を付き目線を合わせる。

「いらつしゃいませ、ツアイス王女、ブライアン王子。ネフェリアと申します。

着替えと食事の用意がごさいます。よろしければおいでください」

「ツアイスです」

「ブライアンです」

「「お邪魔いたします」」

クォーツ王女とそれほど変わらぬであろう双子の愛らしい2人は、揃って御行儀よく頭を下げる。

「ジル、悪いのだけれど、お二人の護衛に連絡を。こちらでお預かり致しますから、心配はご無用、と」

手を取って先に歩く幼い方々を見ながらジルに指示を出せば、

「わたしが居るため、迎えは無用、と王宮に伝えてくれるか？」
と、ベアーズ王子も言葉を足す。

確かに、ベアーズ王子が一緒だと知らせたほうが安心するだろう。

「コア、王宮に伝えに行つてくれる？ ついでに、2人とも着替え
てきなさい。そのままでは冷たいでしょう？」

ここの護衛には、ベアーズ王子が連れてきた4人と、星の宮の周
りに居る10人で大丈夫だろう、と伝えれば、

「ありがとうございます、ネフェリアさま」

「いつてまいります、ネフェリアさま」

お礼を言いつつ、駆けていく2人。

王女たちとの雪遊びで、濡れていた2人。あのままで居たら、確
実に風邪をひく。

これからは、護衛たちの着替えも1組ずつ置いておいたほうが何
かと便利かもしれない。

わざわざ官舎に戻るより、その方がずっと楽だろう。

「ネフェリアさまは、なぜお判りになったのですか？」

星の宮に戻りながら、取り留めの無いことを考えていれば、ベ
アーズ王子からかけられた問い。

何のことが解らず、首を傾げれば、

「あそこに、ツァイスとブライアンが隠れていると、なぜお判
りになったのですか？」

言葉を足して、再度問われた。

「ツァイス王女とブライアン王子、と知っていたのではございません。」

先ほど風たちが告げたのは、幼い方が2人、とだけ。この宮に近づける幼い方は王女と王子だけですから、そう判断しただけですわ」

風たちが気まぐれに告げたのは、それだけ。

おさないこが ふたり ここにきたよ

かくれて いるよ

みつくて あげて

そついいながら、クルクルと回っていた風たち。

ここには、キルギス、クォーツ、ミュゼの三人の幼い王女たちがいる。

この幼い方たち以外に自由に敷地内を出入りできるのは、と考えて、まだ見ぬツァイス王女とブライアン王子に辿り着いた。

「そつでしたか・・・ それで、先ほど」

「ええ。風たちの言葉に笑ったのですわ」

そつ伝えれば、合点のいった、という顔。

「ネフェリアさまー!!」

「ベアーズにいさまー!!」

「はやくー!!」

テラスの入り口でタオルに包まれている幼い方たちが、こちらに向

かつて大声を張り上げる。

「お風邪を召されますわ。先にお着替えを」

伝える意思を持って少し大きめの声で言えば、

「「「「「はいっ!!」「」「」」」」」

と元気よく返事をし、侍女たちに手を引かれて宮に入る幼い方たち。

「・・・・・・あれで、聞こえたのですか・・・・?」

到底、聞こえる音量ではなかった、と呆然とするベアーズ王子に笑う。

やはり、当たり前ではない、わたくしの日常。

「風たちに、届けてもらったのですわ。おどろかせてしまいましたか?」

「はい・・・・今日は、驚くことばかりです・・・・」

素直な感想に、また笑った。

第七章 三話／楽しい昼食

キヤイキヤイとにぎやかな幼い方たちの声。

いつもは静かな食堂が、今日は楽しい声で満ちている。

着替えを終えた幼い方たちと食堂に入れば、そこに用意されていたのは大皿に盛られた数種類の料理とパン、2種類の温かいスープだった。

幼い方々の食量を量りかねたサキとヨイが、好きな物を好きなだけ食べられるように、と用意した心遣いが伺える。

それに幼い方たちは喜んで、取り皿を片手にはしゃいでいる。

一番幼いミュゼ王女の世話をキルギス王女がやき、クオーツ王女やツァイス王女、ブライアン王子は仲良く自らの手で料理を取っている。

わたくし達にしたら低いテーブルも、幼い方たちが手を伸ばすのに丁度良い高さで、目を輝かせて料理を選ぶ姿は愛らしい。

「あのように楽しそうな姿を見るのは初めてです・・・」

いつもは、決まった料理が皿に盛られて出てくるため、それを席に座ってお行儀よく食べるだけだという。

義務的に行うそれは、味気の無いものだろう。

「食べ物に感謝する、という意味では、食事は楽しんでいただきたいのです。」

楽しんで摂った食事はとても美味しく感じますし、美味しかった食事には自然と感謝をいたしますから」

それに、楽しい食事のほうが食も進みます、と言えば、幼い方たちの取り皿を確認したベアーズ王子はなるほど、と納得をする。

好みの料理を好きなだけ取った皿には、少量づつだが結構な量が盛られていた。

給仕に付いているメイサとナビスに、おかわりにこればよい、と言われながらも、あれもこれもと取ったのだろう。

幼い方たちが席に着いたのを確認して、声をかける。

「では、守護様たちに感謝して、いただきますよう」
『いただきます！』

きちんと両手を合わせての『いただきます』に、大人たちは顔を綻ばせる。

「おいしい！」
『おいしー！』
「美味しいです」

口々に美味しい、と喜んで食べる幼い方たちに、サキとヨイも安堵の表情。

「本当に美味しいです・・・これは、ネフェリアさまのお国の料理ですか？」

「はい、ベアーズ王子。お口に合ってよろしゅうございました」

昼食に並んでいる料理の大半が、オルフェウスで食べられているものだった。

ケーキやプリンに感動したサキとヨイに乞われて、食事も何点が教えていた。

目新しい料理に、今では護衛たちもここで食事を摂っていく。

「ネフェリアさま、これは何というお料理ですか？」

とても美味しい！ というキルギス王女。

「それは、カートラといいます。小麦粉で作った生地、味を付けた具材を包み蒸した、パンの一種です。今日はかぼちゃが入ってますが、お好みで中身は変えられます」

「ネフェリアさま、これは？」

「グラタンといいます。ホワイトソースという、牛乳で作ったソースを、今日はジャガイモや玉ねぎ、ベーコンの味付けした具材にかけて焼いた物です。こちらの具材も、お好みで変えられます」

すぐったグラタンを手に聞くクォーツ王女に答えれば、

「これが好き！」

ツアイス王女とブライアン王子の二重奏。

「それは、ルッドといって、サツマイモを茹でて潰し、リンゴと和えたものです。りんごのかわりに、オレンジと和えたりもします」
デザートに近いそれを、美味しそうに頬張るお二人。

「ミュゼはこっちのスープが好きです！」

「それは、トウモロコシのポタージュです。トウモロコシの実を潰して、牛乳を使ってスープにしたものです」

ホウレンソウのさっぱりとしたスープも用意されていたが、ミュゼ王女はポタージュがお気に召したらしい。

ワイワイしながら食事を進める幼い方々を見ていて自然と笑みがこぼれる。

本当に美味しそうに、楽しそうに食べる幼い方たち。

おかわり！ と元気よく席を立つ姿も年相応で可愛い。

いつになく進む食も、そんな幼い方たちのおかげだろう。

「デザートのご用意もございます」

サキの言葉に、幼い方たちは歓喜の声を上げる。

「デザート、なあに？」

「ケーキ？」

「プリンかしら？」

「お菓子？」

「くだもの？」

キラキラと期待に輝く幼い方たちの瞳に、サキは笑う。

「アップルパイです」

後ろから聞こえた声に、幼い方たちは一斉に振り返る。

そこには、まだ湯気の立つアップルパイを大きなお皿に乗せたヨイの姿。

「リンゴ？」

「はい、ツアイス王女。リンゴを甘く煮て柔らかくしたものを、パ

イ生地で包んで焼いたのです」

興味深そうにお皿を覗き込む幼い方たち。

そつえば、アップルパイはまだ差し上げたことがなかった。

「さあ、とても熱いので、お気をつけてお召し上がりください」

目の前の小皿に盛られた握りこぶし程の大きさのアップルパイ。

ナイフで切れば、中からは甘煮したリンゴが湯気を立てて出てくる。

『おいしいー！！ー！』

常よりも甘いリンゴは、幼い方たちのお口には合ったようだ。

「ネフェリアさまのお国の料理は、本当にすべてが美味しいです」

「ありがとうございます、ベアーズ王子。これも、料理人であるサキとヨイの腕の良さですわ」

幼い方たちを微笑ましげに見つめる料理人を見て、アップルパイを口に運んだ。

第七章 四話／氷の神殿（前書き）

お待たせいたしました。
やっと更新です。

第七章 四話／氷の神殿

『うわあああ・・・』

「あら・・・」

「久しぶりですね」

『きれー！ー！！』

にぎやかな昼食の後。

食事を楽しんだ幼い方たちを居間に通し、少しの間他愛の無いおしゃべりに興じる。

元気いっぱいの方たちは、すぐにも外で遊びたがったが、食べてすぐは消化に悪い、と室内に留まっていた。

「ソイド兄様の神殿へ行かれるのですか？」

「お祈り、ですか？」

「ミュゼもいきます！！」

「行きます！！」

「ああ、皆でいこうな」

ベアーズ王子と水の神殿へ行く話をすれば、幼い方たちは当然のように同行を望んできた。

祈りを捧げる、という行為の重要性をまだ理解していない幼い方たちが、自主的に神殿に足を運ぶのは良いことだ。

午後のお茶の後で向かうことをお伝えしたところで、水の神殿から火急との使いが来た。

予定を早めて、今すぐにも神殿へ来てほしい、とかなり顔を悪

く言いに来た神官に連れられ、幼い方たちとベアーズ王子、シルフィとメイサとナビス、そして護衛のビルダーとバドクと共に水の神殿へやってきた。

そこで目にした光景に、三者三様の声を上げた。

幼い方たちは見たまま『きれー！！』とその美しさに感動し、わたくしやシルフィは、見慣れた現象に、そして、ベアーズ王子を含むエシュロンの大人たちは、言い知れぬ何かを感じたらしい。

「ネフェリアさま！！」

声が聞こえたのであろう、ソイド王子が神殿から慌てて出てくる。その顔色は悪く、この現象に困惑しているさまが伺える。

「申し訳ございません、ネフェリアさま。お呼びたて致しまして・・・」

「いいえ、ソイド王子。お気になさらないください」

ソイド王子の謝罪をやんわりと受ければ、幾分か落ち着きを取り戻した様子で幼い方たちやベアーズ王子にも目を向ける。

「ソイド兄上、これは・・・？」

神殿を見てキャラキャラとはしゃぐ幼い方たちを横目に、恐る恐るベアーズ王子が問いかければ、

「それがわからないから、こうしてネフェリアさまにご足労いただいたんだ」

と、その顔に困惑を乗せた。

常識のある大人たちが困惑するのも無理はない。
目の前に建つ水の神殿は、その外側を氷で覆われ、太陽の光を反射して、キラキラと幻想的に輝いているのだから。

縋るように見つめてくるソイド王子他神官たち。

説明を求めるその瞳は、混乱している。

水の守護たちを怒らせたのではないかと戦々恐々としているのだ。

「このようなことは、初めてなのですか？」

その様子に、つい問いかけてしまった。

わたくしやシルフィにとつては、日常とまではいかないが、不可思議ではない程度には見慣れた現象。

水の加護をいただくソイド王子が知らない事の方が信じられなかった。

「はい……。何か、守護様のお気に障る事でもしてしまったのでしょうか？」

「いいえ、ソイド王子。これは、ただの水たちのイタズラですわ。お気になさいませんように」

悲痛な面持ちで言うソイド王子を安心させるように笑うが、そのお顔は晴れない。

「今朝、朝の祈りを終えるまでは普通だったのです。昼食を摂り、午後の祈りを捧げようと祭壇の前に立つたら、いきなり……」

一瞬にして氷に覆われてしまったという。

いつもは聞こえる水たちの声も聞こえず、混乱し、わたくしを呼び

に走らせたという。

「心配いりませんわ、ソイド王子。これは、水たちの機嫌の良い証拠なのです。機嫌が良すぎて、少々イタズラをしてしまっただけ」

そう、これはただそれだけの現象。

しかし、ここまで水たちの機嫌の良くなる出来事とはいったい……？

「ネフェリアさま、中に入りたいです！」

「いいですか?!」

ブライアン王子とツァイス王女が言う。

瞳をキラキラさせて、その好奇心のまま口にする。

ソイド王子との会話から、危険はないと悟ったのだろう。

幼い方たちは、今にも走り出さんばかりである。

「神殿内も、ですが……」

ためらいがちに口を開く神官に、にこりと笑う。

「大丈夫ですわ。参りましょうか」

待ちわびていた幼い方たちに言えば、ブライアン王子とツァイス王女を先頭に神殿へかけていく。

後を追うように駆けるベアーズ王子。

限られた者しか立ち入ることのできない神殿へは、護衛たちは入れない。

『うわあっ　すごーい!!』

中から聞こえる幼い方たちの感嘆の声。

追うように中に入れば、外壁同様、内部も全体を氷に覆われていた。

「氷の神殿、ですね」

「ええ、相当に水たちの機嫌が良いようね」

シルフィの言葉に返せば、くると風が舞った。

「あら・・・？」

「ネフェリアさま？」

風たちの気まぐれに告げられたコトバに、水たちのご機嫌の意味を知る。

そつえば、お教える、とお約束していた。

丁度良い機会なので、このまま・・・。

「ソイド王子、お客様がおみえになります。しばらく、このままに」

「お客様、ですか？」

「はい。もうすぐ、こちらにお越しになりますわ」

ゆつくりと振り返ったそのタイミングで。

神殿の入り口に、人影ができる。

「これは、いったい・・・？」

かけられたその言葉に答えるように、
風が吹き抜けた。

第七章 四話／氷の神殿（後書き）

さて、やってきたのは・・・？
次話、あの方が・・・！

第七章 五話／陽神と月神

「ソイド？ これは一体どうしたんだ？」

「シーガル兄上・・・」

風に迎えられたのは、シーガル王子。

楽しげに回る風たちに導かれるように、神殿の中へと入ってくる。

「ネフェリアさま・・・ベアーズも、皆、一緒か？」

祭壇で遊ぶ幼い方々と、その守をしているベアーズ王子を見て、そう問いかけるシーガル王子。

あの大神殿で別れてから2日だが、自然たちの加護を受け入れ、大きな問題もなさそうな様子に安堵した。

シーガル王子には、自然の守護たちを認め、語りかけることを課題として出していた。

大神殿に籠り、日に三度の祈りを捧げ、自身が陽神であることを自覚することを求めた。

この2日で、だいぶ自然たちに慣れたことが伺える。

自然たちの加護がどういったものか、感覚で理解ができたのだろう。

『シーガルおにいさま！！』

元気いっぱいの子供たちは、大好きな長兄の姿を見つけて、我先にと駆け寄ってくる。

それを笑顔で受け止めるシーガル王子。

ずっと大神殿に籠っていたため、久しぶりの対面だろう。

「どうして、ここに？」

「ベアーズにいさまが、ソイドにいさまの所にいくって」

「一緒に、お祈りすればいいって」

「ネフェリアさまも、いつしょ！」

「連れてきていただいたんです」

一気にしゃべる幼い方たちの言葉を、目線を合わせて聞くシーガル王子。

ソイド王子もベアーズ王子も、そんなシーガル王子に習って腰を落とす。

「それで、これは一体？」

一通り幼い方の話を聞き終わり、当初の疑問に戻る。
注目を集めるのは、わたくし。

「水たちのイタズラですわ。とても、機嫌の良い証拠です」

「機嫌が・・・？」

「はい。とてもご機嫌なのですわ。耳を傾けてください。聞こえますでしょう？ 水たちの笑い声が」

さつきから、クスクスと笑う水たちの声が聞こえている。

半ば混乱しているソイド王子は気付かなかったようだが、シーガル王子が現れてから、水たちは騒ぎ出していた。

「ああ、ほんとうだ・・・」

わたくしの言葉に、心を落ち着けたのであろうソイド王子が安堵の声を漏らす。

どうやら、水たちの声が聞こえたらしい。

「シーガル王子。今日の祈りで、水たちに語りかけませんでしたか？」

どうしてこれほどまでに機嫌が良かったのか解らなかったが、シーガル王子を見て疑問が解けた。

クスクスと笑う水たちは、陽神の呼びかけに答えたのだ。

「確かに、語りかけました……。ネフェリアさまがお教えくださったように、守護様たちに語りかけ、感謝と祈りを捧げましたが……」

「水たちからは反応がなく、その在り方を確認するために、こうして水の神殿に足を運んだ」

不自然に言葉を切ったシーガル王子に続けるように言えば、瞠目される。

なぜわかったんだ、とその瞳が語りかける。
しかしそれには答えず、この状況を利用し、シーガル王子には陽神としての在り方を学んでいただく事にする。

「丁度良い機会です。このイタズラを、治めていただきます」

にっこりと笑って、宣言した。

祭壇の前に立つシーガル王子。

その1歩後ろに立つ、ソイド王子とわたくし。

シルフィは扉の内側に控え、ベアーズ王子ほか若い方たちと神官は、一度おもてへ出ていただいた。

シーガル王子がどれほどその力を制御できているか見極めるために、このイタズラを利用する。

「この氷を取り去り、溜めの水を聖水にしてくださいませ。水たちに、願い出るのです」

万物の配り手である陽神。ほんの少しの力の配分。

それが出来れば、たやすいこと。

わたくしは、“願う”という行為によって自然たちの力を使う。

“語りかける”という行為によって、その制御を行う。

シーガル王子は、どのようにして使うのかがわからないけれど、それを知る、良い機会でもある。

寝の前に立つ、シーガル王子を見つめる。

「水の守護たちに願う。氷を溶かし、溜めに聖水を」

集中する精神。研ぎ澄まされる感覚。

雑念の無い、純粹な“願い”と“祈り”。

シーガル王子の緊張が、濃度を変える空気でわかる。

「御身の守護に、感謝を」

ふっと、軽くなる緊張。

それに応えるように、水たちの気配が一層濃くなる。

—— ああ、ダメね・・・

一瞬の判断の遅れ。

それがもたらすのは・・・

「うわあっ」

「っっっ！！」

一気に降ってきた水に、全身ずぶ濡れにされたお二人。
わたくしは、咄嗟に風の加護をいただいたので、一滴も濡れていない。

「ネフェリアさま・・・」

情けないお顔で振り向かれるシーガル王子に、

「まだまだ、制御が必要ですね」

慰めることは、しなかった。

「表の氷を、取り除きます。わたくしがいたしますので、おもてへ」

濡れたままのお二人をそのままに、表へと移動を促す。

幼い方たちならばすぐに着替えていただくが、これは水の守護が強い聖水。

このままでいても、風邪を召される心配はないため、敢えて無視を決め込む。

「ネフェリアさまが？」

「はい。ご覧になってくださいませ」

シルフィの開けた扉から外へ出れば、元気に遊んでいた幼い方たちが目に入る。

入り口より少し離れた場所に立ち、神殿へと向き直れば、ふわりとそよぐ風の加護。

「シーガル王子は、的確に指示を出さなかったため、水たちも戸惑ったのでしよう」

言いながら、願い、語りかける。

“ 神殿を覆いし水の守護たちよ。氷を払い、加護を分け与えたまえ” “ 降り注ぐ氷の祝福と、光と風の恩恵を” “

本来ならば、ここまでハッキリと言葉にする必要はない。しかし、今はシーガル王子にお教えしなければならない。

「わああ・・・」

「すごい！！」

「きれい・・・」

「虹・・・！！」

氷の弾ける澄んだ高音と、降り注ぐ煌き。

そして、そよぐ風と光によって創られた、七色の幻想。

神殿を覆っていた氷は、弾けて降り注ぐ、スター・ダスト。

そしてそれは、光を浴びて煌く、七色の虹へと変貌を遂げる。

愛すべき、自然たちの恩恵。

第八章 一話／勅令

慌しく行きかう侍女たち。

男手に借り出されている護衛たち。

嬉しそうにはしゃぐ幼い方々。

いつもは静かなこの星の宮は、常に無いほどめまぐるしく人が出入りしていた。

水たちのイタズラによって、神殿が氷に覆われた翌日。

朝の祈りに立つわたくしに贈られた自然たちのプレゼントは、このためであつたらしい。

「ネフェリアさま、よろしいのですか・・・？」

居間のソファに腰掛けるわたくしの後ろから、シルフィが声をかける。

その声はどこか怒りが込められている。

「良いも悪いもないでしょう？ これは勅命だそうよ」

この国に入った以上、従わなければならないものだ、たとえば、シルフィの顔はますます苦いものとなる。

しかし、国王の勅命には逆らえない。

これ以上無いほどの歓喜によって迎えられた朝の祈り。

雪は溶け、地面は乾き、足場は良好。

そよぐ風はサラサラと心地よく、柔らかな日差しに緑も眩しい。

一足どころか二足とびに春になったような今日の陽気は、自然たちからのプレゼントだった。

歓喜で迎えられた朝の祈りを不思議に思いながらも済ませ、いつも通りの日常が始まるはずだった。

最近では、わたくしに合わせてこの宮は動く。

後宮の一般的な朝よりも随分と早い時間にも関わらず、この宮の者たちは自主的に合わせてくれている。

仕える者たちにとつて、優先させるのは己の主。

いかに快適に過ごしていただくか、いかに無理をさせることなく日々を過ごしていただくか、それが最も大切な仕事となる。

王族として生まれ、育ってきたわたくしも、それは十分に理解している。

だからといって、それを当然と受け止めてはいけない。感謝を伝え、ねぎらうことを忘れてはいけない。

朝の祈りを終わらせて部屋に戻れば、衣裳を用意して侍女が待つ。着替えを済ませて居間に下りれば、整えられたそこにお茶の用意をして待つシルフィ。

朝食までの時間を護衛を交えた4人でお茶をしながらゆったりと過ごし、本日の予定などを確認する。

お茶請けのお菓子や、昼食のリクエスト、幼い方たちの好みなど、様々なことを話題として過ごすこの時間に舞い込んだ非日常。

国王陛下の、勅命。

それを携え来訪したベアーズ王子の、なぜか嬉しそうな笑顔が忘れられない。

「ネフェリアさまー！！ ミュゼもここにすみますー！！」

開け放たれた入り口から飛び込んできたミュゼ王女を座ったまま抱きとめ、苦笑する。

「ミュゼ王女。それはわたくしではお返事できませんわ」

膝の上に座らせたミュゼ王女に言えば、むう、と口を尖らせる。そんな可愛らしい姿についつい甘やかしてしまいたくなるが、こればかりはどうしようもない。

「シーガルおにいさまだけズルイですー！！」

そう。

なぜか、シーガル王子の居住が、この星の宮に移されることになっていた。

第八章 二話ノワガママ

今朝、ベアーズ王子の手によって届けられた国王陛下の勅命。

シーガル王子の居住を、この星の宮に移すというそれに、言葉を失ったのは言うまでもない。

「ミュゼも、ネフェリアさまといっしょにココにすみたいです！！
シーガルにいさまだけズルイ！！」

ぎゅうぎゅう抱き着いてくるミュゼ王女の言うように、書には同居の旨が記されてた。

一妾妃の住む離宮に第一王子の居を移すなど、正気の沙汰ではない。

シーガル王子がこの星の宮に居を移されるのならば、妾妃であるわたくしが移動するのが道理。

しかし、シーガル王子はわたくしと同居する。

「ネフェリアさまーっ」

「ネフェリアさまー！！」

ぱたぱたと軽やかな足音と共に入り口から入ってきたのは、キルギス王女とクォーツ王女。

わたくしに抱き着くミュゼ王女を見て、お二人はソファの両側を陣取りぎゅうつと抱き着いてくる。

可愛いその行動に笑みがこぼれるが、身動きが取れない。

「キルギス王女、クオーツ王女、どうされました？」

「ネフェリアさまと一緒にいいです！！」

「シーガルお兄さまだけズルイです！！」

口々におっしゃるのは、先ほどのミュゼ王女と同じ内容で。

そつと背後に立つシルフィを仰ぎ見て、思わずため息をついてしま
う。

わたくしだって、シーガル王子との同居よりも、この幼い方たちと
の同居の方が良いのだから。

「こら、おまえたち。ネフェリアさまを困らせるんじゃない」

かけられた声に振り向けば、そこにはシーガル王子の姿。

いつもは大好きな長兄の姿に飛びつく幼い方たちも、今日はツーン
と無視をして、なおぎゅうぎゅうとわたくしにしがみつく。

「おや、嫌われてしまいましたね、兄上」

どこか面白そうに言いながら入ってきたのは、ベアーズ王子。

その手には、ツァイス王女とブライアン王子の手が片方つつ繋がれ
ている。

今日も休みなのであろうベアーズ王子は、今朝の来訪時と同じ、王
族の簡易衣裳に身を包んでいた。

朝食前の時間に勅令を携え来訪したベアーズ王子は、朝食後、シー
ガル王子の荷物を運びこむために少々人の出入りが多くなり、迷惑
をかける、と頭を下げた。

詳細は追って相談したい、と嬉しそうに告げ、呆氣に取られて反応できなかったわたくしをおいて、いったん下がっていったのだ。

欠片の可能性すら考えていなかった内容に、理解が追い付くはずもなく、何とか侍女に伝えるのが精一杯だった。

それでも、朝食を摂る頃には状況を理解し指示を出せるほどには思考も回復し、同時に無視できない勅令として出された内容に、溜息をついたのだった。

「申し訳ございません、ネフェリアさま。妹たちがお邪魔を」

いまだにシーガル王子を見ようともしない幼い方たちに苦笑しつつ、正面に立ちわたくしに謝罪するシーガル王子。

一妾妃にためらいもなく頭を下げる第一王子に、こちらが溜息をつきたくなる。

「お気になさらないください、シーガル王子。ツアイス王女もブライアン王子もようこそ。こちらでお座りになりませんか？」

じつと、わたくしに抱き着く3人の王女たちを見る2人に声をかければ、嬉しそうに頷いて駆け寄ってくる。

躊躇いもなく外された両手に、ベアーズ王子はやれやれ、と苦笑した。

「ネフェリアさま、わたしたちもこちらで休ませていただいてもよろしいですか？」

「もちろんですわ、ベアーズ王子。シーガル王子も、そちらにお掛けください」

「にいさまたちはダメです！！　ネフェリアさまはミュゼたちですっっ」

正面のソファを勧めれば、抗議の声はわたくしの胸元から上がった。わたくしに抱き着いたまま顔だけを兄王子たちに向け、まるで仔猫が威嚇するようにフーッと声を上げるミュゼ王女。

わたくしにしてみればただ可愛らしいだけのその姿に、シーガル王子もベアーズ王子も困り顔だ。

普段は決してそんな我儘を言わない一番下の妹姫に、どう対応していいのかわからないのだろっ。

「ミュゼも、ネフェリアさまといつしょにすみません！！」

「ミュゼ、だから・・・」

「シーガルおにいさまキライッ！！」

なんとか宥めようと声をかけるが、再び顔を背けてしまっミュゼ王女。

それに同調するように、ツァイス王女やブライアン王子も顔を背けてしまっ。

「兄上、諦めた方がよろしいですよ？　ネフェリアさまと2人きりで生活なさりたい気持ちもわかりますが・・・」

「ベアーズ！！」

クスクスとからかうように声をかけるベアーズ王子を、シーガル王子は慌てて止める。

「シーガルにいさま、ミュゼもいつしょがいいですっ」

「クォーツもいつしょがいいです」

『いいです！！』

ベアーズ王子の言葉に、反応して声を上げる幼い方たち。
内容は理解できなくても、ベアーズ王子が味方に付いたことは分かったのだろう。

わたくしに抱き着いたまま言う我儘に、シーガル王子は困ったように、ベアーズ王子は楽しそうに笑う。

「父上の許可をいただきなさい。父上が良い、とおっしゃれば問題は無い」

「ネフェリアさま、よろしいですか？」

「ええ。陛下のご命令に、どうしてわたくしが否を申せましょうか」

にこりと笑えば、幼い方たちの顔が輝いた。

「おとうさまのとき、いつてきます!!」

『いつてきます!!』

勢いよくわたくしの膝から飛び降りたミュゼ王女に続き、クオーツ王女たちもソファを降りて扉から駆け出ていく。

「ネフェリアさま、失礼いたします」

一目散に駆けていく幼い方たちの後を追うためにベアーズ王子も出ていけば、居間にはシーガル王子とわたくし、そしてシルフィだけになる。

まだ、宮中は騒がしい。しかし、その喧騒もどこか遠く。この部屋だけ、どこか別の空間のように静かになった。

「シーガル王子、どうぞお掛け下さい」

先ほどからずっと立ったままのシーガル王子に声をかける。

「シルフィ、悪いのだけれど、お茶の用意をお願いできるかしら？」

ばたばたと準備に追われ、こちらにまで手が回らないであろう侍女たち。

それを証拠に、いつもは来客を告げに来るのに、今日は一度も来ていない。

あれだけの方たちが単身ここまで来たのも、そのためだろう。

わたくしの言葉に、この場から離れることを躊躇うシルフィ。

そんな乳姉に、笑ってみせた。

「冷たいものがいいわ」

「・・・わかりました。いつてまいります」

シーガル王子に一礼して出て行くシルフィを見送り、視線をシーガル王子に合わせる。

ふわりと、風が遊ぶ。

「一体何を、お望みですか？」

国王陛下の書状には、シーガル王子の居を星の宮こぎやうに移す、としか記されていなかった。理由も何もなく、ただ決定事項として綴られていた。

その理由を、知りたかった。

第八章 三話／陽神の祈り

ふわふわと降る雪を眺めながら、星見の間で夜の祈りを捧げる。
暖かった昼間の陽気が嘘のように冷え込み、先ほどから雪が舞いだした。

一日の無事を感謝する、夜の祈り。
しかし、今日ばかりは素直に感謝できそうになかった。

「これで、雪は最後だと・・・」

隣で祈りを捧げるシーガル王子の声に、水たちが気まぐれで知らせた言葉を、上手く聞き取ったらしいと知った。

「ええ。今年は、この雪で最後だそうですわ。いつもより、少ないのですか？」

「はい・・・。普通なら、もう1週間は降り続けるのですが・・・」

困惑気味のシーガル王子。

例年よりも早い雪の終わりに、何か良くないことがあるのでは、と心配している。

「雪解けで芽吹く、自然の草木たち。枯れた地に流れる、雪解けの水の恵み。荒野を潤す、大地の恩恵」

「それは・・・？」

わたくしの言葉に、理解が追いつかないと待ったをかけるシーガル

王子。

自然たちの加護をうまく制御できない陽神シーガルを導くのが、今回の同居に求められている月神わたくしの役目。

先日の水の神殿での一件で、正式にわたくしに師事することが決まったのだという。

この冬が終われば、春、大地の芽吹く季節になる。

それまでに、何とか陽神の力を安定させ、少しでも国土の安定を図りたいという。

荒野が広がりつつある大地に、恵みを。

それが、昼間シーガル王子から聞かされた、今回の同居の“目的”だった。

国王陛下や宰相閣下の賛同を得ていたとはいえ、勅令という強硬手段を取ったことを詫びられた。

どのような手段であったにせよ、“陽神”として“月神”を求められれば、わたくしには断るという選択肢は無い。

気にすることではないと告げれば、どこか納得しかねる様子で苦笑された。

「例年よりも早い冬の終わりは、それだけ大地に恩恵をもたらすということ。乾いた土地には、この雪解けの水が何よりのもの。徐々に潤う大地に、草木の恩恵を願えば、そこは豊かな土地に変わりましょう」

少しずつ、その力を理解していただくために、日に三度の祈りは一緒に行うことにした。

そこで、つど必要なことを説明し、自然とその力のあり方を身に付けてくだされば、と思う。

「では、わたしは草木に願えば良いのですか？」

「いいえ。まずは、水の守護たちに感謝を。次に、大地を潤して欲しい、という願いを。そして、大地の守護たちに祈りを。水を吸収し、その地を潤して欲しい、という祈りを」

陽神の力をもつて、自然の加護を配る。

それは、難しいことではない。

ただ、意識して願うだけで良い。

「何事も、順序があるのですね・・・」

「はい。正しく自然たちの加護を配るには、その時々に応じた守護を正しく理解せねばなりません。先ほどシーガル王子がおっしゃられたように、今、草木たちに願っても、芽吹く大地が無ければ意味を成さないのです」

だから先日のように、水を被ることになるのだと笑う。

「水の守護様方に感謝を。荒野を潤すだけの雪解けが頂けますように」

シーガル王子から発せられる、陽神の力。

水たちに届けられた、祈りと願い。

荒野に配られた水の加護を、調整するのが月神であるわたくしの役目。

多すぎたはいけなから。少なすぎたはいけなから。その加護を、この身に受ける。

願うのは、大地の安定。豊かな自然が息吹く土地。
民の安寧を思い、少しでも多くの安定を願う。

こうしてシーガル王子と並んで祈りを捧げれば、陽神の力がどんな
ものかが良くわかる。

神話になって久しい、陽神と言う存在。

繁栄をもたらす光の守護と、太陽の加護を頂くその存在。

月神^{わたくし}の半神。

知ってしまえば、認めてしまえば、驚くほど違和感無く馴染んでし
まった。

そこに在るのが当然のように、受け入れてしまった。

そして、その存在に、歓喜すら覚えてしまった。

第八章 四話／雪景色の中で

降り積もる雪に覆われた星見の間。

テラスに出ることすら叶わないほどに積もった雪に、朝の祈りを外で行うことを諦め、窓を開け放った。

「これでは、王女さま方のお引越しは明日以降に延期ですね」

昨日、国王陛下の許可を頂くと王宮へと戻った幼い方々は、その日の内にお戻りにはならなかった。

代わりに、夕食後に届いた1通の書状。

差出人は、王妃陛下他妾妃の方々。幼い方たちの、母親からだったわが子たちの我俣を詫びる内容のそれに、許可は下りなかったのだろっ、と思ったのだが・・・。

「申し訳ありません、ネフェリアさま。妹たちが我俣を・・・」

わたくしさえ良ければ、一緒に暮らしてやって欲しい、と続く内容に、シーガル王子とともに我が目を疑った。

その身に役職を持たない幼い方々は、後宮に部屋を持ち暮らしている。

日々を王族としての教養を身に付けるための勉強と、空いた時間はここで遊んでいた幼い方々。

生活の拠点をこの離宮に移したところで、何の弊害も無い。

むしろ幼い方々にとっては、勉強をここで出来た方が移動時間を割

かなくとも良い分、時間を有効に利用できることになる。

母親たちにとつても、距離のある離宮に毎日通うよりも、居をこちらに移したほうが安心、ということらしい。

「ここでの暮らしを、わたくしと共に、と望んで下さっているのですもの。嬉しいことでございますわ」

だから、気にしなくてもいい、と告げる。

正直なところ、シーガル王子と2人きり、というのは避けたかったので、ありがたい。

それとなく確認した所、どうやら先日の話はまとまっていたようで、わたくしの立場は、エシユロン国王陛下の妾妃ではなく、エシユロン国王太子妃になっている。

もつとも、正式に婚姻を結んだわけでもなければ、諸外国に知らせたわけでもない。

ただ、エシユロンの国王陛下と王妃陛下、宰相閣下と、祖国オルフエウスの父王と母王妃、宰相と神殿祭司長が知っているだけらしい。

落着けば大々的に、と言われたが、外堀から埋められているような状況は歓迎していない。

一番の問題は、シーガル王子に嫁ぐのが嫌ではない、わたくし自身の心。

「今日の雪が最後であるなら、明後日にはお引越しも叶いましょう。それよりも、シーガル王子。まずは、水たちに感謝を。そして、大地に願いを。祈りを捧げましょう?」

陽神の力に呼応する自然の守護たち。

自身を使う配り手に我先にと応える守護たちは、確実に加護を与えていく。

廃退し荒れる大地を活性化し、豊かな実りをもたらしていく。

受け皿^{わたくし}だけでは叶わない、守護の活性化。

「水の守護たちよ、その加護をもって荒野を潤おし土壌として欲しい。地の守護たちよ、その加護をもって土壌とし、豊かな大地を築いて欲しい」

口に出すことによつて、的確に祈りを捧げるシーガル王子。

その祈りに応じるように、水たちが喜び笑う。
その祈りに答えるために、大地は話し掛ける。

「雪解けの水、豊かな大地。願わくば、加護の多い、豊かな土壌。人々の暮らす、緑の地」

行き過ぎた加護を受けるために、シーガル王子の隣で無言で捧げる祈り。

バランスの取れはじめた加護に安堵する。

「ネフェリアさまが付いてくださると、守護たちがよく語りかけてくれます。以前のような暴走も無く、安心して祈ることができます」

顔をあげ、わたくしを見て言うシーガル王子。
真っ直ぐに見つめられて、鼓動が跳ねる。

「わたくしは月神ですもの。多すぎる力をわたくしが受けることによつて、陽神の力が安定するのです」

だから、守護たちも安心して語りかけるのだ、と伝えれば。

「ネフェリアさまのお隣は、暖かで心安らぐのも、そのためですか？」

真剣な瞳で、問われる。

「半身たる存在ですもの。穏やかにいられるのも道理ですわ」

ニツコリ笑って答えるのは、建前か本音か。
自分でもわからないけれど。

ただ。

シーガル王子の傍らは、とても居心地が良いと。

まだ、口に出すことはできない。

第八章 五話／変わりゆく日常

穏やかに過ぎる日常。

自然に囲まれたこの星の宮で過ごす日々は、わたくしにとって理想だった。

自然たちの加護を身近に感じ、憂いなく過ぎていく時間。

幼い方々が元気に駆け回る、かけがえのない時間。

月神としての役割を果たす、充実した時間。

しかし、今後はそんな時間を過ごせそうにはない。

不安と期待。

相反するそんな心を隠し、声をかける。

「政務はよろしいのですか？」

目の前で優雅にお茶を飲むシーガル王子に問う。

朝の祈りを終わらせ、朝食を取り、さて今日は、と護衛たちと話している時に、何故かその場に留まるシーガル王子に疑問を覚えた。

時期国王として政務を執る必要があるはずだが、この宮で、それも居間で一緒にお茶を楽しんでいるのである。

わたくしが祖国オルフェウスでそうであったように、シーガル王子も時期国王として、政務に携わっているはず。

にもかかわらず、この宮から出ていく様子がない。

わたくしの質問はもったもなものはずなのだが……。

「ああ、今日、明日は休みなのです。もともと、この雪の時期の政務は多くはないので」

雪に閉ざされるこのエシユロン国では、この時期は特別何も問題が起きなければ領地にこもって雪解けを待つ。

それは王族とて例外ではなく、基本は王宮から出ることは無いという。

民も臣下もそうであれば政の必要はない。

よって、政務を執る必要はない、とシーガル王子は言う。

「そうでしたか。出すぎたことを申しました」

少々の落胆を隠し、シーガル王子に軽く頭を下げる。

できれば、政務に出ていただきたかった。

「とんでもございません。お気遣いありがとうございます」

優しく笑われるシーガル王子。

以前はどこか堅かった雰囲気も、自身が陽神であると自覚した頃から柔らかくなった。

それだけ心に重い枷を負っていたという事。

その枷が外れたのは喜ばしい。

でも・・・

「こうして、ネフェリアさまと同じ時間ときを過ごせて私は幸せです」

正面から見つめられ、そんな言葉を紡ぐシーガル王子。

自身の犯した愚行から、わたくしにどこか遠慮した態度を取るシーガル王子は、それでもこうしてストレートな言葉をわたくしに寄せ

る。

本気を滲ませたその瞳に見つめられ、鼓動がはねる。
決して、それを悟らせることはしないけれど。

「わたくしも、こうしてご一緒できて嬉しく思います」

社交辞令として返す言葉。

につこりと笑って、本音を隠す。

「でも、明日からは騒がしくなりますから、こうしてネフェリアさまとゆっくりできるのも今だけですね」

くすりと笑うシーガル王子の手には、一通の手紙。

「それは？」

「今朝、キルギスたちから届いた手紙です」

そう言いながら、その手紙をわたくしに渡すシーガル王子。
躊躇いながらも、それに目を通す。

「まあ・・・」

思わず漏れたのは、苦笑。

そこに綴られているのは、シーガル王子への抗議と文句。
可愛らしい内容のそれに、自然と笑んだ。

「雪はわたしの嫌がらせらしいです」

まったく、言いながらも優しい顔のシーガル王子は、兄弟たちを本当に可愛がっているのだろう。

「では、ご機嫌をなおしていただくために、王女さま方のお部屋を整えなければなりませんわね。キーツ、アン又たちを呼んでくれる？」

付け足されていた、可愛らしい要望を叶えるために、侍女を呼ぶ。2階にあるわたくしの私室。

その近くに、幼い方々のお部屋を用意することに決めて。

「花庭に面したお部屋がよろしいですね」

手紙を覗き込んだシルフィが言う。

「そうね。これからの時期なら、美しい花々が一望できるわね」

大きな窓から階下を見下ろせば、そこは花庭。

風たちが運ぶ花々の香りも良く届く。

幼い方たちは、お喜びになるだろう。

「ネフェリアさま、お呼びですか？」

パタパタと軽い足音と共に入ってくる侍女たち。

わたくしがわざわざ呼ぶことなど滅多に無い事のため、どうやら驚かせてしまったらしい。

「お仕事中にごめんなさいね。王女さま方のお引越しが、明日に決まりそうなの。急で悪いのだけれど、2階の花庭に面したお部屋を全て片付けてほしいの」

2階の部屋は、全部で13部屋。

花庭に面した部屋が7部屋と、裏の林に面した部屋が6部屋。わたくしは、花庭に面した中央の一番大きな部屋を私室としている。その正面、林に面した部屋を、シーガル王子の私室とした。シルフィは、わたくしの隣の部屋を使っている。

林側の一番手前を護衛たちの休憩室とし、その隣を幼い方々や護衛たちの着替えなどを置く部屋として使っている。

侍女や料理人、下女たちの部屋は1階の林側にあるそうだ。

人の出入りが激しくなれば、それだけ物が増える。

広く寂しかったこの離宮も、今では暖かい場所と変っていた。

「花庭に面したお部屋だけでよろしいのですか？」

メイサに聞かれて、ふと気づく。

「ブライアン王子は、お花よりも林の方がいいのかしら？」

よくよく考えてみれば、男の子の好みなどわからない。

わたくしの側には、シルフィしか居なかったし、幼い男の子との交流も今までなかった。

チラリと見れば、シルフィもわからない、と首を振る。

どうなのかしら、と侍女や護衛たちに目を向ければ、笑われた。

「ネフェリアさまにも、わからないことがあるのですね」

楽しそうに言うビルダー。

キーツも、横を向いて肩を震わせている。

「ええ。わたくしに兄弟は居ないし、まわりに男の子はいなかったの。キーツやビルダーなら、やっぱり林側がいいのかしら？」

真剣に聞いたのが、またおかしかったらしい。
声を上げて笑う護衛たちを、侍女が諫める。

「も、申し訳ございません、ネフェリアさま。シーガル王子も林側ですし、ブライアン王子もそちら側の方がよろしいかと」

何とか笑いを殺してキーツが言う。
横で、ビルダーも頷く。

「では、2階のお部屋全部片付けますわ。皆さまがたに選んでいたきましょう」

アンヌが言えば、メイサもナビスも頷く。

大変ではないかと思ったが、せつかくの侍女たちの心遣いを有難く受けることにして。

「キーツ、ビルダー。悪いのだけれど、手伝ってくれるかしら？」

邪魔な家具などを移動させるのに、男手が必要になるだろう、と笑った罰代わりに労働を言い渡す。

そんなことを頼まなくても、この護衛たちは進んで手を貸してくれるけれど。

「もちろんです、ネフェリアさま」

「お手伝いいたします、ネフェリアさま」

快く諾を返す護衛と。

「では、掃除道具を用意してまいります」

「私は、お部屋のカギを」

下女たちに指示を出しに行くメイサと、カギを開けに行くアンヌと。

「わたしも、お手伝いさせてください」

弟妹たちの事なのだから、と腰を上げるシーガル王子と。

「ココを片付けてから参ります」

居間の片付けに残るナビスと。

「では、行きましょうか」

「はい、ネフェリアさま」

シルフィを伴って。

本日の予定は、片付けに決めたのだった。

第九章 一話／お引越し

透き通るような青空の下で、雪解けに輝く大地を駆ける幼い方々。後に続く護衛たちを無視して、一目散に駆けてくるその姿は可愛らしい。

「ネフェリアさまー！！」

大きな声で呼ばれ、軽く手を振って答える。

そんなに駆けては危ないが、言っても聞き届けてはもらえないだろう。

大地の守護と風の守護たちに、幼い方々が転ばないように願い出る。

朝食のすぐ後に、あわてて飛び込んできた伝令。

幼い方たちの我慢の限界のため、すぐにでも引越しをしたいと言う。

乳母や侍女たちの制止を聞かず、果ては王妃陛下すら巻き込んだこの引越しは、荷物よりも先にご自身たちが単身乗り込んでくるという暴挙で幕を開けた。

「ミュゼがネフェリアさまのおとなりです！！」

「ツァイスはシルフィのお隣がいいです！」

「クォーツはミュゼの隣のお部屋を」

「私は、このお部屋をいただけますか？」

宮に入り、さて、お部屋を、と二階に上がって説明をすれば、王女

さま方は花庭に面したお部屋から好きなところを選ぶ。

階段を上がって、花庭側正面が空き部屋、奥に向かって、ツァイス王女、シルフィ、わたくし、ミュゼ王女、クオーツ王女、一番奥にキルギス王女となった。

「ブライアン王子はどうされますか？」

「わたしはシーガル兄上の隣の部屋を」

王女さま方の勢いに押され気味のブライアン王子。

隣に立つシーガル王子の部屋を確認し、その隣を希望した。

林側、階段の隣が護衛たちの休憩室、奥に向かって着替え置き場、シーガル王子、ブライアン王子、空き部屋が二部屋となる。

「では、荷物を入れてもらおう。邪魔になっではいけないから、下に行こうか」

部屋が決まれば、私物の運び込みをしなければならない。

一通りの家具はすでに揃っているため、着替えや備品などの小物や身の回りの物だけが、5人分ともなればそれなりの量になる。侍従や侍女たちが運び込む手はずになっていた。

後はナビスとニックに任せて居間に降りれば、そこには珍しいお客様様の姿。

「ソイド王子、ベアーズ王子。それに、セナリス王女まで・・・」

「突然の訪問、お許しください、ネフェリアさま」

「お邪魔しております、ネフェリアさま」

「このたびは、弟妹たちが我が儘を申しました」

ソファに座りくつろいでいたのは、年長の方々。

何の先触れもない突然の訪問だが、驚きはしなかった。
ここの方たちの突然の来訪には慣れてしまった。

「オマエたち・・・どうしたんだ？」

後から入ってきたシーガル王子に声をかけられるが、ニツコリ笑って無言の3人。

その視線の先は・・・

「王女さま方？　いかがなさいました？」

なぜか入り口で固まってしまった幼い方々。
いつもならば、兄姉の姿に嬉しそうに駆け寄るはずなのだが・・・？

「キルギス、ツァイス、ブライアン、クォーツ、ミュゼ。中に入っているらしい」

静かに声を出すセナリス王女。

その声に、ハッと我に返った幼い方々が、動く。

「逃げない」

ベアーズ王子の言葉に、回れ右、を実行に移そうとしていた幼い方々の行動が止まる。

——あらあら、これは大変ね。

どうやら、怒られることをしたらしい幼い方々。

自覚があるのだろう。

「ほら、こっちに来て座りなさい。わかってるんだろう?。」

柔らかい声音のソイド王子に促されて、大人しくソファに腰掛ける
幼い方たち。

いつもは真正面を見つめてキラキラしている瞳を陰らせ、俯いてしまっている。

—— いったい、なにをなさったのでしょうかね。

第九章 二話／威圧

事の成り行きを見ていれば、シーガル王子に促されてテーブル席に腰掛ける。

位置的に、全員のお顔が見える。

「あなたたち。どうして怒られるのか、わかるわね？」

横一列に並んで座る幼い方たちの正面に立つセナリス王女が声を発すれば、目に見えてビクつくミュゼ王女。

ぎゅうつと膝の上で握られている手は、可哀想なぐらい真っ白になっている。

「お父様やお母様・・・いいえ。国王陛下や王妃陛下、妾妃様たちまで巻き込んでワガママを言うだなんて、何をしているの」

「オマエたちは、陛下方に何を言ったんだ？」

視線さえ合わせることなく、見下ろすように言うセナリス王女とベアーズ王子。

その内容から、この星の宮に居を移すにあたって何かしらワガママを言ったのだと知る。

——でも、ね。

弟妹を叱る年長者、という雰囲気ではなく。

一国の王族としての言葉だが。
それでも・・・

「執務中の国王陛下の邪魔をして大声でワガママを言い、後宮を走り回り侍女たちに迷惑をかけ、妾妃様たちのお部屋に先触れもなく訪れ、王妃陛下の公務の邪魔をする」

「オマエたちのしたことは、王族として誉められることか？」

淡々と言うセナリス王女とベアーズ王子。

静かにそれを見守るソイド王子。

うつむき、必死で何かをこらえている幼い方たち。
そして、そんな弟妹たちを見守るシーガル王子。

——わたくしが、口を出すことではないけれど。

「この国がわたくしにしたことと、今回の王女さま方の行動。どちらが王族として恥ずべきなのでしょうね」

風たちの力を借りて、ほんの少しの威圧を込めてわたくしは言う。

「自国の王宮内で、自身の父親や母親の元を訪れ、年相応のワガママを言う。その、どこがいけないのでしょうか？」

まだ10にも満たない幼い方々が、そこまで我慢する必要などない。

「それよりも、勅令でもって王太子をこの宮に送り込む。そのことの方が、よっぽど恥ずべきでしょう」

わたくしがこの力でもってあらがう事を、考えなかったのでしょうか。

そう言つて、にこりと笑う。

「ネフェリアさま・・・」

慰めるように幼い方たちの周りを舞う風たちとは対象に、セナリス王女たちには威圧を与え続け。

シーガル王子の周りには、火たちが威嚇するようにパチパチとはぜる。

「それと、これとは・・・!!」

「おだまりなさい」

ぱしん、と。

セナリス王女の目の前で、炎が起こる。

———このような態度は、とりたくないのだけれど。

「王族としての態度と言うのならば。まずは、ご自身の態度を改めたらいかかが。貴方たちは、わたくしに意見できる立場ですか？」

ゆっくりと立ち上がって。

「こうして幼い方々には詰め寄るのに。どうして王太子殿下には意見しないのか」

ソファの前に立つ、3人の元へと歩を進める。

「そ、れは・・・」

「それは？」

顔色を無くすセナリス王女に対峙する。

「この国には、正式な婚約すら交さないうちから同居するという慣例でもあるのか？ それとも、わたくしは王太子殿下の慰み者ゆえに氣遣う必要はない？」

ほんの少し、怒っていたから。

普段ならば使わない言葉で、追いつめる。

「慰み者にすぎぬ女の宮に、大切な弟妹は置いておけないというのなら、はっきりとそう言えばよい」

本当は、違うことを知っているけれど。

気まぐれに囁く風たちが、本当のことを知らせるけれど。それには耳をふさいで。

「このような悪環境の中には大切な弟妹は置けないと。許可を出した国王陛下と、わたくしに手紙をくださった王妃陛下他王妃の方たちに、直談判すればいい」

風たちによって聴覚を塞がれている幼い方々には、こちらの会話は聞こえない。

「ネフェリアさま、違います。そうではないのです」

水の加護を受けるソイド王子は、この中であっても威圧されすぎることはない。

「何が違いますか？」

「わたしたちが怒らなければならないのは・・・」

セナリス王女からソイド王子に視線を移せば、詰めていた息を吐き出す音が聞こえた。

「国王陛下の執務室でワガママを言ったのも、後宮内を駆け回ったのも、妾妃様たちの元を訪れたもの、王妃陛下の公務の時間を邪魔したのも。すべて、王太子殿下がこの離宮に居を移したことに比べれば大したことではないでしょう」

ぴしゃりと言ったのける。

「まだ10にも満たない幼い方々のこの時期のワガママなど、どうして笑って済ませないのですか？」

風たちは言う。

国王陛下の執務など、ただの書類整理だけだと。

後宮を駆けたところで、誰の迷惑にもなっていないのだと。

妾妃の方々は、幼い方の訪問を喜んでいたと。

王妃陛下の公務は、雪のせいで中止になっていたのだと。

3人がここに来た本当の理由は、幼い方たちに、ここでの生活を諦めさせるためだと。

すべては、陽神に月神を与えるための画策だと。

——どこまで、シーガル王子はご存じなのでしょうね。

「それでも、わたしたちはこの子たちを叱らなければならないのです。勝手をした、この子たちを」

「わたくしとシーガル王子の時間を、邪魔させないためにですか？」

引かないソイド王子に言えば。

「ソイド?!」

シーガル王子の驚いたような声が重なった。

驚愕に見開かれるソイド王子とセナリス王女の瞳。

ベアーズ王子だけは、苦笑をその顔に乗せた。

「やはり、ご存じだったんですね」

「ええ。セナリス王女が国王陛下に進言し、この度のことを画策したことならば」

ベアーズ王子の言葉に、薄く笑って答える。

「そこまでされる気持ち、わからないのですが？」

そう言いながら、幼い方たちを守護する風たちを四散させる。

聞こえないわたくしたちの会話を心配げに見ている姿は、痛々しい。自分たちのワガママで、わたくしと姉兄たちが争っているように見えるのだと思い至った。

「ネフェリアさまっ」

セナリス王女の咎める声を見つめて、ソファの前にしゃがみこむ。
視線を幼い方たちに合わせれば、泣きそうに揺れる瞳。

——この方たちに、このようなお顔は似合わないわね。

第九章 三話／話し合い

両手をいっぱい広げて、ぎゅうつと幼い方たちを抱きしめる。

「ご心配なさらずとも良いのです。姉上さまたちは、皆様方をお叱りになるわけではありません」

ゆつくりと言葉を紡げば、腕の中でぴくりと反応する。

「ただ、ほんの少し、ご注意に來られたのです」

言い聞かせるように、ゆつくりと。

「ミュゼは、おとうさまのおしごとのじゃまをしました」

「王妃さまのお仕事の邪魔をしました」

「お母さまのお部屋に、突然お邪魔してしまいました」

「後宮の中を駆け回りました」

「侍女たちの注意を無視しました」

ぽつり、ぽつりと。

自分たちのしたことを話す幼い方たち。

きちんと、悪いことだと理解しているのだ。

「それが、悪いことだと、おわかりですか？」

神妙に頷くその姿は可愛らしい。

本来ならば、甘やかしていいことではない。

でも、きちんと理解しているこの方たちをこれ以上叱ることはした

くなかった。

国王陛下も、王妃陛下も、妾妃の方々も。もとより、この幼い方たちに対して怒ってなどいないのだから。

「では、迷惑をかけてしまった方々に、お詫びをしましょう。ごめんなさい、と御手紙を書きましようか」

体を離し、にこりと微笑んで告げれば。

「ここに住むことを許してくださった事のお礼も忘れるんじゃないよ」

隣から、シーガル王子の声。

同じようにしゃがみこんで視線を合わせる長兄の言葉に、幼い方々の顔が華やいだ。

「いつしよに、すんでもいいですか？」

それでも心配そうに聞くミュゼ王女。

他の方々も、神妙な面もちでこちらを見ている。

「もちろん。オマエたちと一緒に住めて嬉しいよ」

「一緒に、お菓子を作りましようね」

何も心配はないのだと告げれば。

とびきりの笑顔を見せてくださった。

メイサにレターセットをお願いして、幼い方々にテーブルへと移動していただき、冷たいレモネードをお出しする。
緊張で喉が渴いていたのである。幼い方々はそれを飲み干し、今は一生懸命手紙を書いている。

——さて、問題はこちらの方々ね。

正面のソファに座る年長者3人。
さて、どうしたものかと隣に座るシーガル王子と顔を見合わせる。
どうやら、シーガル王子はわたくしの意図に気付いているようだ。

「オマエたち、一体何をしたかったんだ？」

呆れ気味のシーガル王子の声。

「そもそも、本当に、オマエたちはあの子たちを叱りに来たのか？
陛下方が許可を出したのは知っているだろう？ ベアーズは、それに付いて行ったのだらうに」

なのに、どうしてこうなるんだ、とシーガル王子は言う。
そう、きちんと許可をいただいている幼い方々を“今更”“ここ”で叱らずともいいのだ。
本当にダメならば、いくらあの方たちが我儘を言っても、許可など出されるはずがないのだから。

「叱りつけるのは、大義名分です。陛下方がお許しになった事を、私たちが覆すにはそれなりの理由がある。それには、王族としての

行動を責め、責任を取らせるのが一番納得できる」

「ベアーズ!!」

セナリス王女の声に、ベアーズ王子は首を振った。

「無駄ですよ、姉上。考えずとも、おかしい行動をとっているのは私たちです。ネフェリアさまが仰ったように、あの子たちの行動を責めるのならば、私たちはその前に王太子殿下の行動を責めなければおかしい」

「・・・ああ、そうですね。だから、ネフェリアさまはお怒りになられたんですね」

ベアーズ王子の言葉に、ソイド王子も納得を見せた。

「どうして？ 私たちは、執務妨害をしてまで我儘を押し通したあの子たちを叱りに来た。兄上の事は、関係・・・」

言葉の途中で、何かに気付いたセナリス王女は黙り込む。

「気付いたか？ 私はこの国の王太子だ。王位継承権第一位の者としての務めがある。にも拘らず、陽神としてネフェリアさまの師事を仰ぎたいと勅令でもってここに居を移した。言いかえれば、王太子としての政務を放棄して陽神としてここに住むことを国王陛下に我儘を言っただけ強行したんだ。今回あの子たちのしたこと、何の違いがある？」

あの子たちよりも、ずっと責任ある立場にある私がそれをした、とシーガル王子は言う。

「だから、先ほどネフェリアさまは・・・」

「ええ。言いましたでしょう？　『どうして王太子殿下には意見しないのか』と」

シーガル王子がただの王子であつたのなら問題は無い。

しかし、シーガル王子は次期国王。国王陛下に次ぐ重責を負う身にある。

「国を巻き込んだ王太子殿下の移住と、両親を巻き込んだ我儘。王太子殿下の行動と、一王族にすぎない幼い方々の行動。王族としての如何を問うのであれば、先に責めるのは王太子殿下に対してでしょう」

わたくしの言葉に、セナリス王女は黙り込む。

先に、シーガル王子の行動を責めていれば、わたくしは何も言わなかった。

しかし、セナリス王女は、ソイド王子は、ベアーズ王子は、それをしなかった。

「わざわざ、ネフェリアさまが『王太子殿下』と呼んだんだ。それぐらい気付きなさい」

押し黙ったセナリス王女に、シーガル王子は言う。

「ベアーズも。気付いたのだったら止めなさい」

わたくしが『王太子殿下』と呼んだことで、その意図に早々に気付いていたベアーズ王子を軽く責める。

「誤解を敢えて解かなかったのはわたくしです。それどころか、ヒ

ドイ言葉を使いました。申し訳ありませんでした」

わざと誤った認識のまま会話を進めたのはわたくし。

それどころか、真意を見ないフリをして、あらぬ方向へ繋げた。

自分の非は認めているので、謝罪する。

少々怒っていた、で済まないであろう内容だったのは自覚している。

「いえ、こちらこそ、申し訳ございませんでした」

静かに頭を下げるソイド王子。

セナリス王女も、頭を下げる。

「さて、オマエたち。さっきの事、詳しく聞いてもいいか？」

やっと体から力の抜けた3人の体がビクリと揺らぐ。

「セナリスが、何を画策した？」

顔色悪く硬直するセナリス王女と、諦めたのか静観するソイド王子と、その顔に苦笑をのせるベアーズ王子。

「シーガル王子があの日、ソイド王子にご相談しましたでしょう？
その内容を今度はソイド王子がセナリス王女に相談し、セナリス王女が陛下方に進言し、それを勅令として実行させた。ベアーズ王子は、セナリス王女が陛下方に進言する場に居合わせた」

口を開かない3人に代わって言えば、シーガル王子の視線はわたくしに向く。

「・・・どういう事でしよう？」

「この同居は、セナリス王女のご提案、という事ですわ」

ニツコリと笑って告げれば。

大きなため息とともに、がくりと頂垂れるシーガル王子。

シーガル王子の同居の“目的”は、陽神としての力の制御を月神から習うため。あくまでも、師弟の関係。

セナリス王女の同居の“目的”は・・・。

第九章 四話／思惑

ニコニコと笑顔のベアーズ王子とソイド王子。視線を逸らすセナリス王女。

正面で仏頂面のシーガル王子。

「オマエたちは、私とネフェリアさまの仲を進展させようとした、と？」

常よりも低い声音のシーガル王子。

「この機会に、と思ったのですよ。父上や宰相も賛成でしたよ」

笑顔を決やさぬベアーズ王子。

「より身近に居た方が、兄上のお力も安定すると思ったのです」

あくまで神官としての立場を貫くソイド王子。

「我慢はお体によくないでしょう・・・」

視線を逸らしたまま、ポソリと言うセナリス王女。

今回の同居について、裏の思惑を持っていた弟妹3人にシーガル王子は言葉を無くす。

国益を考え許可を出した国王陛下と宰相閣下とは違う、兄思いのそれ。

強く言えないのは、その心がわかるからか、凶星をさされているか

らか・・・。

わたくしが側に居ては話しづらだろう、と若い方々の座るテーブル席へと移動した。

それなりに距離があるため普通ならば聞こえないシーガル王子たちの会話は、風たちが何の気まぐれか届けてくれていた。

「ネフェリアさま、おてがみできました！」

最後のミュゼ王女が書き終わり、それを見せてくださった。

お一人づつ書くのではなく、大きめの紙に順番に全員が少しずつ綴ったそれは、大小様々な文字が踊り賑やかだった。

邪魔してしまった事への謝罪よりも、許可をくれた事へのお礼の方が多いのは幼さ故だろう。

それでも一生懸命に綴られた文字は、この方たちの心情を如実に表している。

「じょうずに書けましたね。では、これを国王陛下に届けていただきますよね」

そう言って手紙を返せば、クォーツ王女が受け取り、丁寧に折って封筒に入れる。

封筒の表には、ブライアン王子の文字で『父上へ』と記されていた。

「ネフェリアさま、お荷物の運び込みが終わりました」

タイミングを計っていたメイサが声をかけてくる。

意識を外へ向ければ、慌ただしかったのが静かになっていた。

「ありがとう、メイサ。皆はもう本宮へ戻ったのかしら？」

「兵と女官は戻りましたが、侍女たちはお部屋で待機しております」

荷物を運んできたのは、星の宮の周りを警護している兵たちと、本宮の女官たち。それらの指示をしていたのは、各専属の侍女たち。

「では、あまり待たせてはいけないわね。さあ、お部屋に参りましょうか」

部屋の確認に幼い方々を促せば、嬉しそうに席を立つ。

手を取り合って駆け出す幼い方たちを、慌ててメイサとキースが追いかける。

今まで手伝っていたのであろうナビスとニックは居間で待機するようだった。

既に階段を駆け上がる幼い方々の後をゆっくりとシルフィと一緒に追いかける。

「嬉しそうですね」

「わたくしが？ それとも、あの方たちが？」

クスリと笑うシルフィに、問いかける。

「両方です。ネフェリアさまも、あの幼い方たちも、とても嬉しそうですね」

「そうね。わたくしは嬉しいもの。あの幼い方たちも同じ気持ちだといいわね」

ずっと、弟妹に憧れていた。

可愛いあの方たちを見て、諦めていた弟妹をもう一度夢見た。

思わぬ形で叶ったそれに、浮かれている自覚はあった。

「楽しい毎日になるといいですね」

義姉あねの顔をして柔らかに笑うシルフィに、

「とても楽しみだわ」

義妹いもつとの顔で答えた。

今回の同居にあたって、侍女を増やすことはしなかった。

シーガル王子も自身の侍従や侍女をこの宮に入れることはしなかったし、アンヌたちも特に人手を欲しがらなかった。

しかし、幼い方たちが此処に住む、となればまた話は違ってくる。10にも満たない方々は、普通であればまだ乳母を傍らに置く年齢だ。

しかし・・・

「本当に、よろしいのですか？」

「はい。王女様方が良い、とおっしゃいますので。何事かあれば、すぐにお願いに上がります」

シルフィとともに2階に上がれば、後宮の侍女頭とアンヌの姿。

小難しい顔の侍女頭に、アンヌが苦笑で返す、という場に出くわした。

「何事がありましたか？」

「ネフェリアさま。いえ、皆様方が、乳母様や侍女もいららない、とおっしゃいましたので……」

頭を垂れて礼を取る侍女頭に頷くことで答え、アンヌに問えばそんな返事が返ってきた。

「それで良いのかしら？」

せめて、乳母だけでも側に置いた方が良いのではないか、と言えば。

「そろそろ乳母様を離す時期ではありましたが、それは問題ないのですが……。さすがに、専属侍女の1人も付けない、というのは」

お世話をする者も必要でしょうし、と侍女頭は言う。

本来、王族の世話をするのは侍女の役目である。

お茶や食事の支度、着替えの手伝い、入浴の世話から話し相手まで、主となる王族に直接触れることの出来るのが侍女。

着替えの支度や部屋の掃除、茶器の用意や入浴準備など、細々とした雑務を行うのは女官。

洗濯や宮の掃除、食事の下拵えなどの仕事は下働きと分かれている。この星の宮には女官は居ないため、本来の女官の仕事を侍女3人が担っていた。

人が増えれば、それだけ仕事も増える。王族のほとんどが侍女3人しか居ないこの宮に住むことになるのだ。侍女頭が渋るのは無理もないことだろう。

「王女さま方は何と？」

「アンヌたちが居るから、他はいらない。」と

そうはつきりと言われてしまつては、それ以上何も言えない、と困つていたのだと言つ侍女頭。

「ですので、しばらくはこのままだと思ひまして。どうしても手が足りなければ追々」

一度、このままの人数でやってみると言つアンヌ。

この宮の管理一切を取り仕切っているアンヌがそう言つのであれば、わたくしが口を出すことではない。

「そうね。アンヌに任せるわ。必要ならば女官を入れてもいいでしょうし」

わたくしに気兼ねして使用人を増やさない、という選択はしてほしくないのです、必要に応じて増やせばいい、と言つに止めて。

「ネフェリアさまー！！」

「シルフィーー！！」

お部屋から大きな声で呼ぶ幼い方たちの所へ向かった。

第九章 四話／思惑（後書き）

ベアーズ王子の行動は、小話集『同居の舞台裏』をご覧ください。

第九章 五話／落ち着く先は・・・（前書き）

アルファポリス様のファンタジー小説大賞にエントリー。
応援宜しくお願いいたします！

期間：H23・9・1～H23・9・30

第九章 五話／落ち着く先は・・・

「もう一度、お伺いしても・・・？」

決して聞こえなかったわけではないけれど、信じられなかった。

「わたしも、こちらで生活させていただきたいのです」

ニコニコと笑顔のベアーズ王子の言葉に、今度こそ思考が停止した。

幼い方々のお引越しも無事終了し、話し合いの終わった年長者たちの待つ居間に戻れば、仕事のあるセナリス王女とソイド王子は既に退席した後だった。

ベアーズ王子とシーガル王子はソファに留まり、何事が相談していたのだが・・・。

わたくしの姿を認めると、ベアーズ王子はそう口火を切ったのだった。

「ベアーズ兄上も一緒ですか？」

嬉しそうに言うブライアン王子。

「ああ。ネフェリアさまがお許しくだされば」

そんなブライアン王子に、ベアーズ王子は伺うようにシーガル王子

を見ながら言う。

表情の無いシーガル王子は何も言わないが……。

「わたくしは、構いませんが……。ベアーズ王子は、お仕事がいりますでしょうか？　ここからでは、色々とご不便では？」

近衛騎士の任に就いているベアーズ王子は、その大半を王宮で過ごしているはずだ。

寝起きも騎士たちの官舎でしている、と聞いていた。

「わたしは近衛騎士です。その任は、王族を守ること。今は国王陛下付きですが、今後は王太子殿下下付になります。ですから、こちらで一緒に過ごしていただいた方が都合がよいのです」

だから何の問題も無いのだと言われては、わたくしもそれ以上言うことは無い。

特に反対する理由もなければ、不都合があるわけでもない。

「でしたら、わたくしに反対する理由などございませんわ」

にっこりと笑って、諾を返せば。

「ありがとうございます、ネフェリアさま。では、本日中に荷物の運び込みをさせていただきます」

ベアーズ王子も、にっこりと笑って言う。

その顔に、なにやら含ませて……。

シーガル王子は、何かをご存じなのだろう。

いっこうに変わらな表情と、先ほどこら一言も発しない声。

嫌がっているようにも、喜んでいるようにも取れるその態度から、

真意を見つけることは出来ない。

——嵐、到来かしら？

「本当に、大家族になってしまいましたね」

「ええ。楽しそうではあるのだけれど。自然たちが上機嫌なのが気になるわね」

昼食が終わり、幼い方々にねだられるようにやってきた中庭で。

シーガル王子とベアーズ王子と一緒に駆け回る方々を眺めながら、シルフィとお茶をしていた。

「コア、ドジャー。一緒にいただきますしろう？」

お茶受けに、と料理人たちが用意したのはクッキー。バターの風味が美味しいそれに護衛たちを誘えば。

「ありがとうございます、ネフェリアさま」

「いただきます、ネフェリアさま」

甘い物に目がない護衛たちは、嬉しそうに席に着く。

「職務放棄ですよ、みなさん」

給仕に付いているナビスが笑う。

それでも、手は休めることなく護衛たちのお茶を用意していて。

「ネフェリアさまがお誘いくださったからいいんです」

コアがさっそくとばかりにクッキーに手を伸ばす。

「そういえば、護衛は増やすのですか？」

「ああ・・・。カイザス隊長は、このままでも良いようなことは言っていましたよ。でも、もともと王女さま方付きの護衛たちがあぶれるからどうするか、とか言っていましたね」

シルフィが問えば、ドジャーから気のない返事。

現在わたくしに付いている、カイザスが隊長を務める隊だけで十分と考える者とそうでない者の衝突があるのだろう事が伺える。

王族の護衛を務める近衛騎士は名誉ある仕事。それに誇りを持っている者が大半だろう。

その者たちから仕事を取り上げるわけにもいかず、隊長であるカイザスも頭が痛いことだろう。

「ベアーズ王子も近衛騎士の任にお就きでしょう？ 責任ある立場なのでは？」

国王陛下付きだったというベアーズ王子。

第三王子殿下という地位を考えれば、自身こそが守られる立場にある。

にも関わらず、一騎士として働いていたのであればそれなりの立場だったのではないか、と思ったのだが・・・。

「ベアーズ王子は、近衛第一騎士隊の隊長です」

ドジャーにさらりと告げられた事実、シルフィと顔を見合わせる。

「そのような立場の方が、ここで暮らしていても良いのかしら・・・？」

諸々の仕事もあるだろうに、と言うわたくしにドジャーが言うには、ベアーズ王子の第一騎士隊は第二騎士隊と一緒に護衛に付いており、第二騎士隊の隊長が統括して指示を出しているため、ベアーズ王子が抜けても問題は無いのと言う。

それよりも、護衛を側に置きたがらなかったシーガル王子に、弟とはいえ護衛を付けることが出来たことの方がよほど大事なのだそうだ。

「それだと、やはり近衛隊の方々が増えますかねえ」

せっかくシーガル王子に護衛を付けるチャンスなのだから、とシルフィが言ええ。

「どうでしょう？ ベアーズ王子も護衛対象のシーガル王子も、カイザス隊長と張るぐらいお強いですからねえ」

オレも勝てません、とのんきに言うコア。

「カイザス殿と同じくらい、ですか？」

一度手合わせし、その強さを知るシルフィが目を見張る。

あの時はシルフィが勝ったが、カイザスも相当の強さだった。そのカイザスと同じぐらい、というのであれば・・・。

「護衛は、いらないわね」

側に護衛を置きたがらないのも道理で。

「その方が良いです。近衛の方々は嫌いです」

内緒ですよ、と笑いながら言うナビスに。

「あゝ、オレも嫌かな」

「同感」

合わないんだよね」と言うコア。

エリートだしな、と苦虫を噛み潰したようなドジャー。

「心配しなくても、ベアーズ王子から却下されたぞ」

突然二人の後ろから響いたのは・・・

「「げ、隊長・・・」」

苦笑を浮かべる、カイザスだった。

「お邪魔いたします、ネフェリアさま」

「ようこそ、カイザス隊長。ご一緒にいかがですか？」

座ってお茶を飲むコアとドジャーの頭を叩きながら挨拶をするカイザスに笑って席を勧めれば、そそくさと席を立つ護衛二人。

しっかり手にクッキーを持つ二人に呆れながらナビスがお茶を用意

すれば、カイザスは席に着いた。

「何かあったのですか？」

いただきます、とお茶に口を付けるカイザスに、シルフィが問う。
護衛たちの隊長とはいえ、カイザスがここまで来るのは珍しい。

コアもドジャーも知らなかったのか、首をかしげている。

「いえ、何か、というわけではないのです。この宮の護衛体制をベアーズ王子と相談したかったのですが・・・」

今は無理そうですね、と中庭を見て笑う。

「え、隊長。近衛隊はこないんでしょう？」

「ああ。近衛隊の護衛はベアーズ王子が却下された。しかし、こちらには王女さま方もいらっしゃるだろう？ このまま２人体制ではどうなんだ、とのお達しかな」

カイザスと同じぐらい腕の立つベアーズ王子とシーガル王子だけならば問題ないが、ここには幼い方々も居る。

それを問題視されては、カイザスだけでは処理きれないのだろう。

「三人体制ですか？」

「本来は、お一人に付き二人だ」

「足りないじゃないですか」

「邪魔です・・・」

ビルダーの問いにカイザスが答え、コアが指折り数えて足りないと言い、ナビスがポツリと漏らす。

「邪魔って・・・」

「ま、邪魔だわな」

ひでえ、と言うコアに、うんうん、とビルダーが頷く。

「だから、それをベアーズ王子に」ご相談したかったんだ」

人の話をきけ、と言うカイザスに、シルフィと笑う。

穏やかな陽気の中で笑う幼い方々の声に、自然たちはこの同居を祝福していた。

第九章 五話／落ち着く先は・・・（後書き）

次回更新：9 / 3 予定。

第十章 一話ノブライアン王子

うららかな春の陽気の中。

芽吹く草木の恩恵を受ける離宮星の宮の中庭で、ベアーズ王子とシルフィ、シーガル王子とカイザスが剣を交えていた。

使用するのは真剣。

一歩間違えば相手を傷つけてしまう緊張の中、それでも歓喜すらに
じませて剣を交える四人。

それを、固唾を飲んで見守る幼い方々。

護衛のキーツとボードは羨ましげに眺め、メイサは楽しげに見ていた。

同居が始まって10日目。

問題になっていた侍女は結局増やされることなく、今まで通りの3人で全部を賄っていた。しかし、細々とした仕事までは手が回らなくなり今まで不要としていた女官が2名追加された。厨房にも下働きが3名、洗濯婦や掃除婦も数人の下女が入ったと言っていたが、報告だけで直接顔は見えていない。

護衛も、シーガル王子とベアーズ王子の希望により増やされることもなかった。

ただ、この宮の敷地内から幼い方たちが本宮に出る場合にのみ近衛騎士が呼び出され、同行する事になっている。

尤も、教師たちもこの宮に呼ぶことになっているため、滅多なことでは本宮まで幼い方たちが行く用事など無いのだが……。

「ネフェリアさま、ボクも剣術を習いたいです」

真剣な表情で見ていたブライアン王子が、視線はそのままで声を出す。

視線の先には、ベアーズ王子の姿。

ちょうど、シルフィがベアーズ王子の剣を弾いたところだった。

「剣術を習うことが、悪いことだとは言いません。ですが、何の為に剣を取るかを考えなくてはいいけませんよ」

まだ幼いブライアン王子は、剣術の指南は受けていない。

教育の中に組み込まれてはいるらしいが、続けるも辞めるも強制ではない、とベアーズ王子は言っていた。

ブライアン王子が望めば、ベアーズ王子やシーガル王子は否とは言わないだろう。

しかし、目的もなく剣を取ることはして欲しくなかった。

甘い事だとは、わかっているけれど。

それでも・・・

「剣を取る意味、ですか？」

わたくしとブライアン王子の会話を聞いていたのだろう、キースが問う。

「ええ。ただなんとなく、で振るって良いものではないでしょう？
殺傷能力のある剣を取るには、そこに理由が必要だわ」

「剣を振るう理由・・・」

改めて考えたことなど無かったのだろう。

ボードまでも一緒になって考え出す姿に笑ってしまう。

「私は、ネフェリアさまのお側に居るために剣を取りましたね」

「私は、勉強が嫌で剣を取ったのが始まりですね」

「シルフィ、ベアーズ王子・・・」

負けてしまいました、と言いながらこちらに戻ってきたベアーズ王子とシルフィ。

シーガル王子とカイザスはまだ交えているが、そろそろ決着がつきそうだ。

「どうして、そのような話に？」

シーガル王子がカイザスの目の前に剣を突きつけ、決着がついたところでベアーズ王子が言う。

固唾を飲んで見守っていた王女さまたちが、わぁと歓声をあげて駆け出した。

「ボクが、剣術を習いたいと言ったのです」

詰めていた息を吐きながらブライアン王子が言う。

その表情はどこか期待に満ちていた。それに、ベアーズ王子とシルフィは苦い顔だ。

「ダメだとは言わないが、まだ早い」

「そう、ですね・・・。まずは基礎体力作りからですね」

まだまだ幼いブライアン王子。

このまま剣術を教えることも、この2人であれば可能だろう。

しかし、剣を振るう事の意味も理解しないまま持たせることを善し

としない2人の言葉に、安心した。

「体力・・・」

「はい。ブライアン王子、この剣を、持ってみてください」

納得できない、という顔のブライアン王子に、シルフィが鞘に納めた自分の剣を持たせる。

「うわぁっ」

シルフィが手を離れた瞬間、ブライアン王子はバランスを崩す。すぐにシルフィが支えたため大事では無かったが、ブライアン王子は目を見開いていた。

「重い・・・」

「はい、剣とは、とても重いのです。剣術は、これよりも重い剣を使って行います。ですから、まずはこれを持てるだけの体力・・・力を、お付けくださいませ」

「そうしたら、シルフィが教えてくれる？」

今は無理でも、持てる力がついたら、と言うブライアン王子に。

「私でよろしければ、喜んで」

につこりと笑って、シルフィが諾を返す。

それに嬉しそうにお礼を言うブライアン王子に、複雑な気持ちになる。

剣を持つことは、決して悪いことではない。王族の教養として、わたくしも一通りの型は習った。

護身用の短剣を持ち、時にはそれを振るったことも一度や二度ではない。

王族であるから抜いてはならない剣と、王族であるから抜かなければならない剣がある。それも、理解はしている。

それでも……

「剣の重さは、その質量だけではないと、ちゃんと教えます」

かけられたベアーズ王子の声に、思考の波に沈みかけた意識が浮上する。

「剣を振るう者の責任の重さ、剣を取ることの重大さ、その覚悟。それらは、わたしが責任を持ってブライアンに教えます」

シルフィとの約束に嬉しそうに笑い、シーガル王子とカイザスの元に駆けていくブライアン王子の背中をみながら、そう口にするベアーズ王子。

「わたしにそれを教えてくれたのは、シーガル兄上でした」

勉強が嫌だと、剣術の方が楽しいという理由で剣を取ったベアーズ王子に、諭したのはシーガル王子だったという。

だから今度は、それをブライアン王子に諭すのは自分の役目だと。そう言うベアーズ王子に、この方に任せておけばブライアン王子が道を外すことはない。

間違った覚悟で剣を取ることはないのだと、安堵した。

第十章 二話／クォーツ王女

護衛たちも混ざり、剣術の訓練になってしまった中庭。

それを中断させたのは、両手一杯に大きなバスケットを持ったバドクとドジャー。そして、食器と敷物を持ったアンヌとナビスだった。

「ネフェリアさま、昼食のご用意ができました」

「ありがとうございます。バドクもドジャーもありがとうございます。重かったですしょう？」

メイサが片付けたテーブルにバスケットを置く護衛に声をかければ、

「大半がこの人たちのお腹におさまるんですもの。持って当たり前です」

と、辛辣なナビス。

護衛たちの交代は、いつからか食事の後、となっていた。

2回の食事と1回のお茶を護衛たちと共にする。毎回食事は4人もの護衛が一緒なので、料理人たちは大変だろう。

文句も言わず、それどころか毎回『作り甲斐がある』と言うサキとヨイには感謝している。

「ネフェリアさま、今日はここでご飯ですか？」

剣技を真剣に見ていた幼い方々がこちらにやってくる。

「ええ、クォーツ王女。今日はお天気もいいですし、ピクニックにしましょう」

暖かな陽気と、気持ちのいい風。

芽吹く緑の恩恵を全身に浴びての食事もいいだろう、と用意させた昼食。

明日から勉強が始まる幼い方々の、最後の休日を楽しんでもらうための食事。

「ぴくにつく？」

「ええ、ミュゼ王女。お外で、皆でいただきますよう」

お嫌ですか？ と聞けば、嬉しい！ と笑顔で答えてくださるミュゼ王女。

「では、あの木陰にいたしましょうか。木の下に敷物を敷いて、食事しましょう」

中庭の中央にある大木。

もう少しで花をさかせるその木の下を指せば、幼い方たちは我先にと駆けて行く。

その後を、敷物をナビスから受け取ったボードと食器をアンヌから受け取ったキーツが追いかけて、ナビスとメイサが続く。

「ありがとう、アンヌ。大変だったでしょう？ サキとヨイにもお礼を言っておいてね」

付いてきていた女官に後片付けを指示し終えたアンヌに声をかければ、とんでもない、と返される。

「サキとヨイも、新しい調理法を覚えていただけたと喜んでおりました。思考錯誤しながらだったので作りすぎてしまった、と言って

おりましたよ」

ドジャーとバドクの持つバスケットを指して言うアンヌ。

頼んでおいた料理があの中いっぱいに入っているのであれば、確かに多いかもしれない。

「多いぐらいが丁度良いわ。いっぱい召し上がっていただけますもの」

きやあきやあと大きな敷物を敷くボードとキーツを手伝う幼い方々と、それを見守るシーガル王子とベアーズ王子。いつの間にかカイザスが食器の入った籠を持たされ、ナビスの指示を受けている。

シルフィとアンヌと共にゆつくりとそちらに向かえば、さわさわと囁くように伝えられる自然たちの声。

「アンヌ。野イチゴ摘みは幼い方たちのお気に召すかしら？」

「野イチゴ、ですか？ このあたりにございましたか？」

「ええ。裏の林の入り口付近に群生していて、ちようど食べごろだそうよ」

たった今伝えられた情報を話せば、アンヌはニツコリと笑う。

「珍しい経験ですもの。きっとお喜びになれますわ」

そのようにご用意いたしますね、と言うアンヌにお願いをして。

「ジャムとパイとジュースね」

「夕食後のデザートですね」

シルフィと、こっそりと予定を立てて。

やっと敷き終わった敷物に座る幼い方たちのもとに歩を進める。

「おいしいです！」

嬉しそうに言うキルギス王女の手には、野菜をたくさん挟んだモノ。

「これもおいしい！」

「こっちもおいしいです」

大きく噛り付いたツアイス王女の手には、焼いた卵を挟んだモノ。

両手で持ったソレを口にして言うブライアン王子の手には、蒸した鶏肉を野菜と一緒に挟んだモノ。

「これもおいしい！！」

小さくカットされたソレを食べるクォーツ王女の手には、チーズと焼いたベーコンを挟んだモノ。

「これがおいしいの！」

キラキラと目を輝かせるミュゼ王女の手には、柔らかく潰したジャガイモを挟んだモノ。

大小様々な大きさのパンに挟まった、多様な具材。

外で食べる昼食にと用意させたのは、サンドイッチ。

野菜やお肉、チーズや卵を多種に加工し、またはそのまま見栄え良

く挟んだソレは、幼い方たちのお気に召したようだった。
シーガル王子もベアーズ王子も護衛たちも、珍しそうに、しかし美味しそうに口にしていた。

「ネフェリアさま、このお水は普通のお水とは違います」

少し離れたところに座っていたクォーツ王女が、グラスに注がれた水を飲んで首をかしげながら近づいてくる。

「ええ、クォーツ王女。それは、少しのレモンと砂糖で味を調えたものです。飲みにくいですか？」

色々な味のサンドイッチの邪魔をしないように、と用意したレモン水。

香り付け程度にしか手を加えなかったが、飲みにくかっただろうか
と聞けば、

「美味しいです。ネフェリアさまは、美味しいものをたくさんご存じですね」

すごいです、と言われる。

「クォーツも、ネフェリアさまのように色々知りたいです」

教えていただけますか、と聞くクォーツ王女の瞳は真剣で。
幼い方の、ただの興味以上の何かを感じる。

「なぜ、お知りになりたいかをお伺いしてもよろしいですか？」

お教えすることは簡単だけれど。

大国の王女さまが、わざわざ知りたいという内容ではないと思う。

「おねえさまが、美味しい、と言うからです」

言いながら、視線をキルギス王女へと向けるクォーツ王女。

「キルギス王女が、ですか？」

「はい。ネフェリアさまにいただいたものは、全部美味しい、と言っていました。ここに来てから、おねえさまはいっぱい食べます」

体の弱かった姉姫キルギス王女は、好き嫌いも多く後宮で暮らしていたころはほとんど食事をしなかったという。そんなキルギス王女も、今では他の方たちと変わらないほどの量を召し上がる。

それが、クォーツ王女は嬉しいのだと言う。

大好きな姉姫だから、たくさん食べて元気になるのがとても嬉しいのだという。

「キルギス王女に差し上げるために、お知りになりたいのですか？」

もしそうならば、ここで一緒に食べればいいのではないか、と問えば、クォーツ王女は首を横に振った。

「ネフェリアさまの食べ物、元気になります。だから、病気の人に、あげたい、です」

上手く言葉にならないのであろう。

考えながら、それでも一生懸命に言葉を紡ぐクォーツ王女。

単語を繋げただけの拙い言葉。そこから伝わってくる強い思い。

「ご病気がちだったキルギス王女が、わたくしの作ったもので元気

になられたから、今度はそれをクォーツ王女がお作りになって、病気で塞いでいる人々に差し上げたい、と？」

「そうです。トタンが、前のおねえさまのように食べなくて死んでしまう人が多い、と言っていました。だから・・・」

キルギス王女の主治医であるトタンが、以前クォーツ王女に語って聞かせたという。

このまま、何も食べなければ死んでしまう、と。市井には、それで死んでしまう人々がたくさんいる、と。

だから、何も食べれないのは苦しいから、美味しいものを作って、食べさせたいのだと言うクォーツ王女。
幼いからこそその無謀ともいえる願い。

——けれど、わたくしは・・・

「クォーツ王女。病気の民たち1人1人に、王女自らが食べ物を作って配るのは不可能です」

ハッキリと言うわたくしに、クォーツ王女の瞳が揺れる。

「しかし、クォーツ王女が指示し、配らせることは出来るでしょう」

続くわたくしの言葉に、今度は喜色が浮かぶ。

「でも、クォーツ王女。今の王女では、それを指示する事はできません」

「どうして、ですか？」

「病気によっては、食べてはいけない物もあります。その人の体調

によって、食べたら死んでしまうものもあります。それをクォーツ王女はご存じですか？」

胃腸が弱つているところに牛乳は刺激が強すぎるとか、何日も食べてない時に固形物は逆効果だとか。

他にも、色々と気を付けなければならないことがある。

「知りません・・・」

しょんぼりとしてしまうクォーツ王女。

自身が望んだことは無謀だと、不可能だと気付いてしまったのだろう。

「ですから、クォーツ王女。まずは、それを知ることから始めましょう?」

「え・・・?」

「病気の民たちを救いたい、というクォーツ王女のお心は素晴らしいものです。だから、一日でも早くそれができるように、必要なことを今からお勉強しましょう」

他の者ならば、こんなことは言わないだろうけど。専門の者に任せれば事足りることを、わざわざ王女自らが考えるまでもない、とお答えしなければいけないのだけれど。

それでも、知ることには悪い事ではないから。

どんな形であれ、自国の民の事を考えるのは王族の務めだから。民を大切にする心は、無くしてはいけないものだから。

「お勉強すれば、ネフェリアさまは教えてくださいますか?」

「もちろん、お教えいたしますわ」

実現させるのは、簡単なことではないだろう。
ただ“配る”にも、様々な整備が必要になる。幾人もの人の手が必要になる。

国家予算を組む必要のある計画になるだろう。

まだ、何の仕事にも就いていないクォーツ王女。

あと数年もすれば、セナリス王女が外交に携わっているようにクォーツ王女も国の運営に携わるようになる。その時に、少しでも選択肢が増えていれば、と思う。

「ありがとうございます」

満面の笑みでお礼を言い、もとの場所に戻るクォーツ王女は、その大変さを理解してはいないだろう。

「ありがとうございます、ネフェリアさま」

「シーガル王子・・・余計なことを申しました・・・」

申し訳ありません、と頭を下げる。

わたくしが、軽く約束をしていい事ではないのは承知していた。

「とんでもありません、ネフェリアさま。あの子も王族。どんな形であれ、民の事を気に掛けるのはいいことですから」

幼いゆえにまだしっかりしていない考えも、色々なことを学び、経験するうちに確固たるものとなるだろう、とシーガル王子は言う。
そうであればいいと、そうであってほしい、と思う。

楽しげに食事を再開したクォーツ王女を見ながら、王女のいく先に

光在らんことを祈った。

第十章 三話／ミュゼ王女

昼食を終え、提案した野イチゴ摘み。

きちんと管理された果樹園ですら経験のなかった幼い方たちは、ア
ンヌが用意した小ぶりの籠を持ってそわそわと落ち着かない。

「このあたりに、野イチゴがあるのですか？」

食べたすぐは動いてはいけない、と注意を受けた幼い方々を横目に、
ベアーズ王子が言う。

「はい。裏の林の入り口付近に、群生しているようですわ。ちょう
ど食べごろだと、皆さまに食べてほしいのと言っていました」

「のイチゴ、すぐにたべれる？」

「ええ、ミュゼ王女。赤く熟したものは、甘くて美味しいですよ」

早く食べたい！ と言うミュゼ王女に笑う。

今しがた昼食のサンドイッチを食べ終えたばかりなのに、果物は別
腹らしい。

「言っていた・・・？」

「はい。食事の前に、風が言葉を届けてきたのですわ」

誰が、と聞くベアーズ王子に言えば、

「守護様のお墨付きであれば、本当に美味しいのでしょね」

楽しみです、と笑う。

初めの頃はいちいち驚いていたベアーズ王子も、一緒に暮らすようになってだいぶ慣れたようだ。

「ネフェリアさま、確認してまいりました。テラス側の裏あたりにございました」

「ありがとうございます、ドジャー。では皆様、参りましょうか」

危険はないであろうが、念のため、と確認に行かせていたドジャーが戻り、待ちきれない様子の幼い方々に声をかければ、「はい！」と元気な返事と共に、籠を片手に忙しく靴を履く。

それでも年下の世話を焼き、決して置いて行こうとは思わないその姿に心が温まる。

「あちらにナビスがおりますから、ナビスに聞いてくださいませ」

駆けはじめた幼い方々にそう声をかけて、わたくしたちも足を向ける。

ドジャーは幼い方々を追いかけていった。

「ネフェリアさまは、野イチゴ狩りの経験が？」

「ええ、ベアーズ王子。オルフェウスに居た頃は時期になれば必ず」

「祈りの塔の周りや、ネフェリアさまの宮のお庭は果樹園になっていましたからね」

「・・・果樹園、ですか？」

「はい。ああ、花畑もありましたよ」

真剣な顔で答えるシルフィに、理解が追いつかない様子のベアーズ王子。

二人のやりとりに、笑ってしまう。

「自然たちの恩恵ですわ。花たちは競って咲き誇り、木々たちは実りをもたらず」

「ネフェリア様の周りには、年中花々が咲き誇っていましたね」

懐かしい祖国での光景。

わたくしには普通であつた、非日常。

それをこのように穏やかな心で語れる自分に驚いた。

「では、林の野イチゴも、その恩恵ですわ」

「そうでしょうか？」

「ええ。確か、あの林のあの場所には野イチゴは無かつたはずですから」

クスリと笑つて告げられるシーガル王子の言葉に、

「そうですね・・・ 確かに、昨年までは無かつたですね」

ベアーズ王子が返す。

「ならば、それは幼い方たちへのプレゼントですわ」

目の前には、嬉しそうに、楽しそうに野イチゴを狩る幼い方々。木々の隙間から漏れるやわらかい日差しと、吹き抜ける清涼な風。さわりと揺れる草たちは幼い方々の邪魔をせぬように道を開く。

自然たちに守られた空間。 自然たちの、恩恵。

「ネフェリアさま、のイチゴ、いっぱいです！」

ほら、と手に持つ野イチゴを見せてくださるミュゼ王女。
赤く熟れた、ちょうど食べごろの野イチゴ。

「ほんとうに。美味しそうなのがいっぱいですね」

「すぐ、たべれますか？」

「ええ。食べられますよ」

食べごろだと主張をする野イチゴをひとつ摘み、ミュゼ王女の口に
持っていけば。

「あまい！」

何の抵抗も無くお口を空けてくださるミュゼ王女。

可愛い笑顔とともにもたらされた言葉に、こちらも自然と笑顔
になる。

この幼い王女様は、いつ何時も笑顔を絶やさない。

「このままでも美味しいですが、ジャムやパイにしたらもっと美味
しいですよ」

シルフィにも食べさせてもらうミュゼ王女に言えば、

「つくりたいです！」

と元気なお返事。

そんな王女に、また笑ってしまう。

「では、たくさん野いちごを摘まなければ」

これだけでは足りませんよ、と言いながら頭を撫でてはにかみながらも駆けるミュゼ王女を見送った。

「ミュゼは、あのように笑うんですね」

ぽつりと漏らされたシーガル王子の言葉に視線を向ければ、何とも形容しがたい表情の王子が二人。

「ミュゼ王女は、いつも笑顔でいらっしますが・・・？」

拗ねたり、怒ったりもするが、圧倒的に笑顔の多いミュゼ王女。

「・・・あの子は、笑っていればいい、と言われて育ったのです」
「笑って・・・？」

「はい。一番下の子なので、構う手が多すぎたのでしょう。気づけば、あの子に表情はなかった」

ころころと表情を変えるミュゼ王女の無表情を見たことがないわたくしには、信じられなかった。

「乳母や侍女にかしずかれ、私たちが手をかける。それがあの子にとって当たり前で、気づけば感情の起伏の少ない子になっていました」

感情の起伏が少ないということは、表情にも変化が現れないということ。

自身こそが痛そうに、そう語るシーガル王子。

「王族ですから、感情を表に出すのは好ましくありません。しかし、それは決して無表情でいろ、というわけではないのです」

私は男で騎士ですから、無表情でいろ、と言われましたが。と言うベアーズ王子。

それは、わたくしにも覚えのある感覚。

決して何も感じていないわけではないが、いつの頃からか感情が表情と一致しなくなった。

喜怒哀楽のうち、一番はじめに隠すようになったのは怒。怒れば怒るほど、口角を上げて笑みを作った。次に隠したのは哀。悲しみは心に秘め、涙をこらえて微笑んだ。

王族であるから、人には見せてはいけない感情があると、自然と学んだのだ。

「ミュゼは、見事に無表情でした。それではいけない、とキルギスやクオーツと遊ばせ、外に出したのです」

「だんだんと感情の起伏は出てきたのですが、表情が追いつかず。ならば、笑っていないさい、と」

病床で淡く微笑むキルギス王女と、そんな姉姫を身近に声を出して笑わなかったクオーツ王女。そんな二人の隣で、ミュゼ王女は笑うことを強制されたという。

「笑顔という無表情のミュゼをずっと見ていました。だから、あの子が心から笑うのがとても嬉しいのです」

「声を出して笑い、怒り、拗ねる。そんな、子供らしさが嬉しいのです」

姉兄たちと摘み食いをしながら、楽しそうにするミュゼ王女を見ながら、シーガル王子とベアーズ王子は言う。

その姿は、妹を思っただの兄。

「また、あの子に表情を隠すような教育はしたくはないのですが、ね」

「それも、笑え、とは」

王族の行儀作法の基本は、自分の感情を隠して表情にも出さないこと。笑顔という仮面を張り付けて、常に前を向くことを教え込まれる。

せつかく年相応の顔をするようになった幼い方に、そんなことはしたくない、という兄たち。

甘いことだとは思っているのだろう。その葛藤が手に取るように見える。

「王族としての心得ならば、すでにミュゼ王女はお持ちでしょう。それでも足りないようならば、兄君たちがお教えすればよいのですわ」

一番下ということは、手本となる姉兄がいる、ということ。

教育係からの義務的な教えではなく、姉兄の実践の方がよほど良い見本になる。

そう言えば、シーガル王子もベアーズ王子も困ったように笑った。

「心得は教えることが出来ても、作法や笑顔は・・・」

作法は王子と王女では違うし、この二人は王位継承者であるから、また特別だった。

笑顔ではなく無表情を求められているこの方たちには、無理だろう

と合点がいった。

「わたくしでよろしければ、お教えいたしますわ」

そのかわり、王族としての心得と在り方、立ち振る舞いだけですが、と付け加えて。

それだけで十分だ、というシーガル王子とお約束をした。

それでも、この星の宮に居る時間は、
素直なお心のままに振る舞ってほしい、と願わずにはいられなかった。

第十章 四話／ツアイス王女

摘んできた沢山の野イチゴでお菓子を作り、出来たてのお菓子でお茶をする。

今回作ったのはスコーン。

潰した野イチゴを生地に混ぜたものと、普通のもの。

小皿に一緒に作ったジャムを添えて、幼い方たちが配り歩く。

お菓子を作っている間、自室で仕事をしていたシーガル王子とベアーズ王子。

息抜きにお茶を、と誘った幼い方たちに、お礼と共に付いてきた。

「ネフェリアさま、これは何というお菓子ですか？」

上品にフォークを動かしながら問うシーガル王子。

「スコーンと言います。甘みを抑えてありますので、ジャムを付けてお召し上がりください」

幼い方々には甘い野イチゴのジュースをご用意したため、お茶請けのお菓子は甘みを抑えたスコーンを選んだ。

シーガル王子やベアーズ王子には紅茶をご用意したため、甘みが足りないかもしれない。

「このジュース、美味しいですね」

幼い方々の飲むジュースに興味をひかれたベアーズ王子が、自分にもと用意させたジュースを飲んで言う。

野イチゴと牛乳と砂糖で味を調えたジュースは、わたくしでも甘い

と感じる味のはずだが・・・。

「ああ、甘い物好きなんです。美味しいですよ」

言いたいことが伝わったのだろう。

笑って言うベアーズ王子にこちらも笑う。

きやいきやいと賑やかな若い方々と、それを見守るシーガル王子とベアーズ王子。

隣に座るシルフィとそんな様子を眺めていれば、感じる視線。

その視線の先には、ツアイス王女。
じいっと、こちらを見つめている。

—— 見ているのは、シルフィ？

視線の先を追えば、そこにはシルフィ。

シルフィも気付いていたのか、互いに顔を見合わせて首をかしげた。
ツアイス王女が、シルフィを見つめる理由がわからない。

「何かしら？」

「さあ・・・。何でしょう？」

お互いに心当たりは無いと首をひねる。

しかし、ツアイス王女の視線は外れない。

その瞳は、憧憬に似た・・・？

シルフィも、決して不快ではない種類の視線だからこそ困ってしま
うのだろう。

逸らすことなく見つめられ、困惑気味だ。

どちらうさまでした！　とお行儀のいい声に顔を上げれば、食べ終わった幼い方々が席を立つところだった。
ツァイス王女もその声に続いて席を立ち、シルフィの側に駆け寄ってくる。

——何事かしら？

シルフィしか見ていないツァイス王女。
その行動をじっと見つめていれば、

「シルフィ、ツァイスの先生になってください！！」

突然、頭を下げられた。

啞然とするシルフィと、呆然とするシーガル王子とベアーズ王子。
幼い方々は、なぜか嬉しそうにはしゃいでいる。

「ツァイス王女。シルフィに何を教わりたいのですか？」

固まったままのシルフィを見つめるツァイス王女に問う。
その瞳はキラキラと希望に満ちている。

「全部です！」

シルフィのようになりたいのと言うツァイス王女。
わかるようなわからないようなその答えに、シルフィがやっと口を開いた。

「私のように、とは？」

「シルフィは、いつもネフェリアさまと一緒にしよう？」

「はい、一緒ですね」

「わたしも、そうやって一緒にいたい」

「どなたと、ですか？」

「セナリスお姉さま！」

セナリス王女と一緒に居ることが、どうしてシルフィのようになる
事と繋がるのか。

理解の範疇を超えたその理論に、再びシルフィが固まる。

「ああ……。そうか」

「シーガル王子？」

納得を見せるシーガル王子に説明を求めれば、苦笑を返された。

「ツアイス。それでは、シルフィ殿も困るだろう？ 順を追って説
明しなさい」

あくまで自分で説明させようとするシーガル王子。

その言葉に、ツアイス王女が考えるように黙り、そして・・・

「ツアイスは、セナリスお姉さまと一緒に他国でお仕事をしたいの
です。でも、お姉さまはツアイスにはまだ早いと言いました。ツア
イスが、もっとお勉強して、お作法も護身術もできるようになっ
たら連れて行ってくれると言いました。だから、シルフィのようにな
りたいのです」

一気に言い切ったツアイス王女。

何が『だから』なのかわからないが、セナリス王女と一緒に外交に出たいのはわかった。

「セナリス王女とのお約束が、どうして私と繋がるのですか？」

シルフィも同じ疑問を持ったのだろう。

「シルフィは、お作法が綺麗なの。ネフェリアさまと一緒に立っている姿が綺麗なの。それに、シルフィは強い。カイザスやベアーズ兄さまよりも強い」

だから、教えてほしいと言うツァイス王女。

「しかし、ツァイス王女。私は王族ではありませんから、私の作法は本来のツァイス王女が学ぶべきものとは違います。それに、セナリス王女がおっしゃる護身術は、私の剣術のようなものではないでしょう」

求められていることはわかったが、それならば自分では無理だと、やんわり断ろうとするシルフィ。

ツァイス王女の求めるモノは、本来の王族の姿ではない。

「いいのです。ツァイスは、王女としてお姉さまと一緒に並ぶのではないのです」

だから、シルフィのようになるのだと言うツァイス王女。

「騎士にでもおなりになるのですか？」

「はい。ベアーズお兄さまがシーガルお兄さまと一緒に居るように、ツァイスも騎士になってセナリスお姉さまと一緒に居ます」

だから、先生になってください、と頭を下げるツァイス王女。
困惑顔でこちらを見るシルフィ。

ベアーズ王子は楽しげにこちらを眺め、シーガル王子は静観している。

そこに否定の色がないことから、反対はされないのだろう。

「ツァイス王女。まずは、セナリス王女が仰ったように王女としてのお勉強をなさってください。そして、剣術や護身術を始めるために、まずは体力作りをいたしましょう」

「ブライアンのように、ですか？」

シルフィのことばに、ツァイス王女が首をかしげる。

今朝のブライアン王子とのやり取りを知っているらしい。

「はい。ブライアン王子にもお約束致しました。ツァイス王女に剣術や護身術に耐えうるだけの体力がつけば、私がお教えいたしましょう」

ブライアン王子とは違い、剣術だけを求めているわけではないツァイス王女。

それでも、まだ幼いこの方には早すぎる。

「お作法は？」

「まずは、王女としてのお作法を完璧にしてください」

きつぱりと言われて、肩を落とすツァイス王女。
お転婆なこの方には、王女さまのお作法は堅苦しすぎるのかもしれない。

「ツァイス王女。いくら騎士としての随行でも、ツァイス王女はエシュロン国の第三王女殿下。セナリス王女と他国を訪れるのならば、王女としての立ち振る舞いも求められます。セナリス王女に認めていただくためにも、王女としてのお作法は必要ですよ」

だから、お勉強と一緒に頑張りましたよと頭を撫でれば、渋々ながらも頷くツァイス王女。

シルフィとの約束を取り付け、待っていた幼い方たちと食堂を後にした。

「ありがとうございます、シルフィ殿」

成り行きを見ていたシーガル王子からのお礼に、シルフィが苦笑する。

「勝手をいたしました。しかし、なぜ騎士なのですか？」

その理由を知っているであろうシーガル王子に問えば。

「ツァイスは、セナリスにとっても懐いているのです。しかし、セナリスは外交官。何日も国を空けて会えない日も多い。それで、どうしたら一緒に居られるかをあの子なりに考えたのでしょうか」

「それが、騎士だった？」

「いえ。騎士、というよりは、シルフィ殿だったのでしょう。常にネフェリアさまのお隣に控えるシルフィ殿に理想をみたのでしょうか」

深い意味などありはしない、と言うシーガル王子。

そこにあるのは、大好きな姉と一緒に居たいという純粋な思い。

「外交手腕の方が秀でているようであれば、セナリスと同じ外交官に。まだまだ勉強を始めたばかりで、どこに才能があるかわからないのです」

だから、できれば色々試させたかったというシーガル王子。

考えて出した結論であつても、早いうちからそれ一本に絞りたくは無いという。

「しかし、ツアイスはかなりお転婆ですからね。ブライアンと一緒に騎士になるでしょう」

だから、一緒に剣術を教えてあげてくださいね、と言うベアーズ王子。

それで良いのなら、と了承するシルフィ。

確固たる意志でもって定めた自身の道ならば、そこに幸あれと。
ツアイス王女の未来に加護を祈った。

第十章 四話ノツアイス王女（後書き）

次話、キルギス王女で十章終わり。
十一章は目指せラブ！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7959j/>

月神の姫 太陽の王子

2011年10月30日07時40分発行